
クリサリス・エマージュ 仮面ライダー カブト 外伝

鉄槻 緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリサリス・エマージュ 仮面ライダー カブト 外伝

【Nコード】

N5449B

【作者名】

鉄槻 緋色

【あらすじ】

ここは、天道総司が巨大隕石を回避するためハイパークロックアップによって幾度か時間を巻き戻し、歴史を改変された世界のうちのひとつ。『有り得たかもしれない可能性』はその枝葉を広げ、『地球壊滅』は免れたもののそこには『ネオゼクト』が存在し、それによって発達した技術はかつてよりも多種多様な「ライダーシステム」を産み出すこととなった。天道総司は自分の目的の為、今でもどこかで戦っている。これは、産み出された多様なライダーシステムを以て戦うある人物たちによる、ワーム事件のうちの、ほんのひ

ۛۛۛ

第1話（前書き）

こちらは、基本的に鉄槻オリジナル&借用オリジナルキャラクターでのみ構成される『仮面ライダー カブト』の外伝的ストーリーです。世界観に若干のズレがあるほか、原作のキャラクターはほとんど出てきませんので御注意下さい。

第1話

星空も霞むほど痛烈な地上の光の洪水を見下ろしながら、そろえた靴を置き去りにして細い人影は冷たいコンクリートの絶壁へと足をのせた。

どうしてこうなってしまったのだろう。浮かぶ思いは、後悔ではなく、諦観とこれからの道行きの確認。

べつに未練もなにもない。ただ早く楽になりたい。それだけ。吹き荒ぶ高所の強烈な寒風にはためく上着の裾もそのままに、人影は泳ぐように向かい風へと身を蹴り出した。

高層ビルの屋上から投身した青年の身体は、130メートル下のアスファルトに激しく叩き付けられ、直後緑色の炎を撒き散らして爆発した。

あとには塵ひとつ残らない。

数寄屋 亮介・1

「ちゅーかさー。カネ、貸してよ」

「ひつ……！？」

底冷えのする声の途中で脈絡なく突き倒され悲鳴を上げる。

白昼の街中、店の間の路地に押し込まれ、5人の少年に取り囲まれている数寄屋^{すきや・りようすけ} 亮介は、人生幾度目かにしてまったく慣れそうもない恐怖に完全にすくみあがっていた。

「おっ！ありがとよ。悪いね」

しゃべりながら肩を踏みつけあちこちに蹴りを入れ、勝手に懷やポ

ケツトをまさぐりだす少年ら。発言内容など建前。問い掛けには返答しなければと思考する亮介は翻弄されるばかり。それでも精神的に深刻な陵辱であった。

「（怖い！？なんで俺ばかりこんな……！？）」

こんなことは早く終わればいい。だが彼らはなぜか亮介自身が財布を出すことすら阻害し小突き続けていた。

『ライダァーキーク！』

その時突然、唐突に割り込んだ黒い颪風が少年らを『殴り飛ばした』。

「ぎゃっ」「ぐべ」

「うらァ！キック！キック！」

喚きつつその男はなぜか少年らをめちやくちやに殴り続ける。

「ぎゃあっ」

「オラ立てえッ！立ちやがれえッ！」

「ひいっ！？ たす、たすけ」

「ンなこた訊いてねえ！」

一方的な暴虐。まるで獲物を食い散らかす猛獣のごときその男は、だが体格差を見れば実に大人げないものであったが。やがて蹴転がされる勢いのまま逃げていった少年らを見送ったその男は、じろりとその場に残った亮介を睨め付けてきた。

助けてくれたはずのその男の眼差しは、なぜか陰悪に歪みつつ少年らとはまた異質な凶暴さをたたえていたが、それでも礼を言おうと亮介は居住まいを正した。

「あ、あの、ありがとうござ」

「テメエもだッ！？」

言葉の途中で、なぜか亮介までもが叩き倒された。

「されるがままなんて見ててムカツクんだ！刃向かう術すらねえくせに居座ってんじゃねえ！逃げろおら！逃げてみる！」

「ええええええ！？」

右に左にと蹴たぐられる。

「だいたい行動にポリシーのねえやつぁ生きてんのが犯罪だ！とつとと立たねえと執行猶予ナシでこの場に埋め」

「言えた義理かこのバカ！」

ゴツ！と鈍く重い音に顔をあげてみれば、今の凶暴男は壁に張り付いて動かなくなっており、その頭を高々と上げた足で踏みつけている別の男が現れていた。

黒のスーツに額にバンダナを巻いたその先鋭的な優男は、呆然としている亮介を一瞥してなにかを呟くと、壁の凶暴男の頭を鷲掴みにしてこの路地から立ち去っていった。

「な、なんだっただ……」

伊達 新星・1

「はなせツ！？はなせって！」

件の路地からだいぶ歩いた所でようやく伊達^{だて・しんせい} 新星の頭は投げ捨てられるように解放された。

「なあにしゃがんだデメエ！」

胸倉に延びたその手を掴んで押し下げそのバンダナの男・織田^{おだ・ひで} 秀成^{なり}は新星のつま先を踏みつけてから頭突きを喰らわせて黙らせる。

「再三再四の呼び出しに圏外のアナウンスで茶あ濁してナニ遊んでんだおまえは！？」

「……ああ！？ケイタイなんか鳴ってねえぞ！？」

しかめっ面で尻ポケットから樹脂と電子部品の圧壊したカタマリをつまみ出す。

「あれ？」

「またかあツツ！？」

掴まれた新星の頭が近くの電柱に叩き付けられた。

「まてまて！？これはホントに覚えがね」

「ケンカのとばっちりしかねえことも分かつてる！」

二度、三度と繰り返し電柱に叩き付けられる新星。

「あーもーいっそヒイロノカネでケイタイ作ってくれよ」

「おまえの頭蓋のほうがよっぽどいい素材だろうが。」

とうとうへし折れた電柱をあとに歩き出す二人。

「仕事、つつつか命令だ。」

「あ？」

「『クリサリス』へ行け。」

七年前。進路上に地球を捕らえた巨大隕石という未曾有の危機が現れた。

だがそれは、あわや地球衝突という直前、突如その進路上に『出現』した同規模の新たな巨大隕石との衝突による双方の壊滅によって免れた。

が、細かく砕けた破片が大気圏で次々と燃え尽きてゆく中、唯一残った大型の破片が東京・渋谷を直撃してしまう。

『本来であれば地球壊滅』という観点からして、果たしてそれは被害甚大と見るか僥倖と見るか。

東京湾内に建造されたメガフロート『クリサリス』。

本来ならば真つ先に復興されるべき渋谷の街が秘密組織ZECTによって封鎖・管理されていることを知らない一般人からすれば『ほかに金を回すところがあるだろうに』との反感を覚えるものだが、それでもこのような大規模な興業は色々と活性化を促す。

様々な試みを盛り込まれた『クリサリス』には開発に参入した各企業の施設や多様なアミューズメントパークのほか居住区にマンションまでも建築され、すでに多くの人々が移り住んでいる。

そんな新興の活気溢れる人工島の外縁部、組まれた鉄骨がむき出しの工事現場に、台場^{だいば・かずま}和馬の姿があった。

台場 和馬・1

筋骨隆々たる体躯が建材の束を担ぎ上げてのしと歩く。

「おおい新入り！ムチャすんな！」

「問題ない！わたしにかかれはこの程度は朝飯前だ！ もっとも、つい先ほど昼飯を喰ったばかりだがな！」

「そんなん担いでなかったら蹴り殺してるところだぞてめえ！？いつの時代のネタだ！？」

はっはっはとやたら豪快な（だけの）笑い声をあげる建材の山が、一切聞いたふうもなくそのまま歩み去っていった。

肉体労働系に自らの適性を見いだしている和馬は、大学に通う傍らあちこちの工事現場に顔を出してはバイトに精を出している。

全ては自分を高めるため。どう『高める』のかの細かいことまでは気にしていないが、きつとこうすることが自分の魂をどこか高みに導くのだと根拠のない自信と夢と希望をがちり握り締めてこうしている。

そんなむやみに主観的に充実した生活を繰り返す和馬に、最近新たにやることが増えた。

「ふむう！一日一歩・三日で三歩などと悠長なことを言っていないで行けるなら行けるところまで行ってしまうばよいのだ！行ける！まだまだ行けるぞー！」

指定場所への建材の移動を済ませ、当の建材に片足をかけて独演をぶちかましていた和馬の耳に、その最近聞きなれた音が聞こえてき

た。

その音は和馬の頭上を通過し、目の前の柱に取りついて停止する。

「おお大吾郎！」

その場の思い付きでつけた名前を呼びかけたそれは、機械仕掛けのセミであつた。

とある成り行きから『あるモノ』を入手して以来つきまとうその相棒は、主が己を認識したのを確認したかのように、呼びかけられたところで再び飛び立つてゆく。

「ふむ」

どうやら、その『やること』のお出ましのようだ。

本土から『クリサリス』へと至るいくつもの通路の内のひとつ。

各種ケーブルと整備員が通る広い地下通路を、知性に欠ける緩慢な動作で蠢く複数の二足歩行の異形がもそもそと移動していた。

『擬態もしてねえと、ここくらいしか通るトコねえもんな』

そこに突如降り注いだ声音に、異形たちの動作が止まる。

まるで己が目を覆い嘆き悲しむように見える面相を振り仰ぎ、底なしの眼窩で見上げたそこに。人間の男がひとり、いた。

伊達 新星・2

こちらを見上げたワーム・・・七年前の隕石から沸いて出てきたという地球外生命体・・・の群れを見下ろし、伊達 新星は犬歯をむき出した。

「ここからは先にもあとにも行かせねえ。消えな」

ジヨウントの通路を抜け飛来した巨大な玉虫型のゼクター『ジェイルゼクター』を左手でキャッチ。待ち伏せていたキャットウォーク

上に立ち上がり、右手の甲を眼前にかざす。

その右手は、手首までもを巨大なリングで覆う機械的なグローブで覆われていた。それこそが伊達 新星のイクイップデバイス『ジェイルグローブ』。

その手の甲の、紋章のように配置されたセットアップサークルに左手のジェイルゼクターを横向きに装着。

「変身！」

叫ぶと同時に眼前で組み合わせられた両手を腹まで押し下げる。

その動作の過程でジェイルゼクターが定位置に回転し（玉虫の尻が前を向いている）セットアップが完了する。

《ヘンシン！》

音声が認証を告げた瞬間、右手首から全身へ順次ハニカム構造状に展開形成される装甲。

そして現れたのは、シルバーの地にアイスグリーンのラインで彩られた重甲冑『仮面ライダー ジェイル・マスクドフォーム』であった。

続いて思考トリガーを入力。

《フォースフィールド。》

認証後、タキオン粒子を力場に変換し体表面に展開。ジェイルが虹色の輝きに包まれた。

この輝きこそが既に破壊力。

『フン！』

呼気とともに力場に包まれた拳を足下に叩き付け、ジェイルは破砕したキャットウォークの部品ごと数メートルを落下し着地した。

『おらああ！』

ワームの群れに飛び込み、手当たり次第蹴散らしてゆく。

取り囲む多勢のワームのうち一体が背後から飛びかかってくるが、接触した所から火花を散らし、吹き飛ばされたのは当のワームのほうだった。

これがジェイル・マスクドフォームの妙技、触れるだけでダメージを与える破壊の力場、攻防一体の攻性障壁『フォースフィールド』。チャージアップ後の変換エネルギーに等しい威力を広範囲に渡り放出し続けているが当然消耗も激しく長時間は保たない。

本来は接触の瞬間に局所のみ発動させる打撃力増強装備であり、今も装着者をサポートする補助知能がみるみる減少していくエネルギーインジケーターを新星に示すが、

『空っぽになるまでに片付けりやいいんだろぅが！』

当の新星はお構いなしだった。既に群れの半数を撃破したが、その覇気を以てしてもカバーできる相手には限度がある。

通路の『クリサリス』側にいたワームの数体がとうとう逃走を開始した。

『ああ！？待てコラ！』

『……天が呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ。人はソレを幻聴と呼ぶ。』

朗々と詩う、太いというか ぶつという声が暗い通路に響き渡る。

それは戦闘中の新星の耳にも聞こえてきた。

『ヒトを喰らう悪逆の徒を殲滅せんと、己の意志にてここに立つ。

聞け異形の者共！我が名はちやぶ台のある場で和む馬……、いやちよつと待て、上手くまとまらなかった』

差し上げた指先をおろして首を傾げたのは、異様に巨大な体躯。通常よりも二回りも大きいマスクドフォーム仮面ライダーだった。

『なんだアイツは！？』

後ろから殴られるのも無視して凝視してしまう新星。

全体を丸いパーツで構成され、シルバーの地に紅茶色のラインで彩られ、各部を三角形で構築されたパターンが覆う。

だが何よりも特徴的なのは、通常はない下半身まで覆うマスクドアイマー。まさに全身甲冑である。

そしてその腹の中央、ベルトバックルに設置されたゼクターは、セ

ミ型。

首を傾げて困る巨体ライダーの脇を、そそくさと通過しようとするワーム。

だが。

『こら。まだ話は終わってないぞう!?!』

次の瞬間、無造作に横に振った巨体ライダーのゼクトクナイガン・アックスモードの刃が、叩き潰したワームの死体ごと通路の壁に埋め込まれた。

緑色の爆炎をあげて消滅するワーム。

『む?』

そしてあるうことが引き抜かれたそのアックスは半ばへし折れ巨体ライダーの手の中で圧壊していた。

『なっ!?!』

驚愕する新星。

ヒヒロノカネでできたゼクトクナイガンを、あの巨体ライダーは自らの腕力でワームごと破壊してしまったのだ。

『「一撃必殺」とは「一撃だけ必殺」の略ではなかった気がするが……』

ぽいと壊れたアックスを放り棄て、巨体ライダーは残りのワームに歩み寄る。

『わたしの「一撃必殺」は「いつでも必殺」だ。さあかかって来い!』

言いながら自ら走る巨体ライダー。

前後をライダーに挟まれた形のワームは、やむなく巨体ライダー迎撃に向かう。

『ぬん!』

その巨大な拳はワームを横「く」の字に折り曲げ、そのままライダーのヒジまで壁にめり込んだ。

当然、「く」の字に曲がった時点でワームは絶命している。

そして今度は壁から引き抜かれたその巨体ライダーの前腕部のアーマーがひしゃげていた。

『おいおい！？』

『はっはっは！あいにくとわたしの腕は二本ある！』

そして反対側のワームも同じ末路を辿る。巨体ライダーの左腕アーマーも。

その間に通路の本土側にいたワームは逃走。戦闘は一時終了となった。

伊達 新星・3

『オイコラ！てめえ、見ねえツラだな。』

あまりにも無体な力を見せつけた謎の巨体ライダーに苛立ちも露にヤクザ歩きで迫る新星。

『てめえ、ゼクトかネオゼクトか！？』

カウンター・イントウルダーとして立ち上げられた秘密組織ゼクトと思想の違いから離反し対立するネオゼクト。

当然、両者が出会ったなら殺し合うよりほかない。

そして新星はネオゼクトに身を置く。

問い掛けに対し謎の巨体ライダーは。

『違う！』

いきなり会話にならない返答を堂々と叫んだ。というか声がでかい。

『わたしは「是狗徒 兼男」とかいふ名前ではない！我が名はちやぶ台のある場で和むうま』

『やかましいわッ！？』

指先を差し上げて何事か言いかけた巨体ライダーを遮って怒鳴りつける。

『ちなみに私的一発変換だが。』

『知るか阿呆！もういい！死ね！』

しびれを切らし、躍りかかる新星。

『やめたまえ！わたしは争いは好まん！』

『争わねえよ！俺がてめえを殺すだけだ！』

エネルギーを纏った右拳を振りかぶる。

巨体ライダーはベルトのゼクターを操作しようとした。恐らくキャスト・オフしようというのだろう。

『しゃらくせえ！アーマーごとブチ抜いてやらあ！』

一瞬後。ジェイルの右拳が、巨体ライダーの胸郭を貫いていた。

『ん？』

だが、手応えがおかしい。

拳を引き抜くと、そのアーマーに空いた穴から向こう側が見えた。

『なんだこりゃ！？』

横に回り込んだ新星が見たものは、巨体ライダーのマスクドアーマーの『前半分だけ』であった。辺りの地面に、その後ろ半分と思しきパーツが散乱している。下半身までアーマーがあるのはこうして自立させるためか！？

そして肝心の中身は。

『ああっ！？』

ふと視界の端に引っ掛かるものを見直したその先。

通路の既に遠くを走り去るバイクの姿があった。

改めて見回せば、新星がここまで乗ってきたバイクがない。あの巨体ライダーは、一瞬速くクロックアップしてバイクを奪い逃走したのだろう。

『あぁんの野郎！？ ムカツクんじゃああ！』

絶叫が、虚しく通路にこだました。

ネオゼクト本部。

「バイク奪われちった！てへっ」

「……………」

その後、怒りのあまりわざわざヘラク스에 変身した織田に、足首を掴まれたまま壁と言わず天井と言わずあちこちに振り回され叩き付けられた。

t o b e c o n t i n u e d .

第2話（前書き）

こちらは、基本的に鉄槻オリジナル&借用オリジナルキャラクターでのみ構成される『仮面ライダー カブト』の外伝的ストーリーです。世界観に若干のズレがあるほか、原作のキャラクターはほとんど出てきませんので御注意下さい。

第2話

次々と車が高速で往来する幅の広い国道。

その脇の、人通りも多い歩道から、走る車の群れを見つめてふらふらしている男がいた。

身なりは薄汚れ、お世辞にも整っているとは言えない。

口は半開き。だが目つきだけは切羽詰まったかのように緊張して見開かれている。

脂汗をたらし、歩道と車道の境目を踏んだり退いたりを繰り返す。

「もうだめだ……逃げなければ……金が……生きていても仕方ない

……辛い……苦しい……もういやだ……」

ぶつぶつと早口で何かを呟き続けている。

息遣いが荒くなり、走行車を見つめる目つきが段々と引き攣っていく。

そして。

車道に躍り出た中年男性が車に撥ねられ緑色の炎を撒き散らして爆発炎上した。

撥ね飛ばした乗用車は衝撃で半壊し中央分離帯に乗り上げ停止。

この事故では、車体に何者かを撥ねた痕跡がはつきり残っているにも関わらず、謎の爆発跡には死体はおろか何も残っておらず、運転手が軽いケガを負っただけで済んだ。

ガン、ガン。ジジジ。と雑多な音を響かせる鉄骨の建造物。

メガフロート『クリサリス』外縁のビル建築工事現場のひとつの敷地の前に、巨大な高級車が停止した。

先に回り込んだ運転手が丁寧に開いたドアから、数人の背広姿の男達が降り立つ。

「……こちらも順調のようですね。」

最後に降り立ちその鉄骨を見上げた白スーツを纏った男は、『クリサリス』に参入し合同出資した企業のうちのひとつ、『明智グループ』

『現会長 明智 あけち・ともみつ 智満の息子にして『明智製薬』の若き代表取締役社長、明智 智晴だった。

「いま、中は見えますか？」

対応にやってきた現場監督が持ってきたヘルメットを受け取りながら訪ねる。

質問の形で訊いてはいるが、彼の言葉は実質、確定事項の確認に過ぎない。

ヘルメットをかぶり顎にヒモで固定しながら、同行者たちと一緒に歩き出す。

動き回る作業員たちとすれ違いながら、現場監督に話しかけようとしたその時。

『おおーい新入り！またそんなムチャ』

「ぬう！？ 心配無用だというに！」

そんな会話が聞こえた瞬間。

智晴を含む『明智グループ』の幹部連全員が同時に後頭部を強打されて前方に吹き飛ばされた。

台場 和馬・1

「む？」

長大な鉄骨を肩に担いだまま違和感に後ろを振り向く。

その動作につれ、水平に担がれた鉄骨が風を切るうなり声をあげながら迅速に旋回する。

「うわ!?!」「あつぶね!?!」

間一髪避けた作業員には目もくれず、先ほど感じた違和感の元を探る。

そこで和馬は地面に倒れ付す5人の背広姿の男たちを見つけた。

「おおい!こんな所で寝転がってるヤツがいるぞ!?!」

「おまえどこまで本気で言ってるんだ!?!」

惨状を目撃した数名の作業員たちが駆け付ける。

だが、診察するまでもなく、ヘルメットのおかげか白いスーツの男だけがまず起き上がった。

頭を軽く振りながら辺りを見回す。

そして一列に倒れる仲間と、和馬と、その担ぐ鉄骨を順番に眺めてから得心したようにうなずいた。

「……私はとても怒っています。」

「ふむ。カルシウムを摂取することを奨めるぞ。なにしろ怒ると胃に悪くてメシが食えなくなると腹が減るしするとまたイライラしてくるからな。」

「謝れと言ってるんですッ!?!」

「わたしに?なぜ?」

「……君の担いだこの鉄骨が、私達を強打したからですよ。一歩間違っていたら誰か死んだかもしれません。」

自身の真横まで伸びる、和馬の担ぐ鉄骨を叩きながら告げる白スーツ。

「なるほど。それはすまなかった。」

「うわ!?!」

先ほどの違和感の原因に納得した和馬は素直に頭を下げた。

その動作につれ角度を変えた鉄骨に、また白スーツが大仰に反応したが、和馬には意味が分からない。

「もう少し気をつけて作業してください!」

「いいだろう。」

これで話は終わったものと見なして和馬は作業に戻るべく後ろを振り向いた。

その瞬間、またも旋回してきた鉄骨が智晴の頭部を殴り飛ばしたが、今度はそれきり二度と起き上がってこなかったため、和馬は気付かずそのまま立ち去っていつてしまった。

伊達 新星・1

玉虫を模したマークをプリントしたバイク、とある特殊機構を搭載したネオゼクトの新型、マシンゼクトロン・アンプリファイが『クリサリス』へ至る橋を駆け抜ける。

「なにもあんなに怒んなくてもよ」

ヘルメットの中で新星がぼやく。

数日前、『クリサリス』の地下通路で遭遇した所属不明のライダーにバイクを奪われたことを上司である織田に報告したところ、いつにも増して怒り狂った織田にけちよんけちよんに振り回された揚げ句『次に何か壊したら、おまえもそういうふうには壊してやる。真つ二つにしたら、おまえも真つ二つに。もし紛失したりしたら……』そんな時は生身の上にマスクドアーマーをジカに抱かせて東京湾に棄ててやる！わかったか！』と、鉤爪のように曲げた五指をくねらせて怒鳴りつけてきたのだ。

その時の織田の目つきと言ったら尋常ではなかった。正気を失いかけ、ねじくれた神経が今にも爆ぜて切れそう。

きつともし今度何か壊したら、本当にやると言っただけをやるだろう。

そしていま新星がまたがっているのは予備の二台目。

「……今度なんか壊したら、逃げよう」

そのことを想像し、身震いと共にそう心に決めたのだった。

台場 和馬・2

日もだいぶ傾いた夕刻。

バイト上がりの和馬は塗装工場へと足を運んだ。

「こんにちわー！店長うー！」

「おお、和馬くん。バイク仕上がってるよ」

応対に出てきた店長に案内されて、布を被った一台のバイクの前へやってくる。

回り込んで布をはぐられたそこに現れたのは、マシンゼクトロン・アンプリファイ。

数日前、和馬が『地下通路で』『拾った』バイクである。

カウルに施されていた『甲虫みたいな変なマーク』を、自分好みのものに変えるためにここに塗装変更を依頼したのだ。

「前のもたいがいだったけど、なんでセミなのかね？」

新たにカウルに刻まれたのは、すなわちセミを模したマーク。

「いまの我が使命の顕れだ。」

「しかし『ZECT』ても聞かないメーカーだね。大丈夫かいこのバイク？」

「問題ない。感謝する」

手を振る店長に見送られ、和馬はバイクに跨がって走り去っていった。

明智 智晴・2

夕闇に沈む『クリサリス』の外縁環状道路を走る大型高級車。
だが今その車内には、壁に仕切られたところにいる運転手を除いて

は明智 智晴がひとりいるのみであった。

他の四人のグループ幹部は鉄骨強打によって首を痛めたため、近くの病院に検査に遣ったのだ。

当の智晴は頭に包帯を巻いたまま、比較的痛みが軽微だったため業務を続行している。

その智晴は今、耳にあてた携帯電話の相手とおもしろくもない会話を展開していた。

「……ですから、そんなものに所属する気はありません。そしてアレもお渡しするわけにはいきません。何度訊かれても同じことですよ」

その通話の相手は、剣呑な内容の台詞を口にするが。

「やめておいたほうがいいですよ。私どもも奴等に関してはそれに調べを進めています。もし私を含めたウチの係累に、行方不明も含めたなんらかの被害や問題が起こった場合、それらの情報を、あなたがたの言う『もう一方』にお渡します。……ええ。興味ないんですよ。あなたがたも、あちらもね。」

言って一方的に通話を切った。

「やれやれ。いたいけな薬屋をいじめて何が楽しいんですかねえ。」

……ん？」

ふと、懷に携帯電話をしまうにつれ見えた車外の風景に、小振りな物体が入るのが見えた。

それはなんとこの走行中の乗用車と平行して飛ぶ虫の姿。

その羽虫は、智晴が自分を確認したのが分かったのか、直後加速して飛び去っていった。

それを見送った智晴は再び携帯電話を取り出した。

「……すみませんが、このあとの会合には欠席します。……ええ。君におまかせしますから。それから、こちらにバイクをまわしてください。」

そして携帯電話をしまい、今度は運転席へのインターフォンを上げる。

「すみません。行き先変更です。」

伊達 新星・2

『クリサリス』の地下層。

地上層を支える十数メートルもの柱が何本も立ち並び、メガフロートを構成するブロックごとを区切る壁が暗闇の果てに垣間見える。その暗闇の中、まぎれて蠢くワームの群れがあった。

「だああてめえらいつの間にかこんなところまで増殖しやがってえええ！？」

そこへ地を蹴立てて走り込む伊達 新星。

ジョウントを抜けて飛来したジェイルゼクターを左手で掴み取り、右手『ジェイルグローブ』の甲へと押し当てる。

「変身！」

《ヘンシン！》

組み合わせた両手を腹まで押し下げてセツトアップ。

瞬間にその身を『仮面ライダー ジェイル・マスクドフォーム』へと転身させる。

《フォースフィールド！》

『どおりやああああ！』

続けて攻性障壁を展開し、虹色の輝きに包まれたまま十数体ものワームの群れに飛び込む。

『おまえらアレだろ！？ 実はタンスとか冷蔵庫のすき間とか入れるだろ！？』

正面に右拳、左拳。背後へは踏み込みの反作用を込めた背中による体当たりを。

これまでの人生で片手間に習得したあらゆる体術を駆使してまさに八面六臂の暴虐を尽くすジェイル。

「害虫駆除というのは、まさにうってつけなわけですよ。」

自らのゼクターに導かれ、明智 智晴は『クリサリス』の地下層の、とあるブロックへやってきた。

「『ワームホイホイ』なんてものが開発・商品化できたら、多少は見逃してあげられるんですけどね。」

遠く蠢くワームの群れへと歩を進める。

そこへ、旋回してきた羽虫・マホークゼクターが飛来する。

花の蜜を採取するために透明な翅で滞空する紡錘形の体躯がよく蜂に見間違われる『オオスカシバ』と呼ばれる蛾の一種。それを模したものがこのマホークゼクターである。

そのマホークゼクターへ向けて智晴は左腕を差し出した。

彼の前腕に装着されているのは、『仮面ライダー ライダーフォー ム』の前腕側面のプロテクターに酷似した幅広の腕輪であった。

これこそが明智 智晴のイクイップデバイス『マホークガントレット』。

手首からヒジの手前までを覆うそのプレート表面にはセットアップレールが設置され、そこへ正対するコースで飛来するマホークゼクターはそのまま、セットアップレール上へと滑り込むように『着地』した。

装着の瞬間、肩の高さのままヒジを後方へ下げ衝撃を殺す。

「変身。」

《ヘンシン！》

音声が認証を告げ、そのポーズのままアームガードから全身へハニカム構造状に展開形成される装甲。

まるで垂直尾翼が二枚並んだかのように盛り上がる背面装甲。両肩に装着されたラウンドシールド（円形の盾）。ハンマーヘッドシャークのように左右に張り出した部位を持つ頭部。全体をグリーンで

彩られた奇形の鎧。これが明智 智晴が変身した姿『仮面ライダー
マホーク・マスクドフォーム』であつた。

『マホークトライブ射出。』

《マホークトライブ。》

音声認証後、両肩のラウンドシールドの外周部に等間隔で設置された十二基のスリットすべてから同時にジャカ、と音を立ててマホークマイザーが頭を出した。

そして一斉に射出される計二十四基のマホークマイザー。

一拍置いて再びすべてのスリットからマイザーが頭を出す。

それを二回繰り返し、合計七十二基のマホークマイザーがワームの群れめがけて飛び立ってゆく。

『六基編隊を構成。フォックスロットは突撃して先制。その後アルファ、ブラボーは牽制。残りは三基ごとに再編し隙を見付け次第突撃せよ』

智晴の指揮操作の元、左右から、まるで戦闘機のごとく単位陣形を組んで襲いかかるマホークマイザー。

最初の数発の爆発あと、散発的にワームへ突撃・炸裂してゆくマイザーたち。

『どおおおお！？』

そこへ、爆撃に蹂躪されるワームの群れの中からこちらへと転がり出てきた者がいた。

虹色の輝きに包まれたマスクドフォーム仮面ライダー。

『……いたんですか。ネオゼクト。』

『あああてめえ！？』

呼びかけられたネオゼクト所属のライダーは、跳ね起きるなりこちらへ怒鳴りつけてきた。

『ゼクトの悪質勧誘電話の次はネオゼクトですか。まったくしつこいったら。昼の鉄骨といい今日はなにか崇られているんですかね』
『知るかッ！？ 今日俺は通りすがりだ！』

怒鳴る相手は、かつて自らの陣営に取り込もうと接触してきた時のネオゼクトの人間の中にいたことがあり、一応の顔見知りだった。
『まあどうでもいいですが。離れてないと、マホークトライブの餌食になりますよ?』

『上等だ!てめーのハエごと叩き潰してやるぜ!』

『ハエじゃありません。オオスカシバと言ってで』

『ひとおーつ!』

突如、その言い合いを打ち破る巨大な声がビリビリと響き渡る。

反対側の壁に反射して山びこ現象が起きるほどの音量である。

あんまりな大声に思わず毒気を抜かれて黙り込むふたり。

伊達 新星・3

『ひとおーつ! 人様の皮をかぶり!』

隣のマホークとそろって眺めるワームの群れのそのまた向こうに、いつぞや新星が地下通路で出会ったあの巨体ライダーが出現していた。

『……あんのヤロ』

『ふたあーつ!』

言いながら巨体ライダーは、ベルトバツクルのセミ型ゼクターの翹を押し上げる。

アーマーパージのためのチャージアップが始まり、マスクドアーマーがパーツ単位でせり上がり電光がボディを這い回る。

『不埒な偽物三昧!』

『ここで会ったが百年目!あいつからブチのめしてやる!』

隣のマホークをさて置き、ずかずかと巨体ライダーへと歩いてゆく新星。

『どけ!おら!』

進路上にいるワームを攻性障壁を纏った裏券で払いのけながら最短

距離を突き進む。

『おいコラおまえ!』

『みいーっつ! 見事駆逐してくれよう!』

新星の呼びかけが聞こえた様子もなく巨体ライダーは、台詞とともにゼクターの翅を元の位置に引き倒した。

その瞬間、ものすごい勢いで巨体ライダーが丸ごと新星めがけて飛んできた。

『どおおおおお!?!』

真正面から巨体のボディアタックを喰らい、まるで抱きつくように絡まって、新星が歩いてきた道筋をごろごろと逆戻りしてゆく。

その途上でワームを2〜3体巻き込んだ気がしたがそれどころではない。

マホークの横を転がり遠く過ぎていったところでようやく体勢を取り戻す。

『この野郎!』

巨体を掴み引き倒して馬乗りになる新星。

『よくもやってくれやがったな! 喰らえオラ! 喰らいやがれ!』

そして右に左にと滅茶苦茶にパンチの連打を浴びせる。

『オラどうした! 見掛け倒しか……?』

やがて反撃はおろかなんの反応も示さない相手をいぶかしみ、新星はやおら立ち上がってその巨体を持ち上げてみた。

『……また抜け殻かよ!?!』

投げ捨てたそれは、やっぱりアーマーの前半分だけであつた。

明智 智晴・4

《キャストオフ! チェンジ・シケイダ!》

遠く智晴の見つめる先で、突然現れた巨体ライダーが下半身まで覆っていた全ての装甲をパージした。

背中パーツは細かく分割されたのになんてか前半分だけ丸ごと飛ばしてネオゼクトの阿呆を吹き飛ばしていたが（ちなみにすぐ横を転がっていった奴は、未だその『抜け殻』と遊んでいる）。

『ネオゼクトの阿呆が敵対していたなら、あれはゼクトか……？』
セミを上下逆さにしたようなフェイスパーツ。

セミの翅をフォースアイとして模した面相がワームを睥睨している。
『聴くがいい！破壊の音を！貴様らが殺めた人々の叫びと知れい！』
相変わらずの大声で告げた巨体ライダーが、ベルトバツクル端のレバーを引く。

するとクルリと裏返るセミのゼクター。

そのゼクターの腹部に丸いパーツ、どう見てもスピーカーにしか見えないそれが現れる。

『……まさか』

続いて、裏返ったセミのゼクターの翅を引いてチャージアップ。

『ライダー、ソニック！』

宣言と同時に翅を押し戻す。

電光が全身を駆け巡り、やがて腹部ゼクターへ集中した。

《ライダーソニック！》

その途端、無数の弦楽器を一齐に引つ掻いたような騒音が爆発する。風景が揺らぐ。巨体ライダーの間近にいたワームから次々と自壊し緑の爆炎と化す。

それどころかワームを攻撃していたマホークマイザーまでもが自爆していった。

『音波……破壊音波か！？』

急いで呼び戻したマイザーを自分の手前で自爆させ、音波に対する一時的な防壁と成し全速で後退する。

そこにいたネオゼクトの阿呆が音波に吹き飛ばされるが、その虹色の力場で相殺したらしく元気に悪態を吐いている。

そんな惨劇の元を見やれば、そこにあれほど群れていた十数ものワームは一匹残らず消滅し、腕組みして胸をそらした巨体ライダーが

いるのみだった。

『広域殲滅型？……なんてむちゃくちゃな……』

べき……、べきごきがき……。

そこに、どこから鈍い破碎音が聞こえてくる。

いぶかしんで辺りを見回す智晴の目に、こぼれ落ちてきた一筋の砂が見えた。

『これは！？』

見上げたその十数メートル先の天井。

そこに見る見る内に縦横に亀裂が走り、瓦解し崩落してきた。

『なんだあ！？』

降り注ぐ地上層を構成する建材に、後退を余儀なくされる新星。

『まさか、今の破壊音波が！？』

間違いない。逃げ切った智晴が効果範囲と見切ったその半径は、確かに天井まで届いていた。

『クソツタレ！おいテメエ！待ちやがれ！』

新星の絶叫も虚しく、巨体ライダーとの間の空間は大量の建材・土砂・鉄骨の瀑布に埋め尽くされ、接近は不可能となってゆく。

『滅茶苦茶ですね！一体なぜこんなことを！？』

次々と崩落してくる建材からライダーシステムの脚力で必死に逃げる智晴。

それにしてもこの瓦解した瓦礫の尋常でない量。

恐らく地上の真上になんらかの建物があったのだろうが……。

『あああああ!?!』

その時、そこに落ちてきた見覚えのある看板に気付いた智晴が絶叫をあげた。

台場 和馬・3

翌朝。

「……ぬ?」

いつものように仕事場である建築工事現場にやってきた和馬は、その異常をいぶかしんで立ち止まった。

なぜか昨日まで築き上げた鉄骨の建築物が、根こそぎ消え去っていたのだ。

それどころか、その工事現場の敷地全体に『建物を丸ごと飲み込めそうな大穴』が空いていた。

「むう。これはなんとしたことだ?」

t o b e c o n t i n u e d .

第3話（前書き）

こちらは、基本的に鉄槻オリジナル&借用オリジナルキャラクターでのみ構成される『仮面ライダー カブト』の外伝的ストーリーです。世界観に若干のズレがあるほか、原作のキャラクターはほとんど出てきませんので御注意下さい。

第3話

足がすくむ。

夜闇の中の孤島のような高層ビルの屋上外縁に立ち、怖々と地上を覗き込んで引つ込むことを繰り返している少年がいた。

数寄屋 亮介。小中学生に間違われることもある、小柄でおっとりした外見の実は高校生である。

近頃頻繁に遭遇するいじめに堪え兼ね、思い詰めた彼は自殺を試みようとしてここまでやってきたのだが、当然ここに至ってそれが恐ろしい試みであることに気付いたのだった。

「ああ。やっぱりだめだ」

とても飛び降りる決意などつかない亮介は、近くの突起に腰を下ろす。

「だめだな。……どうして俺なんか生きてんだろ。」

ぶつぶつと呟くたび、再び頭の中をその『嫌なこと』が埋め尽くしてゆく。

「……俺なんか、何かの間違いで死ねばいいのに。 あゝああ。この場で突然フツと自然死しないかな」

その『楽に終わらせてくれる偶然』を求めて、再び屋上外縁に足をかけ下を覗き込む。

「そんなに死にたいんなら、俺が代わりに生きてあげるよ。」

「え？」

唐突な声に振り向いたそこ、いつの間にか亮介の真横にいたのは、写真でなければ見ることでできないはずの、いつも鏡で見ているものとは左右反転した自分の顔を持つ人間。

『亮介』が、もうひとりそこにいた。

「ええええええ！？」

夜道をのしと歩く巨漢がいた。

台場 和馬である。

『……あああああああ』

「む？」

ふと聞こえてきた長く尾を引く声に真上を振り仰ぐと、顔を恐怖に引き攣らせた小柄な少年が真つ逆さまに落下してきたところだった。

和馬がそれを額で受け止めた瞬間、少年が緑色の炎を撒き散らして大爆発した。

数寄屋 亮介・1

「うわあああああ！？」

一目散に階段を駆け降りる亮介。

「うわああああ！？うわーっ！？うわーっ！？」

狂乱し、あわてふためいて駆け降りた階段の、折り返しを曲がり損ねて壁に激突し、跳ね返った亮介はそれでも前進することをやめない。

それ以降はもう玩具のゼンマイ車のように壁に激突することで方向転換を繰り返し階段を下りきる。

「うわあああああ！？」

ようやく地階の外へ飛び出した。

地に足がついたことでようやく安堵できる、そう思って落ち着こうとしたそこに。

「うぎゃあわあがぐかぎぎゃああああああ！？」

ドッペルゲンガーよりも恐ろしい、闇のように黒い巨大な化け物が立ちほだかっていたのを見て亮介は再び絶叫した。

台場 和馬・1

緑色の爆炎が収まったそこに、こんがりと焦げた和馬が立ち尽くしていた。

「……むう。さすがに少々効いたな。」

けほ、と煤を吐いて呟く。

「うぎゃあわあがぐかぎぎやあああああ！？」

そこへ、目の前の灯の落ちたビルから駆け出てきた少年が、こちらを見るなり立ちすくんで絶叫してきた。

「ぬ？」

意味不明な絶叫はさて置き、和馬はそのこちらを見上げる少年の顔に軽い驚愕を覚えた。

それは、たったいま頭突きで粉碎した擬態ワームの擬態元と同じ顔だったのだ。

「うわーっ！？」

「待ちたまえ少年。」

「ぐえ！？」

振り向いて逃げようとした少年の首を握り締める。

「ここで会ったのも何かの縁だ。袖触り合うも一生の不覚。まあいいからこっちへ来なさい。」

「うぐー！？」

そしてそのまま少年を持っていつてしまう。

数寄屋 亮介・2

「……数寄屋 亮介です。」

「ふむ。では亮介。飲むといい。」

「はあ。どうも。」

先ほどのビルから程近い公園の、街灯から微妙に外れた薄暗いベンチ。

自分を連れてきた大男は、その自販機で買った栄養剤じみたパッケージの清涼飲料水のビンを押し付けてきた。

「飲むがいい。まず元気にならねば、何事も成すことなどできんぞう」

「はあ。」

身長2メートルほどの高度から、テカテカとした脂ぎった岩塊のような顔を笑顔の形に歪めてなおも勧めてくる大男。

そのまま見つめてくるので、亮介は仕方なくビンの蓋を開けて中身を一気に飲み込んでゆく。

「……。」

まるで給食を食べきるまで残された小学生の心地で飲みきった。

「うむ。見事だ。」

それを見届けた大男は、まるで偉業を成し遂げたかのように大仰に告げてくる。

「で、だ。あのビルの上で何があったのか、聞かせてくれたまえ。」

「え!?!」

ぎくりとする。

自殺未遂や『もうひとりの亮介』のことなど、気まずくて、とても他人には聞かせられないと考えていたのだ。

それをどうしてこの大男が気にするのか。

「話してみたまえ。たとえそれがSFじみた話でも、荒唐無稽な夢物語でも、わたしには聞き入れる用意がある。さあ!」

「(?!、このひとは、知っている!?!あのドッペルゲンガーのこ

とを分かつてる!?!)」
その異様な風体はこの巨体。まるで全身が冗談の塊のような男だったが、その目つきだけは、真摯に輝いて見えた。

伊達 新星・1

深夜のネオゼクト本部。

無灯の会議室。

イスを三脚並べたそれをベッド替わりに眠る新星の元へ歩み寄る人影が現れた。

その人影は暗闇の中、新星の頭のそばまで来ると、新星の上半身が横たわるイスを一脚蹴り飛ばした。

「んが!？」

落下した後頭部が床に激突し、背骨がぼきりと鳴る音がした。

「……なんだよハナシって」

乱暴な手段で叩き起こされ執務室へ呼び出された新星は、当の部屋の主である織田 秀成に険悪にばやいた。

「おもしろい情報が届いた。」

操作していたノートパソコンを新星のほうへくると向けてくる。

「……『自殺するワーム』?なんだそりゃ。俺らの商売あがったりじゃねえか」

そこには、新星が読み上げた表題のもと、数件のワーム自爆現象を挙げた資料が表示されていた。

「目撃情報によれば、いずれも自殺ポイントみたいな場所でうろつろついていた挙動不審な人間が、デッドゾーンに飛び込んだところだボソッ」

ぱっ、と手を広げる織田。

「地面や車はえぐれてんのに死体もなにも残らない、ときた。目撃証言以外なものないから、擬態元の身元は特定できない。」

「まさかワームのバカども、自殺志願者に擬態しやがってそうなたったのか!？」

「確証がないから、まだなんとも言えんがな。だが、もしそうなら、うまいワームの掃討方法が開発できるかもしれない。」

明智 智晴・1

バスローブをまとった姿で自室のソファに腰掛ける明智 智晴。
特に首まわりを念入りにマッサージし、ぐるぐると回す。

「やれやれ、ですね」

ここしばらくメガフロート『クリサリス』に建設していた支社ビルが破壊された事後処理に忙殺されており、ようやく一段落したところだったのだ。

事の原因を地盤の設計のせいとし、人工島建築業者に責任を押し付けることには成功したのだが、智晴は事の真相を知っている。

「ゼクトめ。よくもやってくれましたね。」

先日のセミ型のライダーによる攻撃。智晴はこれを、所属を断ったことに対するゼクト側の報復行為と見なしていた。

「……まあ、約束は約束ですからね。」

そして智晴は、マホークゼクターとワームに関わってから明智グループの情報力を活用して収集したワームに関する情報を、一部ネオゼクトに流してやったのだ。

ゼクトという秘密組織と離反するネオゼクトのことも知っている。

智晴は、両者の抗争を煽ることで明智グループの立場を守ってきたのだ。

「しかし、直接攻撃も厭わなくなってくると……いずれライダーも倒さねばなりませんか。」

ヒトに害をなすワームを駆逐する戦士同士が戦う矛盾、などと青臭いことを言つつもりはない。

やらなければ やられるというのは、相手がワームだろうと人間だろうと同じことだ。

智晴は、『明智と明智の係累さえ無事に繁栄するなら、ほかはどうでもいい』と考えているのだから。

数寄屋 亮介・3

「ほう。自殺をな。」

「はい。すみません。」

「わたしに謝るハナシではあるまい？君の命と君の判断だ。」

「はあ。」

促されるまま自分が見たドッペルゲンガーのことを説明すれば、自然と『自分がなぜビルの上にあったのか』まで話さねばならないことに、その時になってようやく気付いたが既に遅く。

だが気まずげに語り終えたところで返ってきたのはそっけないリアクションであった。

「ふむ。大変に貴重なハナシであった。なに、アレについては心配することはない。」

「あの、なんなんですか？アレって」

ドッペルゲンガーについて詳しいものとみた大男に、つい訪ねてみる。

「君は知らなくていいことだ。それより、君にはなにか好きなことはないのかね？」

「え？」

突然の話題の方向転換に面食らう。

「趣味だ。格闘技とか、崖登りとか、長距離マラソンとか、重量挙げとか」

その体格を見てれば内容の偏りは分からなくもないが。

「ええい、この際なんでもいい！テレビゲームか？読書か？音楽聴くのか？それともマニアックに、畳の目を数えるのが好きか？セーターの毛玉の数か？目玉の表面に付着して漂うホコリを追いかける

のだっていい！なにかないか！？」

言いながら狭いベンチの上をぐいぐい迫ってくる大男の勢いに圧されてあわてて返事を考える。

「ぴ、ピアノを少し！ああとプラモデルとか作ったり！」

「なあんだ。あるではないか。」

迫る形相を柔和な笑みに変形させて元の体勢に戻る大男。

亮介はついていけずにベンチの端でひっくり返ったままだ。

「好きなことがあるなら、自殺などもつたいないことだろう？　い
いから好きなことだけを繰り返しているがよい。」

「でも、学校だつて行かなくちゃいけないんですよ！？そしたらま
た……」

「君の人生の目的はなんだ？」

「え？」

激昂して起き上がった亮介を、真摯な瞳がひた、と見据える。

「俺の……目的？」

「存在意義なら、わたくし共が提供して差し上げられますが？」

そこに突然、たおやかな女性の声が割り込んできた。

数人の無表情な男女を従えた、黒装束の女性。

ぞろ長い、フリルが大量についた表面積の大きいドレスは、ゴスロ
リかとも思うが若干デザインラインが違う。

どこかで見かけたピンクハウスとか言う服を黒で統一したならこう
なるであろうというその衣装。

そして俯いた顔に伏せ目^{かんばせ}がちな瞳、さらにその上から覆う黒のレー
スという、全体を見ればまるで『喪服のドレス』を纏った女が、い
つの間にか亮介らの座るベンチのそばに現れていた。

「少年。よろしければ、わたくし共と御一緒にいらして下さい。あ
なたに会うために、わたくし共はまかりこしました。」

ベールの下、憂いに満ちた瞳にかすかな笑みを浮かべて、そっと
手を差し出す喪服の女。

だが異様なのは、女の背後に並ぶ無表情な同行者たち。

「う……あ……！？」

なにかがおかしい。亮介はそう直感していた。

思い付いたのは、ついさっき出会った自分のドッペルゲンガー。

その時、亮介の視界を、巨大な黒い背中が塞ぎ尽くした。

「逃げる。亮介。」

「え？」

大男が、喪服の女から亮介を遮るように立ちはだかっていた。

横に振りかざした左手に、どこからか飛んできた巨大なセミが飛び込んできた。

それをがっちり握り締める大男。

「……そう。ライダーでしたのですね。」

それを見た喪服の女の、憂いを秘めた貌に、今度は蠱惑的な笑みがうつすらとにじみ出る。

その瞬間、女の背後に並び立つ人間たちが、膨れるように変形し、緑色の異形へと成り替わった。

「ひイツ！？」

「逃げる！亮介！」

大男に怒鳴りつけられ、亮介はようやく立ち上がる。

「だが亮介！自分が、何の為に逃げるのか、それを忘れるな！おまえは、おまえの目的を成すために、この危機を回避するために逃げるのだ！行け！」

がくがくと顎を振り、すくむ足で無理矢理駆け出してゆく亮介。

台場 和馬・2

目の前には喪服の女とワームが6体。

そして背後にもわらわらと迫り来るワームがさらに数体。

「お行き。」

命令に従い、襲いかかるワーム。

「ぬんっ！」

だが和馬はそれを真上から振り下ろした拳で地面に叩き倒す。顔面から突っ伏したワームの頭部に足を載せ、上着の裾を振り払う。するとそこに現れる金属製のベルト。

これが和馬のイクイップデバイスであるライダーベルトである。

そのバックル部分のセットアップレールに、左手の機械仕掛けのゼミ、クライプゼクターを装着する。

「変身！」

《ヘンシン！》

認証後、ハニカム構造状に展開形成される、下半身まで覆う巨大な全身甲冑。

台場 和馬の変身するこれが『仮面ライダー クライプ・マスクド フォーム』であった。

『ふんっ！』

力を込めて、足の下のワームを踏み潰す。

緑の爆炎を蹴り散らしながら進み出るクライプ。

『さあ。かかってくるがいい。』

それを合図としたのか、気圧されてとどまっていた周囲のワームが改めて一斉に躍りかかっていった。

『おりやあ！』

まるで大砲のように繰り出される巨大な拳。そのあまりの強度とあまりの臂力に、喰らったワームの顔面が拳の形にえぐられ削り取られた。

『んぬりやあ！』

そして左拳。下からのアッパーが別のワームの身体を置いてきぼりにして首をすっ飛ばした。

しかし恐るべきは、それら一連の動作を背中からしがみついた二体のワームを引きずったまま行われたそのパワー。

『うおおおお！』

ワーム・1

「……………」

その様子を眺めていた喪服の女は、唇に薄い笑みを浮かべると、自らの擬態を解除し始めた。

溶け崩れるように変形してゆく喪服の色が褪せ、あとに現れたのは、ヒト型の甲殻生物。

全身を構成する灰色の甲殻には無数のトゲが並び、両腕の先は小振りなハサミ型となり、顔面も甲殻に覆われた異様と化したが下半分のみ人類女性のような口元を覗かせている。

より特徴的なのは、その長大なスカート部であろう。大きく区切られたプリーツスカートに見えたそれは、どちらかと言えば『太いパイプを並べて腰に巻いた』と形容したほうが近い。

全体に、まるでトゲつき甲殻で作られたグレーのウェディングドレスを思わせる様相を現したのは、ワーム成体・タカアシガニの相を持つマクロケイラワームであった。

戦闘の渦中へ躍り込んでゆくマクロケイラワーム。

ワーム・サナギ体を蹴散らすクライプの後頭部目掛けて右腕のハサミの甲殻を振り下ろした。

だが、激突した装甲は小揺るぎもせず、こともなげにこちらへ振り向いてくるクライプ。

『ぬんっ!』

繰り出してきた拳を、マクロケイラワームも胸郭で受け止めた。

『……………!?!?!?!?』

だが、予想外の威力に数歩後退してしまう。

こちらにも傷ひとつない。だが、重いパンチだった。

親玉が参戦してきたことで、和馬は状況を次に進めることにした。親玉の成体ワームをはじき飛ばしてから、ベルトのゼクターの翅をはじめて押し上げる。

アーマーパージのためのチャージアップが始まり、全身の装甲が部品単位で次々とせり上がってゆく。

『キャストオフ!』

翅のレバーを引き戻す。

《キャスト・オフ!》

今度は前面装甲まで細かく分割されて全方位に吹き飛んでゆくマスキドアーマー。

あとに現れたのは、セミを模した面相のフェイスパーツに昆虫の腹部のような胸郭、その胸部装甲の裾から伸びる燕尾服のしっぽのような部位が、背後から見るとまるでセミを思わせるシルエットを構成する。

《チェンジ・シケイダー!》

全体を紅茶色の軽装甲で構成されたそれが、『仮面ライダー クライプ・ライダーフォーム』の姿であった。

オレンジに光るフォースアイで辺りをざっと見回せば、パージされたアーマーカーに吹き飛ばされたワーム・サナギ体の群れの他に、あの親玉の姿が見えない。

『クロックアップ!』

ベルト側面のスラップスイッチを叩く。

《クロック・アップ!》

加速空間に突入。

その瞬間、辺りを包んでいた『夜の静寂の音』と言つべき自然の音すら消失し。

そして目の前に迫る親玉ワームの姿が出現した。

『うおおお!』

右から、左から、鉄骨のフルスイングのような威力で迫る甲殻腕をそれぞれ腕でブロックする。

『ぬんっ!』

間髪入れずながら空きのその胸郭にパンチを見舞う。

『……!?!』

よろめいて二歩ほど下がる親玉ワーム。

お互いに毛ほどの傷もついていない。

『ならば聴け!破壊の音を!』

右手でベルトバックルのレバーを引き、ゼクターをくると裏返した。

セミの腹部に現れるスピーカー。

続いて左手でゼクターの翅を引きチャージアップ。

『ライダーソニック!』

そして翅を押し戻す。

《ライダー・ソニック!》

全身をほとばしった電光が、腹部ゼクターへ殺到し。

破壊音波が全方位へと炸裂した。

破壊音波に巻き込まれ、通常空間にあるワーム・サナギ体の群れは次々と滅びてゆくが、マクロケイラワームは一瞬だけ速く自ら吐きだした泡の壁を形成。音波の直撃を免れると、そのまま逃走してしまった。

《クロック・オーヴァ。》

加速状態を抜け、通常空間に復帰したクライプ。

フォームの撃退を確認したクライプゼクターは、役目を終え自らベルトから離脱して飛び去ってゆく。

「ふむ。」

変身を解除した和馬は、無人となった辺りを見回して息をつき、その公園から立ち去っていった。

クロックアップ中に炸裂された破壊音波は、通常空間に対し相対的により短間隔の波形となった上、一瞬間に凝縮されて効果範囲内を蹂躪した。

一瞬で分子間の結合を破壊された物質は、物理的干渉を受けない限りはその配列・配置を維持するが、アンバランスな形状の公園の備品・ベンチや街灯等の設置器具たちは、和馬の歩く地響きでその分子配列を乱し、和馬が立ち去ったあとに人知れず静かに崩壊・消滅していった。

t o b e c o n t i n u e d .

第4話（前書き）

こちらは、基本的に鉄槻オリジナル&借用オリジナルキャラクターでのみ構成される『仮面ライダー カブト』の外伝的ストーリーです。世界観に若干のズレがあるほか、原作のキャラクターはほとんど出てきませんので御注意下さい。

第4話

朱と琥珀の格子模様に移された世界。

窓から夕日が差し込む寂れた空き教室の真ん中に、ずたぼろになって転がっている亮介がいた。

突然数人の男子生徒に囲まれ、からかわれ小突かれ、それらがヒートアップしていった揚げ句この有り様である。

カバンもその中身も辺りにブチ撒けられ、事の衝撃にずっと飽和していたのだった。

やがて物理的な痛みがひいたところでのそりと起き上がり、床に散らばった私物とカバンを回収していく。

『自分が、何の為に逃げるのか、それを忘れるな！おまえは、おまえの目的を成すために、この危機を回避するために逃げるのだ！』

あの日の夜に出会った大男の言葉が思い出される。

だがあの男は、亮介の存在を肯定しつつその実、なんら解決に至ることは言っていない。

「……どうしろっていうんだよ。まったく」

そして見てしまった緑色の異形の存在。

何年か前の渋谷隕石といい、世界が滅びるのは、実はそう遠くないのかもしれない。

「いいよ。どうせ死ぬんだ。俺なんか」

私物をカバンに詰め終え、だが立ち上がる気になれずあぐらをかいて座り込む。

「あああ。なんか、楽に死ぬ方法とかなないかなあ……」

「死にたいの？」

「ツええ！？」

突如、独り言に応える声がかかりみつともなく狼狽してしまう亮介。

見れば、ほとんど人の寄りつかないこの空き教室に入ってくる女子生徒の姿。

どうってことのない肩ほどの長さの髪といい、これといって特徴のない女の子。

だが、気怠げにこちらを眺めるその斜に傾けた目つきは何か、ここではないどこかを見る・あるいはなにものも目に入れようというない突き放した印象を与える。

そして、見てしまった、左手首に幾重にも巻き付けられた包帯。

「（な、なんだ、この娘……！？）」

「……ねえ。一緒に、死なない？」

数寄屋 亮介・1

「……『自殺倶楽部』ってというのがあってね。」

「はあ。」

枕木 春瑠と名乗った少女は衝撃の告白のあと、勝手に空き教室の真ん中に座る亮介の隣に座り込み、剣呑な話をさらりと切り出した。「簡単に言えば、自殺のお手伝いをしてくれる互助組織かな。例えば、ひとりで死ぬのがイヤな人のために、道連れになってくれる人を紹介したり、安楽に死ぬための、ガスとか薬とかを提供してくれる。」

後ろに両手をついて、横座りに脚を投げ出してぼそぼそ話し続ける春瑠。

亮介は、己の悩みを具体化するような内容に、恐れ半分で聞き入ってしまう。

「ただし、自殺を前提とした上で、知り合いの紹介でなければ登録

できない、閉じたコミュニティ。それはネットの中にだけ存在するの。……ケイタイ持ってる？」

自分の携帯電話をかざして見せる春瑠。

「うん。持ってる。……でも、どうして俺が自殺したいだなんて知ってるの？」

ぶつ、と息が吹き抜ける音。うつむいた少女は、どうやら笑っているらしい。

「たった今、死にたいって言ってたじゃない。」

「あんな一言だけで？」

矛盾したことだが、逆に自殺をほめかされたことで冷静になった部分が疑問を告げた。

「たまたま、その、からかわれてる俺を見かけただけじゃないの？」

「見てたよ。」

「え？」

その時、隣に座ってから初めて春瑠が目をこちらに合わせてきた。斜に傾いた上目遣いで。

「見てたんだから。こないだ、あそこのビルの屋上で、飛び降りようか、降りまいかって足踏みしてた君のこと。」

途端に顔が熱くなる。

「、なんで、それ!？」

「偶然なんだけどね。たまたま斜向かいのビルにいたのわたし。あの時。それで。」

再びうつむいた春瑠は、手元の携帯電話を操作しだした。

「君はわたしが紹介する。別に、登録したらすぐさま、ってわけじゃないから。」

亮介は、携帯電話の赤外線通信機能で受信したURLを取得した。

「……そう。そのサイト。……そこに、この番号を入れて」

案内に従い、入会登録手続きを進める亮介。

隣から春瑠が差し出した携帯電話の画面に表示されている番号を、

確認しながら入力してゆく。

肩に触れる感触にまごつきながらも操作を完了させた。

「……うん。これで完了。ようこそ、『自殺倶楽部』へ。」

「……うん。」

若干、キツネにつままれた感じが抜けないが、それでもうなずく亮介。

「これで、わたしと君はパートナーになったから。これからは、最期のその時まで、君とわたしは下の名前で呼び合うの。」

「え？なんで？」

斜に傾けた眼差しのまま、あきれたようにも聞こえる息を漏らす春瑠。

「……一緒に、死んでくれるんでしょ？言わば人生の連れ添いなんだから、当たり前のことだよ。……亮介。」

とくん、と鼓動が跳ね上がる。

見た目も華やかさに欠ける自殺志願者に下の名前で呼ばただけなのになんてと亮介の脳は混乱の渦を描く。

ぼあ、とした亮介の視界の中で、春瑠が上に向けた片手の指をくいくいと動かした。

「……え？」

「……呼んで。名前。「さん」とか付けずに。」

「あう！？ あ、その、……」

人の名前を気安く呼び捨てた経験の少ない亮介にとって、それはなかなか覚悟の要る儀式だった。

「……あ……その……えと」

「。」

なおも目で催促してくる春瑠。

「あの……は、春瑠。」

窓も閉め切った薄暗い部屋。

カーテンも完全に閉じられ外界を完全に遮断したその部屋をぼんやりと照らすのは、カラーアクリルの塊が浮かぶ水槽や光ファイバーの束で構成されたオブジェなどイルミネーション・ツリーの灯のみ。壁や天井にはアニメ調の絵柄のポスターがすき間なく並び、棚にはその絵柄を立体化したような人形が立ち並ぶ。

そして部屋の隅にあるベッドの上で蠢く影があった。

「イイヤツは、死んだヤツだけさあ」

仰向けに寝転がって、調子っぱずれたデタラメな節をつけてぶつぶつと呟きながら、節くれ立った人型オブジェを玩んでいる。

それは総合エンタテイメント創造企業『粉微塵』謹製、『玩具とウエブの融合』が売り文句の美少女アクションフィギュア『魔装姫神』。そのシリーズの一体である。

そこに。

デスクの上から耳障りの良いメロディが一節だけ流れ出た。

「お、お客さん」

一度脚をあげてから勢いをつけて起き上がる男。

立ち上がったその身はまるでカマキリのような痩身。

黒縁メガネを押し上げて位置を修正し、デスク前の椅子に腰掛ける。フィギュアを横に置き、ぼさぼさの前髪をかき上げてからキーボードを操作する。

スリープから復帰したモニターに現れたのは、仰々しい装丁で描かれた『自殺倶楽部』の文字。

続いて開かれたウィンドウに現れた新着データを一瞥して口笛を吹いた。

「おい舞菜あ。来てみるよ。また新しいお客さんだあ」

「はい。ご主人様。」

開け放した部屋の入り口。

「舞菜」と呼ばれた漆黒のカントリー系の衣装に身を包んだ女が、

その闇から歩み出てきた。

呼びつけておいて、特にそれ以上なにを言うでもなく、せかせかとキーボードとマウスを操作する男。

まがつき・ななひこ

曲月 七彦。二十歳そこそこの痩せぎすのこの男こそが、自殺互助組織『自殺倶楽部』の設立主であった。

「おい舞菜あ。来てみるよ。また新しいお客さんだあ」

「はい。ご主人様。」

呼びかけに応えて、その人間の背後へ歩み寄る舞菜。

誰も見ていなくとも『憂いを秘めた顔』のまま、その人間の斜め後ろに立つ。

元々コミュニケーション能力に乏しいこの人間から、それ以上特になにを言われるでもなく。

だから舞菜は普通に人間の背後からそのモニターの内容を見やる。

新規の登録者として現れた名は『数寄屋 亮介』。

あいかわ・まいな

それを見て、藍川 舞菜と名乗るヒトの姿に擬態したマクロケイラフォームは、その口の端をゆっくりと釣り上げた。

伊達 新星・1

ネオゼクト本部。

「……これだな。『モデル・シケイダ』。ゼクトのライダーシステム『クライブ』。」

「ああー！？これこれ！こんなヤツ！？」

織田の操作するモニターに現れたライダーの画像を見るなり絶叫す

る新星。

「こいつ無茶苦茶やりやがってよ！ワーム全滅さんのにその周りでまでブっ壊しやがって！」

「……おまえにそこまで言わせるってな、確かに只者じゃないな。」

「いやほんと無茶苦茶なんだって！？」

織田の視線の色にも気付かずに繰り返す新星。

「まあ大人の言うことだからアテにやなんねえが、バイクも持たされてねえんじゃ、あながちフリーってのも嘘じゃねえかもなコイツ。ゼクトのセキュリティも結構ザルだよ。ドレイクみてえにどっか持ってたんだんじゃねえか？」

再びノートパソコンを操作して画像を消し、別のものを探し始める。

「ケンカ売ってこねえ限りほっとけ。俺たちの敵はまずワームだ。」

「そんで今回の仕事だけだな。」

そして現れる画像。隠し撮りらしい不自然な構図の真ん中にいる人物。

「……『数寄屋 亮介』？変な字だな」

「例の『自殺ワーム』ネタを元にウチの情報部が拾ってきた自殺未遂及び最近ワームに接触したかもしれない人物その1だ。おまえはしばらくこのガキを張れ。」

うなずいて、目標の顔を覚えようと画像に注目したところで、新星はふと既視感に捕らわれた。

「あれ？こいつ、どっかで……」

数寄屋 亮介・2

ぽけけけけ……。

まるでそんな書き文字を引き摺るような間抜けな顔のままゆらゆらと歩く亮介。

『言わば人生の連れ添いなんだから、当たり前のことだよ。……
亮介』

…… 亮介 …… 亮介 …… りょうすけ ……

「（女の子に、名前で呼ばれちったあ）」

春瑠と出会ってから数日経つというのに、亮介の頭はその衝撃的かつ甘美な事実に埋め尽くされていた。

「（……でも、死ぬんだよねあ……）」

そして『いずれ自殺する身である』という事実もきっちり脳裏に埋まっている。

その重さにかくと肩を落とす。

天下の往来の真ん中で、まるで体操の「前後屈運動」のような亮介の動作に、通行人たちが怪訝な顔で迂回し通り過ぎてゆく。

「（……いやいや！？ ナニを妄想ぶっ飛ばしてんだ俺！？）」

やおら起き上がって頭をブンブン振る。

「（別に、好きだとかなんとか言われたわけじゃなし！ただ、その、死ぬ時に、一緒に死んでくれるってのは、確かになんかこー、……

イイかもなあ）」

再び歩き出した亮介は、『自殺すること』の意味を脇に置いたまま妄想にふけり続ける。

人気のない遊歩道を歩く亮介。その亮介の後方から、数体の緑の異形・ワームの群れが静かに接近していた。

伊達 新星・2

「あああいつら！？」

物陰から慣れない尾行を続けていた新星の視界に、目標である少年を狙うワームの群れが現れた。

遠目からの観察が任務だったが、こうなっては仕方ない。とまでは新星は考えない。ワーム殲滅のため、はしご状神経並に短絡的にその場から駆け出してゆく。

「うおおおお!？」

ジョウントを抜け飛来したジェイルゼクターをキャッチ。

走りながらゼクターを右手グローブの甲に押し当てる。

「変身!」

叫び、両手を腹まで押し下げてセットアップ。

《ヘンシン!》

ハニカム構造状に展開形成されてゆく装甲。

駆ける新星の姿は仮面ライダー ジェイル・マスクドフォームへと転身する。

だがそこで新星は、再びかざした右手の甲のゼクターに左手をそえた。

走りながら、右手のジェイルゼクターを力キンとわずかに角度を変える。

チャージアップが始まりジェイルのマスクドアーマーが、パージのための準備状態に移行し、パーツ単位で次々とせり上がってゆく。

『キャスト・オフ!』

そして左手はゼクターを握り締めたまま、両手を腰の前まで引き下げた。

その動作につれジェイルゼクターがグローブのセットアップサークルの上で180°回転し（玉虫の頭が前を向く）、電光が全身を駆け抜け、全身のマスクドアーマーが全方位へ弾け飛んだ。

《チェンジ! ジュエルビートル!》

現れたのは、ゼクトの甲虫系ライダーとの共通部位を持ちつつ角の替わりに触覚のようなアンテナを生やし、より大型なアイスグリーンの軽装甲を全身にまとった『仮面ライダー ジェイル・ライダー フォーム』であった。

アーマーパーツに数体が打ちのめされた所でワームの数体がジェイルに気付いて振り返る。

そのワームの群れのその向こう、目標の少年までもが気付いてこちらを振り向こうとする。

その瞬間。

『ち。クロックアップ!』

《クロックアップ!》

ベルト横のスラップスイッチを叩いて加速空間に突入。

新星以外のその場の全ての者の動きが時計の長針よりも緩慢になる。少年の顔はまだこちらを向いていない。

『まとめて片付けたらああああ!』

一連の動作中、ずっと走っていた新星は、その勢いのまま三度、右手のセクターに左手をそえた。

カキン、と今度はジェイルセクターを前方へスライドさせ、右拳の上に完全にかぶせた。まるで巨大な鋼のボクシンググローブだ。

同時にチャージアップが始まりそしてそれと連動してジェイル・ライダーフォームの肩アーマーや背面装甲、ふくらはぎのパーツが展開し、その下から虹色の器官が現れた。

輝きを増した各装甲の下から、虹色の輪が幾重にも後方へ拡がり、やがて彗星のような光芒を吹き出す。

『うおおおライダーチャージ!』

《ライダーチャージ!》

ドン!とジェイルの速度が増す。

今やジェイルは全身に虹色の輝きをまとい、地上を迸る一筋の虹の流星と化した。

《フォースフィールド》を高出力で全身にまとい背面ブースターによる加速を加えた体当たりを敢行する、これが仮面ライダー・ジェイルのチャージアップアタック、ライダーチャージである。

もともと広くない遊歩道。その先に行く少年をつけて歩いていたワ

ームの群れは、おあつらえ向きにほぼ一直線で並んでいた。

『でやあああ衝撃のファーストなんたらああああ!』

正面に突き出したゼクターに覆われた右拳でその群れを容赦なく貫通してゆく虹色の流星。

ームの群れを突き抜けきった所でようやく停止するジェイル。

《クロックオーヴァ。》

ぼん!どん!

加速状態を抜けた所で次々と緑色の炎を撒き散らして爆発・消滅してゆくームの群れ。

ジェイルゼクターがームの殲滅を確認したことで自らグローブから離脱して飛び去ってゆく。

新星が変身を解除したところでようやく少年が振り向いてきた。

「……あ。」

「あ。」

すぐ間近で向かい合うふたり。

数寄屋 亮介・3

そこにいたのは。

いつの間にか意外なほど間近に立っていたのは、もう一ヶ月ほど前だろうか、街中で暴行を受けていた亮介を救ったかに見せかけて、なお亮介を痛めつけてきた通りすがりの暴力男であった。

「たあすけてえ〜!」

「待てコラ!」

逃げようとしたところで男に襟首を掴まれた。

「な!? なんなんですか!? 離してください! あの時、逃げろって言ったからいま逃げようとしているのに!?!」

「いやいいから止まれ! 今度は逃げんな!」

「いやだああああ！？ 痛いのは痛いから嫌で嫌なものは嫌だから嫌で痛くていやいやいやだああああ！？」

「……………」

結局、亮介は暴力男にはたき倒された。

「……………」

「まあ食えよ。うめえぞ」

頭頂部にでっかいコブを生やした亮介は、暴力男に引き摺られるように近くの喫茶店に連れてこられていた。

目の前のテーブルに出されたケーキとコーヒーには触れず、しかもつ面であらぬ方を見ていた。

「いや、悪かったって。つーか俺も目の前に出ると思わなくてよ。そんで逃げられるとき、捕まえなくなるじゃん？」

「なりません。」

「……………」だからその、なんだ、まあワビだよワビ。ケーキ好きだろ？食つとけよ。な？」

「帰っていいですか？」

「……………」しばし無言になるふたり。

「あああもう男らしくねえなああ！？ヒトがこうして頭下げてワビ入れてんだからドカンとイッパツ気持ち良く許せてんだよゴラアアア！？」

「どの辺が頭下げて謝ってんですかツツ！？」

とうとう立ち上がって怒鳴りだす男に完全にすくみ上がってテーブルの下に避難しつつつつ込みを入れる亮介。

さすがに店内の他の客がこちらを見ているようだったが、男は一顧だにしない。

どずんと椅子に腰を下ろした男は、再び自分のチョコレートパフェをつつつきだす。

「……………」なんか最近、変なこととかなかったかよ」

「え？」

ようやく椅子の上に復帰した亮介は、素っ頓狂な声をあげてしまう。
「……………!?!」

「またもギョ口目をひん剥いて亮介を睨め付けてくる男。」

「いいからまず喰えよ!?! 甘い喰うと元気になんだよ! おまえはまずソレ喰って元気になれ! そんなで俺の質問に答えろ!」

「は、はい!?!」

反射的に返事をして、あわててフォークを取る亮介。

「なんか最近同じようなことがあったなーと考えつつ、やはり切迫した空気でケーキを咀嚼し飲み込んでゆく。」

「へえ。自殺をね。」

「はあ。すみません。」

「あ? 俺に謝るこっちゃねえだろ。てめえの命だし」

「……………はあ。」

「なんだか既視感に見舞われながら生返事をもらす亮介。」

「(冷たいよな)。自殺しかけたヒトのこと心配してくれたっていいのに。)」

「胸中でぼやきつつ、すっかり冷めたコーヒーを飲み込む。理不尽と味の両方の苦味に眉をしかめた。」

「……………まあその『そっくりさん』とかの心配はすんな。そのうち片付くからよ。おめえはなんにも気にしねえでメシ喰ってクソに変換して寝てろ。」

「またその男の乱暴な物言いが、鬱に傾く亮介の癪に障った。」

「……………!」

「顔を暗くした亮介に気付いたふうもなく、男は伝票を取り上げて立ち上がる。」

「じゃあな。……………悪かったな」

「え?」

「通りすがりに亮介の肩を叩いて去ってゆく男。」

「不思議なことに毒気が抜けてしまった最後のひとことに、ついレジ

に向かう男を振り返る亮介。

ゼクト・1

港湾区のとある廃倉庫群の端にて。

連続する銃撃音の多重奏があちこちで炸裂する。

やがて倉庫の外へ後退してくる黒の防護服をまとった一団。

彼らの構える紡錘形の武器・マシンガンブレードに牽引されるかのように次いで進み出てくる緑色の異形数体。

後退してきた黒の一団は、河を背に陣形を組み直し緑の異形へ向けて一斉射を始める。

『三班、再配置完了！斉射開始！』

『斉射開始！』

そこに、緑の異形の一団の真横から銃撃の雨が降り注いだ。

突然の横からの攻撃にたたらを踏む緑の異形。

『二班、撃ち方やめ！移動！』

『二班、了解！』

後退してきたほうの黒の一団が、緑の異形がひるんだ隙に次のポイントへ移動を開始する。

『三班、二班の移動が完了するまで撃ち方やめ！』

『四班、配置完了！』

『撃て！』

今度は緑の異形たちの背後、倉庫の中からマシンガンの斉射が襲いかかる。

『二班、再配置完了！』

『三班、移動せよ！』

『よし！撃て！』

指揮車と各班長による矢継ぎ早の指示の応答によりワームの群れを

誘導してゆくゼクトルーパー隊。

四方からの銃撃の雨にさらされるワームの群れの中にやがて、体色を変化させるものが現れた。

『C-2、脱皮します！』

『銃撃を集中させる！』

『クロックアップします！』

指揮車の中で警告音が鳴り響く。

ワームのうち一匹が、褐色に膨張した表皮を引き裂き、今まさに成体へと変態しようとしていた。

ゼクト・2

大気のうなる音しか聞こえない、まるで空の孤島。

真下の道路の喧騒すら届かない地上230メートル以上、五十数階建ての超高層ビルの屋上に二人の人影があった。

屋上外縁の設置器具に腰掛け、赤い奇形のライフルを構えているのは、同じく赤い人影。

それはゼクトの仮面ライダー『ドレイク・ライダーフォーム』と全く同じ形状だが、全身を包む装甲各部が赤系のカラーリングで塗り分けられていた。

その『赤いドレイク』の背後には、背を向けて立つ黄金色のライダー！。

甲虫系のデザインの装甲に身を包み、右肩にのみ鋭い衝角を持ち、顔面を三つ又の角で覆われた巨漢のライダーは、腕組みし不動で佇む。

港湾区の廃倉庫でワーム掃討作戦中のゼクトルーパー隊の様子を『赤いドレイク』はライフルのスコープ越しに見ていた。

ここは現場から数キロメートル離れている。地上においては当然建物に阻まれ直接見ることはできないが、この高所からはその廃倉庫のある地域はおろかその先の東京湾、そしてその湾上に浮かぶメガフロート『クリサリス』まで一望することができる。

もつとも、廃倉庫とそこで活動するセクトルーパー隊とワームの様子まで識別できるのは、『赤いドレイク』の持つライフルの超高解像度スコープあつてのことだが。

ライフルのスコープが捉えた映像は、それを持つ『赤いドレイク』の頭部フォースアイを通じて装着者の視野にダイレクトに展開されている。

その光景の中で、囲まれて集中砲火を受けるワームの群れのうちの一団の様子が変調したのを始め、次々と数体がその表皮を変色・膨張させ脱皮しようとしていた。

『……ライダースナイプ。』

呟いて、片手で握る銃把は微動だにさせず、ライフルの尾部、ヒッチスロットルを引く。

《ライダースナイプ。》

タキオン粒子変換エネルギーが発揮され、体表面に電光が迸り。そして『赤いドレイク』は、トリガーを引いた。

t o b e c o n t i n u e d .

第5話（前書き）

こちらは、基本的に鉄槻オリジナル&借用オリジナルキャラクターでのみ構成される『仮面ライダー カブト』の外伝的ストーリーです。世界観に若干のズレがあるほか、原作のキャラクターはほとんど出てきませんので御注意下さい。

第5話

数キロメートル離れた港湾区の廃倉庫でワーム掃討作戦中のゼクトルーパー隊の様子をライフルのスコープ越しに見ていた『赤いドレイク』。

『……ライダースナイプ。』

呟いて、片手で握る銃把は微動だにさせず、ライフルの尾部、ヒットスロットルを引く。

《ライダースナイプ。》

タキオン粒子変換エネルギーが発揮され、体表面に電光が迸り。そして『赤いドレイク』は、トリガーを引いた。

射出された光弾が、このビルの上から現場までの数キロメートルの距離を高速で飛翔し、間近にいたサナギ体数体ごとその脱皮しかけのワームを貫いた。

『赤いドレイク』は神業的な命中になんら感慨も抱かず、ただ冷静に次々と次弾を装填し目標を変更して発射してゆくこと数回。作戦通りに誘導されてきた廃倉庫のワームの群れを残らず一掃してしまった。

『作戦、終了。』

港湾区にいるゼクトルーパー隊指揮車から作戦完了の旨を伝える通信が『赤いドレイク』と黄金のライダーそれぞれに届いた。

『レディックの機能は万全のようですね。』

背を向けたまま立つ黄金のライダーが、その野太い声に似合わぬ流麗な口調で背後の『赤いドレイク』・仮面ライダー レディックに問い掛けた。

『……問題ない。』

銃を天へ向け、射撃体勢を解き立ち上がる。

『ならば重畳。帰投しましょう。』

空調機材やパイプの類をまたぎながら黄金のライダーに追従するレ

ディック。

その瞬間。

黄金のライダーの拳がレディックの顔面数ミリの所で寸止めされていた。

レディックも、驚愕したふうもなく微動だにしない。

『なぜ避けないのです？レディックの動体視力なら見切れるはず』

『貴様の、黒崎 一誠の、そして黄金のライダー』『コーカサス』の噂は知っている。俺の特性も把握している。貴様の手足の届く距離で抵抗は無意味。』

『ZECTは能力と同時に忠誠を求める』

『無用な心配だ。俺は俺の仕事をするだけ。』

レディックはコーカサスの拳を除けるとそのまま歩み去ってゆく。

数寄屋 亮介・1

澄み切った蒼天の下、ヴィヴィッドトーンのカラフルなレンガに構成されたまるでヨーロッパのような町並みの風景の中を無数の人々が楽しげに往来する。

『アミューズアカシックフィールド』。メガフロート『クリサリス』内に建設された大型アミューズメントパークである。

だが、それほど『大規模』というわけでもなく、対岸の超巨大テーマパークとはあらゆる面で比べるべくもないが、『人工島建設』のニュースに便乗する形でその存在が知れ渡り、人工島住人だけでなく、日本全国から訪れる人がいるなど客足は上々だと各メディアは報じている。

そんな『有名スポット』に、なんだかまるつきり場違いな顔をして

数寄屋 亮介はやってきた。

「……なんで俺、こんなトコに……？」

明智 智晴・1

『アミューズアカシックフィールド』の敷地の外れにある管理事務施設の玄関に、白いスーツの男・明智 智晴が数名の部下を伴って現れた。

このアミューズメントパークを管理・運営している会社もまた明智グループであるが、管轄外からの突然の要請にもよらず智晴はあえて予定を変更してまでやってきたのだ。
通された会議室。

だが着席も待たずに智晴のもとまでやって来た黒スーツの男は、そのまま智晴に耳打ちした。

「……そうですか。わかりました。……害虫め」

「園内のお客は？」

舌打ちしてうめく智晴に、重ねて訊ねる黒スーツ。

「そのままでもいいでしょう。気取られないように調査を続けてください。」

数寄屋 亮介・2

数日前のこと……。

「ねえ亮介。『AA』行こう。」

「『AA』？なにそれ」

春瑠から唐突に知らない単語で話しかけられ面食らう亮介。

「『アミューズアカシックフィールド』のこと。長いから略して『

A A』。知らない？みんなそう言ってる。『クリサリス』のニュースでさんざん出たじゃない。」

「いや、そこは知ってるけど。略称なんて初めて聞いた。」

そしてさらに唐突に日時を指定されて待ち合わせに至った。

そもそも根本的にインドア派な亮介は休日に出掛けるところと言えば一ヶ月間隔でやってくる発売日に玩具・ホビーショップヘブラモデルを物色しに行くくらいで、いわゆる『有名デートスポット』などとは間違っても足を運ぶことなどなかった。

だから言われた直後は気乗りしなかったのだが、他でもない『パートナーである』春瑠からの誘い、すなわち『それはデートじゃないか!?!』という浮かれた脳内翻訳によつて発起した亮介の気持ちの半分以上はこの状況を『楽しみ』にしていた。

だが、『アミューズアカシックフィールド』入り口付近で陰に隠れるようにして春瑠を待つ亮介は今、若干の後悔を感じていた。

「（うわあ。やっぱなんかみんな着てる服の種類がちがうよぉ!?!）」

辺りを行き交う『若者たち』のファッションを見、そして自分の『やつすい無地のインナーにデニムの上着』という出で立ちを見下ろすため息をつく。

なにしろ今までは趣味の世界に没頭していればそれで良く、見た目にはまったく無頓着だった亮介だ。

それでも手持ちの中で一番『それなり』なものを選んでみたが、これでは。

「（……帰ろうかな。）」

待ち合わせ時刻から三分経過。

さすがにいたたまれなくなつて逃げ腰になつた亮介の肩をその時誰かが叩いた。

「ひえ!?!」

「はい。」

「遅くなってごめん。……てほどでもないかな」

背後から現れた春瑠は、なんだかカラフルな格好をしていた。

ベルトバックルを模した飾りが各所についた黒のベストにショートパンツ。そしてそこから伸びる細長い腕脚はヴァイオレットとオレンジのボーダー柄に彩られた袖とタイツに覆われ、まるで真上から潰したかのように意匠化されたシルクハットのような帽子をかぶり、学校ではまるで倉庫の最奥に転がっている壊れたほうきのような印象のあつた枕木　春瑠は今、斜に傾けた顔に薄く化粧を施し明るく澀刺とした『女の子』に変貌してそこに立っていた。

「……なにボケっとしてんの？」

「……えあ！？」

つい上から下までじっくり見蕩れていた亮介は呼びかけられてようやく我に返った。

「ああいやその！？……ハロウィンみたいだねなんか。」

とりあえず率直なところを言ってみる。

「でしょ。ハロウィンのデザインモチーフが好きなんだ。」

見ればプレスやストラップ、至る所にぶら下がる飾りはことごとくコウモリやカボチャの意匠である。

「へえ。」

素直に感心した亮介は、改めて己の服装を見下ろして、そのままのポーズで肩を落とした。

「……どうしたの？亮介。」

「いや……地味でごめん。」

「好きで着てるんじゃないの？」

「いやあ。こういうのよく分かんなくて。」

より一層しよげる亮介の腕が突然横からカラフルな腕に取られ引張られた。

「なら、一緒に服見て回る？見立ててあげるから。」

「ええ!？」

そのまま園内のショッピングモールのほうへ引き摺られていった。

明智 智晴・2

『アミューズアカシックフィールド』敷地全域に設置されている監視カメラの映像を一望できる管理施設のモニタールームで智晴は椅子に深く腰掛け仏頂面でモニター群を睨みつけていた。そこへ黒スーツの男がファイルを携えてやってくる。

「失礼します。これを」

「……。」

受け取ったファイルを開くと、いくつかの人物写真とその詳細情報が書き込まれた書類。

「ネオゼクトが最近注目している人物たちです。」

「ほう。」

「そしてこれ。この少年が今、ここのショッピングモールにいます。」

指し示された1枚の写真に映っているのは、小柄な少年。

それを確認した智晴は管理オペレータに指示をかける。

「三番から八番までのモニターをショッピングモールに。六ヶ所等間隔に空けて映像を出して下さい。」

「はい」

オペレーターの操作により次々とモニターの画が変わってゆく。

「既に追跡させています。先の報告では……あそこ。三番の場所にいました。」

「……、五番、ズームさせてください!」

突然の指示に、画面の中身が拡大されてゆく。

映し出されたのは、確かに写真にあった少年の顔。

ひどく地味な格好のその少年は、対照的にカラフルな少女を伴って

いたが。

「あの少年を尾けている者の存在は？」

「いまは確認されていません。」

「引き続き尾行者の存在にも気を配って下さい。……『数寄屋 亮介』君、ですか。……なるほど。確かに今が旬の獲物ですね。」

その『数寄屋 亮介』なる少年の調書に目を通した智晴は、皮肉げに口の端を吊り上げた。

伊達 新星・1

「うりゃあっ!？」

新星の渾身の一撃がパンチ力測定ゲーム機を木っ端微塵にした。

伊達 新星・2

『アミューズアカシックフィールド』園内を全開で走り回る新星と、それを追う従業員と警備員多数。

伊達 新星・3

「……クソツタレが! あんなヤワイパンチゲーム作るほうが悪いじやねえか!? パンチゲームにパンチしてなんで追っかけらんないやなんねんだ!？」

怒り狂った従業員(途中から警備員も混じったが)に追い立てられ、ようやくそれらを撒いて施設の裏手に隠れ潜んだ新星は、苛立ちのままばやき吐き棄てる。

「……しっかもああクソ! あのガキ見失うしよお!? どーすつか

な」

腰掛けた鉄骨の束の上で脚を組み替える。

開園されてだいぶ経つというのに、今の時点で建設中の店があるらしい。すぐ近くでガンガン、ジジジと騒音を立てている。

「チッ。うるせえな。……ああまた織田サンに怒られちまう」

騒音で今後の行動の見当もつかず苛立ちを募らせる新星。

その時、新星の身体が座ったまま浮き上がった。

「おわ!？」

危うい所でバランスを取り戻す。

どうも、腰掛けていた鉄骨ごと浮き上がったようだった。

「なんだなんだ!？」

あわてて周囲を確認した新星は、そこに恐るべき状況を目撃した。

台場 和馬・1

「」

『アミューズアカシックフィールド』のショッピングモールの新規開店の店舗の建築現場でバイトをしている和馬は、軽く鼻歌など奏でつつ、指定の鉄骨を取り持ち上げた。

重機もナシに重い建材を持ち運ぶ和馬の能力は、ここでも重宝されていた。

「おわ!？なんだなんだ!？」

「ぬ？」

その時、後方上部から何者かの声が聞こえ和馬は振り向いた。

「むっ？」

だが、そこはまた別の店の裏口であり、そこに積んである鉄骨と建材の他には何者の姿もない。

「コラア! テメエ! こっちだこっち!」

再び背後から声がする。

今度は間違いなく自分に向けられたセリフに、和馬は改めて振り向いた。

「ぬむう。」

だがしかし。そこにもやはり何者の姿もない。

強いて言えば、進行方向の先にある自分の工事現場にいる作業員だろうか？まだだいぶ離れているが。

「ふむ。面妖な。」

「うるせえコラ！失礼なこと言うんじゃねえ！面妖なのはテメエだろうが！」

ゴンゴンと肩に担ぐ鉄骨から小突く振動が伝わってきた。

「いや俺も信じらんねえけどテメエが担いでる鉄骨の上だ！」

「……おお。貴様、いつの間に？」

首だけを巡らせた和馬の視界に、確かに自分が担いでいる鉄骨の上に座っていた男が罵声をがなりたてていた。

「どこら辺までアレなんだテメエ！？ 最初っからここに居た、つつか座ってる俺ごと持ち上げてなんで気付かねえんだよ！？」

「うむ。そこにいると危ないぞ。早く降りることだ。」

「言われんでもそーするわい！いいか、動くんじゃねえぞ！？」

その男はそれでも慎重に飛び降りた。

伊達 新星・4

「言われんでもそーするわい！いいか、動くんじゃねえぞ！？」

腰掛けた鉄骨ごとグルグルと振り回された新星は、若干半泣きになりながら慎重に大男の担ぐ鉄骨から飛び降りた。

驚くべきことに、鉄骨から新星の体重が離脱した瞬間も、大男の担ぐ鉄骨はたいした反動も揺れも起こさなかった。

その涼しげな顔にも微塵の変化もない。

「……！？」

地面に立つことで、その大男の体格のデカさがよりはつきりと認識された。

なにしろ数歩離れて立つ新星の目の高さにまでその鉄骨が伸びているのだ。

新星とて背の高い部類だが、それを肩に担いでいる大男の背丈たるや、まさに驚異である。

「……？」

その大男を見上げた角度に、新星は既視感を覚えていた。だが、その原因が思い出せない。

「ふむ。今後気を付けることだ。」

「いや、それ俺のセリフ……」

言い置いて歩み去ってゆく大男のその『普通の』歩調に、新星の買い言葉もつい尻すばみになる。

「……人間か？ありや。……まあいいや、あのガキ探さねえと。」

毒気を抜かれた新星は、目的を思い出してその場から走り去った。

数寄屋 亮介・3

「はい亮介。」

「あ、うん。ありがと」

確保して座っていたテーブルで、二人分のジュースを持ってきた春瑠からひとつのカップを受け取る亮介。

「結構、探せばあるものなんだね。」

「亮介は今まで服を見なさ過ぎだったんだよ。」

「ていうか、面倒臭かったんだよ。ずっと母さん任せだったから」
「シヨッピングモールの中のメンズ・カジュアルシヨップを引き摺られるようにシラミ潰しし、春瑠の質問によって服の好みを誘導され、あれもこれもと試着を繰り返すこと半日かけて数十回。」

亮介も、まさか自分に似合う「カジュアルな服」があるなどと心底驚愕したものだった。

「でも、結局買もしないのに、あんなに店散らかして良かったのかな。」

そんな亮介のぼやきに、春瑠の心底あきたような顔が応えた。

「なに言ってるの？サイズなんか着なきや分かんないし、そのために試着室があるんだし、今度亮介が服買う時にはまたここに来ればいいじゃない。」

当然、そんな服一式を今すぐ買えるほどの持ち合わせのなかった亮介だ。

だから今は元の服装のままだが、いずれ買える好みの服の存在を知れたおかげで、最初の頃の気後れはすっかりナリをひそめていた。

「そうだね。」

ちよつとした達成感に納得し、亮介はストローをくわえて中身をすり込んだ。

『……アミューズアカシックワールドへ御来園の皆様にご案内いたします。プラネタリウム『アカシックアレンジャー』は、本日中午らせていただきます。あらかじめ御了承下さい。詳しくは、係員のほうまで……』

突然の園内放送に、春瑠はふとくわえていたストローを口から離し、あらぬ方を見上げた。

「……プラネタリウム、中止なんだ。見たかったのに。」

「さっきもゲームセンターですごい音がしてたよね。あれっきり一時立ち入り禁止になったり。大丈夫なのかなここ。」

明智 智晴・3

「お客の誘導は？」

「完了しています。」

「アクトルーパーの配置は？」

「一班が移動中。間も無く完了します。」

「私がプラネタリウムへ入ったら、ドアは全て完全封鎖し、予定の配置を保ってください。宜しく願いますよ。」

「了解しました。」

従業員通路をせかせかと歩いてきた智晴は、そう言い置くと黒スーツを残し、ひとり、『アカシックアレンジャー』と書かれたドアの向こうへ進み、後ろ手に扉を閉ざした。

ガシャアアン……と鉄扉の閉鎖する音が反響する暗闇の空間。

広大な半球状のこの設備こそがプラネタリウム『アカシックアレンジャー』である。

本来なら、上映される内容に合わせて座席やスクリーンまでもが大きく移動する仕掛けなのだが、それらの機能は全て停止されている。その原因となった輩を排除するために。

「『ワームホイホイ』とはまだいきませんが、お前たちワームを殲滅するために、誘導し隔離する仕掛けの実験場でもあるんです。この『アミューズアカシックフィールド』は！」

ばっ、と前方に左腕を突き出す智晴。

その左前腕に装着された『マホークガントレット』に向けて、ジョウントを抜け飛来するオオスカシバ型のゼクター『マホークゼクター』。

滑り込むように装着されたゼクターの勢いを、前腕を引き下げて殺す智晴。

「変身。」

《ヘンシン！》

音声が認証を告げ、そのポーズのままアームガードから全身へハニカム構造状に展開形成される装甲。

まるで垂直尾翼が二枚並んだかのように盛り上がる背面装甲。両肩に装着されたラウンドシールド（円形の盾）。ハンマーヘッドシヤ

イクのように左右に張り出した部位を持つ頭部。全体をグリーンで彩られた奇形の鎧。

『仮面ライダー マホーク・マスクドフォーム』がそこに顕現した。『お互い、暗闇だろうと頓着しない身の上でしょう？隠れてないで出てきなさい！』

そう叫んだマホークが、突如真横に吹き飛んだ。

何者の姿も見えないのに横殴りに吹き飛ばされたマホーク・マスクドフォーム。

『（クロックアップ！？もう既に脱皮しているヤツがいる！？）』
二度、三度。

次々と別角度へ衝撃を加えられるマホーク・マスクドフォーム。

『……もとより自分の店の中でマイザーをバラ撒くつもりはありませんよ。ウチの社員が、路頭に迷うじゃないですか。』

叩き伏せられたところから立ち上がり、智晴は拳を天に向け肘を曲げた左腕のマホークゼクターに手を伸ばし、その翅の端をつまんだ。
『キャスト・オフ！』

叫びと同時に、その巨大な翅を、まるで扇子を広げるように180°展開した。

連動して両翅を広げたそれは、まるで透明なラウンドシールドとなる。

《キャストオフ！》

電光が全身を這い回り、次々とパーツ単位でせり上がったマスクドアーマーが細かく分割し四方へ弾け飛んだ。

あとに現れたのは、全身を獣毛で覆われた体躯。

ゼクトのザビーに酷似しつつ口元に口吻のような突起を持ち、全体の装甲のカラーリングをブルーグリーンで統一しているが、両肩のシオルダープレート及び腕脚側面に設置されている装甲板は水晶のように透明で下のスーツの地が見え、背中にまるで悪魔のような形状の、しかしこれもまた水晶のように透明な翼を生やした異形。マ

スクドアーマーの背中突起は、この翼を保護していたのか。

《チェンジ・ホーク・モス！》

これが、『仮面ライダー マホーク・ライダーフォーム』の姿である。

『クロックアップ！』

《クロックアップ！》

ベルトのトレーススイッチを操作して加速空間に突入する。

辺りの静寂は『無音』に変化し。

そしてすぐそこにワーム成体が姿を現した。

ホタルの生物相を持つランピリスワームである。

そのすり潰した葉のような緑色の身体が、ぼんやりとした光を放ちはじめた。

智晴の思考トリガーによって、背中透明な翼の基部にある棒状部品が回転し両肩上に飛び出した。

それを左右の手それぞれで握り、翼ごと取り外し眼前にかざした。

マホークの専用格闘装備『マホークトマホーク』である。

『はあああああ！』

その悪魔の翼のような形状の透明の斧を、むしろ剣のように振りかざして突撃するマホーク。

一撃、二撃。

停止していれば光の屈折率の変化で見えようが、高速で動作してはまともに見えないはずの透明の戦斧を、ランピリスワームは見切り、右腕の球状の部位から発生する力場で反発、受け流して見せた。

体勢の崩れたマホークに対し、ランピリスワームはその球状の右腕を振り上げ、攻勢に転じようとした。

だが。

『クリスタルディバイン作動！』

《クリスタルディバイン！》

音声が認証した瞬間。

両肩の透明なショルダープレート及び体側面の透明な装甲板、両手に握るマホークトマホークとそして透明な円形の盾を成すマホークゼクターの翅が電光を放ち、だがやがて光を失ったそれらの部品の下に透けて見えていたマホークの身体が溶けるように消失し、背後の風景を映し出した。

『!?!』

狼狽するランピリスワーム。

たとえ透明でも、先ほどまでは屈折率が発生して境界線くらいは見えていたはずの透明部品が『完全な透明』になり、まったく視認できなくなってしまった。

それどころか、それらの部品の下にあったはずのマホークの身体までもが見えなくなり、今のマホークはまるで身体の所々が挟られ欠落したかのような有り様になっていた。

振り下ろしていたマホークトマホークを下から上に振り上げる。

その途上で、マホークの身体の上を、トマホークの形をした『穴』が通過したかのように背後の風景を映し出していった。

これが仮面ライダー マホーク・ライダーフォームの妙技、完全迷彩『クリスタルディバイン』。

これは装甲板を通過する光を偏光させ透明化させるのみならず、体表面を覆う獣毛のような特殊素材『スマートスキン』が熱や臭い、タキオン粒子を含めたあらゆるエネルギーを吸収し、それらを併せてワームの感覚器官全てからマホークを『見えない』状態にしてしまふ『完全な』迷彩装置である。

現に、光学器官のほか、熱源探知やタキオン粒子にも干渉できるはずのワーム成体が、まるで『穴だらけ』になったように見えるマホークを見て戸惑っている。

反撃のつもりで振り下ろしたワームの右腕は、そのため狙いを外し空振りに終わった。

ワーム・1

改めて体勢を立て直したマホークは、両腕を交差させ、左右のマホークトマホークを上下に構えた。

その巨大な刃が『クリスタルデイベイン』の及ばない部位までを覆い隠し、マホークの姿の一部も残さず隠蔽してしまった。

『……視えないでしょう？ここで私が口を閉ざせば、完全なる無音の刃となる。』

そして沈黙。

『……！？』

ランピリスワームは今までマホークが立っていた場所目掛けて走り寄り、その右腕の球状を振り下ろした。

だが、手応えは皆無。

『……！？』

あわてて辺りを見回すも、ライダーの姿も、熱源も、タキオン粒子エネルギーも感知できない。

『ライダー・カムシン。』

突然、ここから離れた場所からそんな人間の弦きが聞こえた。

振り向けばそこは、この半球状のドームの反対側の奥。

まだ脱皮もしていないワーム・サナギ体の群れが十数体いたはずの所である。

薄暗いこの場では光学による目視では判別できない。

だが、熱源やエネルギーによる感覚で『視た』ワーム・サナギ体の群れが、先の弦きのあと次々と両断され絶命させられていったのが見えた。

『……！？』

異様な状況に混乱するランピリスワーム。

だが、その混乱も、その身を脳天から唐竹割りに分割されたことで自覚なく終結してしまった。

《クロックオーヴァー。》

どん！ぼん！

加速空間を抜け、姿を現したマホークの背後のはるか遠くで、順番に切り裂いたワームの死体が全てほぼ同時に緑色の炎を撒き散らして爆発していった。

『カムシン』とは、局地風のひとつで3～5月にかけてサハラ砂漠からエジプトに吹く熱風のこと。もっとも、ワームを凪いだ風の跡には砂はおるか塵ひとつ残りはしないが。

ワームの殲滅を確認したマホークゼクターが、自ら離脱し飛び去ってゆく。

変身を解除した智晴は、携帯電話を取り出して操作し耳に当て歩き出した。

「終わりました。跡を洗浄し、施設の機能を全てチェックして営業再開時刻を報告してください。」

カシッ、とスナップを利かせて携帯電話を折り畳む智晴。

「……私は『王』にして『城』にして『兵』。いかなる侵略も許しはしない。」

『ライダーカムシン』。

チャージアップされたエネルギーを偏光フィールド生成に充て、『クリスタルデイベイン』の及ばない部位まで含め完全に透明化してしまう。

わずかな残りを破壊エネルギーに充てることになるため、その分攻

撃力が他のライダーのチャージアップアタックよりはるかに劣るが構わない。
避けられない敵を前に、じつくりと急所を狙い、確実に全力の攻撃を当てることができるからだ。

数寄屋 亮介・4

『アミューズアカシックフィールド』のショッピングモールは4、5階層の建築物ではあるが、普通の四角いビルと違い、まるでモン・サン・ミッシェルを彷彿とさせる、各階層が複雑に組み合った山型の多層構造体を成している。

一階からでも空が見える場所があり、上階の外縁部に出れば、まるで山岳観光地の展望台のような形になっている。

辺りを茜色に染めている夕陽が沈みかかる様すら見えるこの場所で、亮介は春瑠と手摺りに並んで遠くを眺めていた。

「ありがと。一緒に来てくれて。……プラネタリウムは見れなかったけど。」

「いやあ。俺も、なんか服とか選ぶ参考になつたし。」

なんだか風が心地よい。

こんなふうに風を感じることがあまりなかった亮介は、今日の出来事は全てが新鮮だった。

以前、飛び降り自殺をしようとしたビルの屋上の風の冷たさも、だから今は思い出せない。

ふと、隣に立つ春瑠の横顔を見る。

斜に傾けた皮肉げな眼差しなどは、化粧で緩和されているとはいえ面相が変わるわけではないのだが、今のそこには、なんだか学校で見かけるのとは違う穏やかさが感じられた。

「（……この娘は、なんで自殺なんかしようと考えたんだろう……）」

「

自殺倶楽部の規則により、事情は聞かない決まりなので訊いていない。

だが今の亮介はこの状況に安堵を覚え、春瑠に穏やかさを感じている。

一緒にいてくれる人がいることの、なんと暖かなことだろう。

この状況がずっと続けばいいのにと、亮介は夕焼けを眺めながらそんな夢想到に浸っていた。

だから、それがつい口をついて出てしまった。

「……ねえ。良かったらさ。このまま、自殺なんかやめて、ずっと一緒にいない？」

「勘違いしないで」

「……………え？」

「自殺する気がないのなら、『君』になんか用はないから。」

「……………どうして……………」

「……説明しないと、わかんないかな？ やり残したことをするために、今日はここに來たの。明日死ぬわけじゃないけど、明日死にたくなるかもしれないから。」

まるで冷たいガラス玉のようなその春瑠の斜の双眸を、亮介はただ見返すことしかできなかった。

t o b e c o n t i n u e d .

第6話（前書き）

こちらは、基本的に鉄槻オリジナル&借用オリジナルキャラクターでのみ構成される『仮面ライダー カブト』の外伝的ストーリーです。世界観に若干のズレがあるほか、原作のキャラクターはほとんど出てきませんので御注意下さい。

第6話

『自殺倶楽部』では、『共同自殺者の紹介』にあたっては、お互いにハンドルネームを設定することを推奨している。規則のひとつ「互いの事情を詮索しない」の延長にあたる仕様である。

少女は『^{あかり}灯』と名乗った。

相手の少女は『^{えみ}笑』と名乗った。

『共同自殺契約』をした二人にのみ与えられるメールアドレスによる数度の打ち合わせにより自殺方法と決行日が『自殺倶楽部』に伝えられ、場所と必要な物資が用意してある旨が記されたメールが『灯』と『笑』の元へ届けられ。

そして当日、『渋谷封鎖地区』に程近い廃ビルのひとつの中階に二人の少女が現れた。

自殺方法は『無味無臭の毒ガスによる安楽死』。指定場所であるペンキで目印をつけられた扉を二人でくぐると、大きな鏡が壁に張り付いているだけの殺風景な部屋の真ん中に、やや古びたガスボンベがひとつ無造作に転がっていた。

「生まれ変わるなら、明るい性格になりたいな、って。」

「私も。楽しく笑えるようになりたい。」

己の希望を偽名に冠した二人の少女は、一緒に重ねた両手で、ボンベのバルブを何度も何度もひねった。

「ツケツヒヤツヒヤツヒヤツ死んだ！また死んだホントに死んだよ舞菜！」

巨大なマジックミラー越しに、^{まがつき・ななひこ}毒ガスによる共同自殺の様を眺めていた『自殺倶楽部』の設立主、^{まがつき・ななひこ}曲月 七彦は、猫背を反り返らせて狂喜していた。

「……。」

呼びかけられた漆黒のカントリードレスを纏った女、藍川舞菜は、あいかわ・まいな 憂いを秘めたその顔に、うつすらと笑みの色を混ぜた。七彦は見向きもしないのに。

「なア!?これでいいんだろ?」

引き攣った笑顔のままの七彦が振り向いて、そこに並び立つ人影に裏返った声で尋ねかけた。

舞菜の隣にいる、無表情で立つ『灯』と『笑』に。

数寄屋 亮介・1

「……………うつ、くつ。……………うつつ……………」

夜。暗闇にそびえ立つ巨大な骨格標本のような鉄骨ムキ出しの建築途中のビルの屋上で。

亮介はひとり、正体もなく泣きじゃくっていた。

「……………うつつ、くうつ……………うあああああ!?!」

何がタイミングだったのか。やおら立ち上がった亮介は、屋上外縁へ向けて駆け出した。

「あああああつ!?!」

そして虚空へと身を踊り出した。あとに身を受け止められるのは、数十メートル下の硬い地面のみ。

「あああああ!?!」

後悔もない。混乱した頭脳はただ、『終わり』を求めてもがくだけであった。

「だから死ぬなと言うに。」

その時突然、途中の階の窓から伸びた太く強靱な腕が落下途中の亮介の襟首をつかみ引き寄せ屋内へと引き摺り込んでしまった。

台場 和馬・1

「……ふむ。女子に振られて自殺をな。」

「うわああああああん!？」

バイト先であるこの工事現場の夜間の当直にあたっていた和馬は、たまたまその屋上から投身自殺を図ろうとした顔見知りの少年の凶行を阻み、話を聞いていた。

地上の建材置き場に腰掛けさせた少年に缶コーヒーを勧める。

「しかし詰め甘いことよな。人里で自殺をしようなど、誰かの助けを期待する心の顯れであろう。わたしの手の届くところにいるうちは、何度自殺を試みようとして助けてしまっぞ？」

「だああ鬼ですかあんたはッ!？　なんか慰めるとかなにかないんですかッッ!？」

真ッ赤に泣き腫した目を振り仰いで怒鳴りだす亮介。

だがそんなことは正直和馬の知ったことではなかった。

だから本題の話をする。

「ふむ。亮介はよほどその女子のことが好きだと見えるな。」

「うツク!？」

息を詰まらせる亮介。凶星を突かれた人間の一般的な反応のひとつである。

「ならばなおさら死ぬなどもつたいたいことだろう?」

「……どうしろって言うんですか!？」

八つ当たりぎみな少年の癪癪に、和馬はひと呼吸の間を置いて、ゆっくりと人さし指を立て天に向けてかざした。

「……わたしが言っていた」

「自称ですか!？」

亮介のツッ込みは聞き流して続ける。

「『好き』だということは、『その人がいるだけで幸せ』だという

ことだ。その幸せを噛みしめるがよい。」
「……………それで？」

数寄屋 亮介・2

「……………それで？」

偶然にも二度も生命を救われた大男の、いちいちもつともな話に、つい聞き入って訊ね返す亮介。

「それだけだ。幸せだろう？　そして亮介よ。己の目的を履き違えてないか？　それでは余計な迷惑を振り撒くことになる。」

「……………どういことですか？」

するとなにやら大男は居住まいを正してこちらを見直した。

「……………その女子を随伴したいと思うのは、また別のハナシだぞ？」

『女子を随伴』という聞きなれないフレーズが、脳内で翻訳しその意味を把握するのに時間をかけさせた。

「！？！？！？！？！？！？」

泣き腫した目の回りだけでなく、顔全体が突然熱くなった。

「な、なななななななな！？」

「今さら秘匿することではあるまい。だいたい、その女子を困らせることは、亮介の本意ではなかるう？」

「……………！！？（なんだこの人！？　まさかこの面相で女性経験豊富なのか！？）」

あまりの的確な指摘についつい失礼な想像をする亮介に構わず、大男は言葉を続ける。

「熱くなつて、先刻のように我を失うのなら、まずは冷静になることだな。亮介には亮介の考え方がある。……………他に歳の近い友はおらんのか？　身近に相談相手は？」

「いやあ……………」

自分の服の選定にも困る亮介に、そんな友人などいない。

「コラア！テメエ！」

その時、突然横からまた聞き覚えのある怒鳴り声が響いてきた。

伊達 新星・1

伊達 新星は、その日も少年・数寄屋 亮介を尾行調査していた。いつぞや『アミューズアカシックフィールド』へ女連れで遊びに行つてからなぜか元気を無くしていた少年は、数日経った今夜、新星の見上げる建築途中のビルの屋上からとうとう投身自殺を試みてしまったのだ。

「あああああああ！？」

隠れていた物陰から走り出す新星。

目算では滑り込みで少年の身体を受け止めることができると踏んでいた。

だがその少年の身体は突然、途中の階にいたらしい人間によって引っ張り込まれるように救われたのだった。

「はーっ。」

そんな冗談のような奇跡に息をついた新星だったが、落下途中の重量ある人体を片腕で捕まえられることの異常さに気付き、改めてそのビル建築現場を見張っていた。

果たして、あの少年を伴つて地階に降りてきたのは、あの時『アミューズアカシックフィールド』で新星を座っていた鉄骨ごと持ち上げて見せたあの太男であった。

「あああああやろ！？」

あの只者ではない腕力を見せつけた人間が、ネオゼクトの監視する少年に接触しているなど『ただの偶然』というには憚られる。というか昆虫の思考よりも単純に『怪しい』と思つた新星は、その場から二人目掛けて駆け出していった。

「コラア！テメエ！」

「ヒイイツ！？」

凶暴な怒声に反射的にすくみあがる亮介。

そこへ駆け込んできたのは、最近よく会うあの暴力男であった。

「知り合いか？亮介」

「いやあのえとその」

大男に問われるが、そう言えばどうにも返答に困る間柄である。

「てめえだデッカイの！てめえ、そいつから離れる！」

「……む？どこかで見たような……」

今度は呼びかけられた大男が怪訝顔をする。

「知り合いですか？」

「こないだ鉄骨ごと持ち上げられた俺だよ！」

「おお。」

なにやら、このふたりの間でも何か繋がりがあつたらしい。

「おい亮介！こいつになんかされなかったかよ！？」

「え！？いや、そんな」

「人聞きの悪いことを言うな。貴様こそ通りすがりの分際でとんだ言いがかりをつけおつて。」

まるで嵐のような暴力男の啖呵のせいでなにやら空気が険悪になつてゆく。……いや、険悪なのは最初から暴力男だけだが。

「だいたいてめえナニモンだコラ！？」

「わたしか？わたしは……」

ふと気付く。これだけ話をしていたにも関わらず、亮介は彼らの名を知らなかった。

見つめる前で、大男は立てた人さし指を天へかざし。

「我が名は、ちやぶ台のある場で和むう」

「デメエかツツ!？」

言葉の途中でいきなり暴力男が大男を殴り倒した。

「……なにをするか。」

まるでたいしたダメージもないようにむっくりと起き上がってくる大男。

「そのパワーと言いガタイと言い!そんで今のでようやく思い出した!てめえ、『クライプ』のだな!？」

何事か分らないことを怒鳴りだす暴力男。

振りかざした左手に、どこから飛来した巨大な虹色の甲虫が飛び込んだ。

「え!？」

「変身!」

《ヘンシン!》

叫び甲虫を右手グローブに取り付けた暴力男の身体が光に包まれ、なんとアイスグリーンの甲冑姿へと転身してしまった。

「えええ!？」

「ふむ。それは見覚えがあるぞ。変身」

《ヘンシン!》

「えええええ!？」

振り向けば、大男までも機械仕掛けのセミのようなものをベルトに設置してシルバー地に紅茶色のラインのある全身甲冑へと転身してしまった。

『オラアアアアア!？』

乱暴に組み合った二体の甲冑は、そのまま亮介から離れ建築途中のビルの中へ転がり込んでゆく。

明智 智晴・1

「……………!？」

智晴は、巨大な専用高級車の後部座席で必死に怒りとそのせいで脈打つ頭痛を堪えていた。

明智グループ情報部の者から、監視している人間に尾行者がいる旨を伝えられたのだが、どうもその尾行者の特徴が『仮面ライダージェイル』の資格者のものであり、接触した場所が明智グループ関連会社の新ビルの工事現場だと言う。

かつて自分の建築中のビルを根こそぎ潰されたのはついこの間のことである。

そこへ向かう自分も含め、まるで酷似した符合に智晴はどうにも嫌な予感を拭えない。

やがてゆるやかな逆重圧が身体をわずかに前傾させて車が停止した。『……到着致しました。』

「ああ、自分で開けます。君はそこで待機。それから……」

降りようとした運転手をインターフォンで差し止め、2、3の指示を残して智晴は、自らの手でドアを開けその現場の地に降り立った。

数寄屋 亮介・4

キュイツ！ガチャ、ボタン。

遠くの闇で展開されている男ふたりの喧嘩の音よりは生活感に溢れたそんな音に振り向けば、この工事現場の入り口に巨大な高級車が停車しており、そこから白い背広に身を包んだ男性が流麗な歩調でこちらへと歩いてきた。

「……ここは関係者以外は立ち入り禁止ですよ！？ なにをしているんですか！？」

「うわ、すみません！？」

高圧的な呼びかけに、つい萎縮してしまう亮介。

「（うわっちゃ。ここの持ち主のひとだあ）」

無条件に信じた亮介は、ただひたすら気まづくなってしまった。

そして白スーツの男は、今だ喧騒の響く工事現場の暗闇の奥を注視する。

あのふたりの喧嘩は自分のせいではないはずなのだが、亮介はますますいたたまれなくなった。

「あ、あの」

「……学生が、ウチの関連施設の近くでケガでもしたらつまらないのでね。」

白スーツは、かざした人さし指を入り口の巨大な高級車へと向けて告げてきた。

「あれに乗りなさい。適当な所まで送らせます。早いとこ自分の生活に戻ることです。」

「は、はあ。」

関係者の注意勧告にしては奇妙な言い回しに、だがその違和感の元が判然としないまま、亮介は言葉に従い車へと歩き出す。

ふと、頭のすぐ横を、なにかがかかすめて後方へ飛んでいった。

振り向けばそれは、工事現場の闇の中へ歩いてゆく白スーツを追い抜いてその奥へと消えていった。

明智 智晴・2

高級車が走り去った後。

報告を受けていて予想内だった『仮面ライダー ジェイル』の存在のほか、そこにいた『もうひとりのライダー』の姿を見た智晴の絶叫が工事現場の闇の奥から木霊し。

続いて聞こえるライダーシステム起動の音声と滅茶苦茶な打突音。しばしの間を置いて、無数の弦楽器を一齐に引っ掻いたような騒音が轟いたその時。

鉄骨の建築物が、それに勝る轟音をあげて瓦解していった。

『お話は承っております。お送りしますので、どうかごゆっくり、おくつろぎになってください。わたくしめにご用があらの際は壁のインターフォンにてお申し付け下さいますよう。』

そうスピーカーで告げられて、亮介が乗り込んだ高級車は流れるように発進した。

そのあまりにもゆるやかな発進時の、まるで羽毛布団のような重圧。初めて新幹線に乗った時よりも心地よい加速感に、亮介は心底驚愕・感動していた。

「うわあゝ!? やっぱ高級車は違うなあゝ!?」

広い車内。さながら超小型シャンドリアのような室内灯をはさんで向かい合わせに配置されたシートと、その先の壁で仕切られた運転席という見慣れない仕様に、気後れしつつも貸し切り状態であることをいいことに亮介は周りを眺め回してはしゃいでいた。

こうなると、普段は味気ない夜の街の風景までも豪華に見えてくる。「うわゝ。貴重な体験だよなゝ。……これって死なないで良かったんだかなんなんだか。」

ぼやいたその時。風景が高速で流れる車窓に突然少女の顔が現れた。「いい!?」

時速何キロだか知らないが巡航速度で走る車の窓を少女が涼しげに覗き込める道理を知らず、亮介はその異常に混乱した。

そして次の瞬間、シート右側に座る自分の位置がいつの間にか左側へずれ、目の前すなわち今まで亮介が腰掛けていた場所にその顔の少女が腰掛けた姿勢で出現したことで亮介の混乱は極大に達する。

目標の少年がライダーどもから離れ、生身の運転手による車に乗り込み実質単独になったところで少女の姿に擬態したワーム『灯』^{あかり}は行動を開始した。

『ウフフ……』

走り去った高級車を見送ってから、リボンの端をいじくっていた指を止め、加速空間に突入する。

クロックアップ状態のまま、まるでスキップのような足取りで夜間のビルとビルを越え、道路の途中にあるその『走行中の』高級車の真横に降り立った。

『フフ……』

時計の長針のようなじれったい動きで『走行』している車の窓を覗き込むと、そこには外の景色を眺めて楽しむ目標の少年の姿。

『フフフ……』

当然、こうして真正面から覗き込んでいても、加速中の自分の顔を少年は認識できない。

『灯』はちよっとしたイタズラ心を閃いて、そのまま覗き込む姿勢を維持したまま車の動きに合わせて移動してみる。

相対的に同じ速度になったことでようやく少年が『灯』の顔を認識したようだ。

みるみる表情が驚愕の形状に変形してゆく様は滑稽以外の何物でもない。

擬態元の少女の記憶にある『明るい性格になりたい』という望みに従い、『灯』は命令遂行の「ついで遊び」を思い付き実行に移した。

その車の後部ドアをこじ開け、そこにいる少年の身体をシートの奥側へ押し込み、そして自らはそのシートに乗り込みドアを閉じた。クロックアップ解除。

「ヒイイイ!？」

『ウフフフフフ……』

これは楽しい。楽しくて仕方ないと『灯』は思った。

ワーム・2

『あハはハハハはあアハはハははは！』

歯をむき出しにして横隔膜を活発に動かし声帯をデタラメに振動させるワーム『笑^{えみ}』。

加速空間の中、ビルの屋上から目標の少年が乗った高級車の手前に降り立ち、なおデタラメな声をあげ続ける。

『アハハはハハはあハハはハハはハ！』

少女にあるまじき形相で擬態元の少女の記憶「楽しく笑いたい」に従い、自分なりに欲求を追及し続ける『笑』。

なにしろその少女の記憶には自ら笑ったことがないため、『笑』は手持ちの情報からその行為を類推するしかなかったのだ。

『アハはハハハハ……？』

加速中のため、まるで停止しているように見える、正面からこちらに迫る車に『笑』は、ふと奇妙な感覚に陥った。

『このままクロックアップを解除してあの車に轢かれてしまいたい！』

『あハ！？』

自らの内にある、単純な「生きる衝動」の中に発生した矛盾した欲求に『笑』は混乱した。

だがその「破滅願望」がもたらす感覚のなんと甘美なことが。

『……』

擬態衝動にも次ぐ誘惑に、『笑』は声をあげるのも忘れ、ヘッドライトに霞む車体を前に棒立ちになる。

その時。

キュボウツ！

『あガは！？』

突然背後から熱い塊が『笑』の腹部を貫いた。

『ガ……』

後方を見やる。

だが、『笑』を攻撃した者の姿は見えない。

『ガ！？』

混乱に次ぐ混乱。

再び突然彼方から出現した光弾が、今度は背中から胸を貫いた。

一撃目で既に致命傷だ。『笑』の命はもはや風前のともしび。

だが正気に戻ったワームの意識が、命令だけは遂行せんと、振り上げた右腕にエネルギーを集中、陽炎のように立ち昇る青白いゆらめきをまとったその腕を、目の前的高级車のボンネットに叩き込み。

通常空間。破壊されたエンジンとワームの死体が、同時に爆発した。赤と緑の爆炎を裂いてよたよたと現れた高級車の残骸の中には、運転手の死体のほかには何者の姿もなかった。

ライダー・1

夜闇の静寂の中、破壊音波によつて崩壊し塵化した物質と建材・鉄骨でできた瓦礫の山。

その一角が、突然かたりと音を立て。

「だああなんなんですかあなたたちはッ！？ ウチ（明智グループ）に用があるならまず私を狙えばいいでしょう！？ なんなんですかこの小学生のイタズラじみたゲリラ的報復攻撃は！？」

「うるせえッ！？ ここがダレンチかなんてイチイチ気にするかッッ！？ 脈絡なく出てくるなりハエ（マイザー）バラ撒きやがつて！」

「ぼこっ！ぼこっ！と押しのけられた瓦礫の下からそれぞれ二人の頭が生えてきた。

「そらびつくりするでしょう！？ クライプはもう私にとってトラ

ウマなんですからね!？」

「知るかッ!?　ンなガキみてえな言い草で俺らのケンカの邪魔しやがって!」

「どっちがガキですかッッ!？」

「!　そうだ、あのクライプの野郎……」

ふと気付いて辺りを見回す新星。

そこへ、どこからともなくSF映画のオープニングじみた行進曲のような鼻歌の旋律が聞こえてきた。

「たーたーたたーたー」

二人が見上げたそこ、瓦礫の山の頂上から、腕組みをして立つ大男の姿がゆっくりとせり上がってきた。

「ひとりひとりは小さな火でも、ふたり合わせれば炎となると言うが、さしずめわたしは一人で既に炎であるな!」

「ヒトンチふたつも潰しておいて、言うことはそれだけですかッッ!？」

「フザケンなこの野郎!」

直後、二人がかりで雨あられと投げつけられた瓦礫を喰らって山の向こうへ落下してゆく和馬の巨体。

「あークソ、ヒデエ目に遭った」

「キツチリ責任は追及しますからね。」

ようやく瓦礫の中から這い出て山の上に立つ二人。

「ほう?　つまり続きと洒落込もうってか?」

「……確かに、精神衛生上、多少は八つ当たりしておいたほうが良さそうですね。」

再び出現したジェイルゼクターとマホークゼクターが辺りを飛び回る。

「やめたまえキミたち!　喧嘩は良くないぞう!？」

「言えた義理かッッ!？」

「死になさいッッ!」

突如横から出現した和馬の顔面に、それぞれ飛び回るゼクターをひたたくように掴み取って投げつける。

ヒビイロノカネのカタマリの直撃を喰らって再び沈没する和馬。

『……遊んでいる場合か？おまえたち……』

そこへ突然、新たな声が聞こえてきた。

三人のもとへ飛来した小さな影。それは赤いトンボの形をしたマイザーボマーであった。

「なんだ？コイツ？」

『そうだ。そのマイザーを介して話している。俺はゼクトのライダー『レディック』。』

「ゼクトの！？ これだけのことをして、まだなにか用があるんですか？」

『ゼクトはお前の物件になど用はない。……それよりお前たち、なにか忘れていないか？』

「あん？ナンのことだコラ！？」

『お前たちが御執心のあの少年。お前たちが遊んでいる間にワームにさらわれたぞ。』

「なんだと！？」

「まさか！？」

慌てて展開した携帯電話を操作し、耳に当てる智晴。

だが、聞こえてきたのは、相手の端末の不在を示唆する無情なアナウンスであった。

「バカな……！？」

「テメエコラ！じゃあナニか！？ 黙って見送ったってのか！？」

『俺も用事があったのだな。二体コンビのワームのうち一体は撃破した。』

「ゼクトが、なぜ私たちにそんな話を？」

『別に。これから、今回の奴らのアジトと思しき場所の情報をお前たちに教える。だが、それでどうするのかはお前たちの自由だ。行

かなければ、あの少年が死ぬだけ。そして俺にとってはあの少年の生死はどうでもいいことだ。」

「へっ。てめえらゼクトの口車に乗れ、ってか!？」

『どうでもいいと言った。』

「ならば、行くしかあるまいな。」

「てめえ!？」

これまた突然復活した和馬が、二人の肩を押しつけて進み出た。

「人は己の思惑によつてのみ動くもの。その先に他者の悪意があったとして、進退を考慮する理由にはならん。なぜなら、罠はハマつて踏み潰すもの!」

握り締めた岩塊のような拳をかざして力説する和馬。

「ちっ。テメエと同意見てのが気に食わねえがその通りだ。おいレディック。せいぜい俺の目の前に出てくんじゃねえぞ」

「やれやれ。最近不運続きでフラストレーション溜まつてるんですよ。ヘタな罠を用意していると、伏兵ごとまとめて爆砕するかもしれませんよ?」

『あいにくと、互いに顔を合わせることはあるまいよ。……なら、良く聞け。』

ワーム・3

いずことも知らないコンクリートで囲まれた場所で。『灯』は拉致してきた未だ目覚めない少年・数寄屋 亮介の頭をソファに腰掛けた自分の腿に乗せ、面白がるような笑顔でその頭を撫で続けた。た。

時折り、手下のワーム・サナギ体の群れが擬態元を求めて『灯』の近くまでやってくるが、彼らより格上である『灯』はそれをひと睨みで退散させてしまう。

その様子を部屋の反対端で眺める三体のワーム・成体の影があつた。舐めるように『灯』と少年を凝視している、全身に葉脈のような複雑な文様を描いたワームと。

いま、面白くもなさそうにそっぽを向いた、ジガバチの生体相を持つワームと。

そして暗闇の亀裂から覗く無数の赤い瞳。いや、まるで包帯のようにムカデのような多節帯をヒト型にぐるぐる巻きに編み上げた異形。その多節帯の隙間という隙間から無数の赤い目を覗かせた異様のワームと。

t o b e c o n t i n u e d .

第7話（前書き）

こちらは、基本的に鉄槻オリジナル&借用オリジナルキャラクターでのみ構成される『仮面ライダー カブト』の外伝的ストーリーです。世界観に若干のズレがあるほか、原作のキャラクターはほとんど出てきませんので御注意下さい。

第7話

「いいですか？もうじきライダーどもがここへやって来ます。対処はあれらがしますが、おまえたちは予定通りのことを。」

『わかあつてるよお……』

『気に食わん。実に気に食わんな。』

『……俺が出れば、有象無象の区別なく全てが塵芥に帰る。意味があるとは思えん。』

漆黒のカントリードレスを纏った女・藍川あいかわ・まいな舞菜の指図に、向かい合って立つ三体のワーム・成体が、めいめい気乗りしない返答をばやく。

「この件に関してはわたくしが命令するもの。従ってもらいます。」

『クツクツクツクツ……』

『勘違いしないでください。こうアイカワマイナ。我が仕えるはマミヤレイナ。』

『あくまでもこの件はマミヤレイナからの計画。俺たちはマミヤレイナからの命令でアイカワマイナに協力しに来ているに過ぎん。』

ワームには『個』という概念がなく、従って個体と呼び分ける固有名詞も存在しない。だが、擬態し人間の記憶を取り込んだ個体はしばしば人間の概念を適用する。

しかしそれは、ワームとしての自我が強い傾向の彼らにとっては例えば『間宮 麗奈という女性』ではなく『マミヤレイナと呼び分ける、自分より強い格上の個体』という認識に過ぎないが。

そしてその部屋から立ち去ってゆく三体の異形。

亮介は、謎の少女のひざまくらの上で、薄目を開けて事態の異常さに凍りついていた。

「（怖い……！？ 怖い……！？ 死にたくない……！）」

ライダー・1

深夜の『クリサリス』内の道路を二台のまったく同形状のバイクが走り抜ける。

マシンゼクトロン・アンプリファイ。違いといえばカウルのマークのみ。

乗っている者が同一でないことは言わずもがなであるが、その体格差はあまりにも大きく、巨漢の跨がるマシンゼクトロン・アンプリファイが、一方に比べると小さく錯覚してしまうほど。

『テメエはすつこんでろ！ワームは俺が潰すし亮介は俺が助ける！』

『ならばせいぜいわたしより速くゆくことだ！わたしの後では、ワームも亮介も残りはしないぞ！』

走行中のバイクの轟音の中、フルフェイスのヘルメットにも関わらずその常人離れた声量で大人げない会話を通じさせてしまうふたり。

すなわち、伊達 新星と台場 和馬である。

『テメエコラ！？ 亮介ごとヤツラを消す気か！？』

『貴様ではあるまいし！だいたい貴様ではヒトとワームの区別すら付くまい！？』

『付くわいッッ！？』

怒鳴り合いながら、稚拙かつ力ずくなドライビングテクニックで夜の街を駆け抜けてゆく。

東京湾上に浮かぶメガフロート『クリサリス』も、都市としての管理がなされ、その広大な土地もいくつかに区分けされそれぞれ自治体が設立されている。

その『クリサリス』南区のとある灯の落ちた大規模な施設に、明智智晴はバイクにまたがってやってきていた。

「……ここですね……」

ゼクトのライダー『レディック』からもたらされた情報に従いここまで辿り着いたが、『あのバカ二人』はまだ到着していない。部下に自分のバイクを届けてもらうのを待ったため大きく出遅れたはずなのに。

「それでは改めて。」

再びジョウントを抜けて飛来したマホークゼクターに左腕を向けてかざし、『マホークガントレット』にゼクターを装着させる。

挙げたままの前腕を後方へさげ。

「変身。」

《ヘンシン。》

ハニカム構造状に展開形成されるブルーグリーンの奇形の鎧。『仮面ライダー マホーク・マスクドフォーム』がバイクの上に現れる。

『キャスト・オフ。』

《キャスト・オフ!》

続いてゼクターの翅を扇子のように広げ、その装甲を吹き飛ばし現れる『仮面ライダー マホーク・ライダーフォーム』。

《チェンジ!ホーク・モス!》

だが、変化はそれだけでは終わらなかった。

《キャスト・オフ!》

またがっていたバイク・明智グループの科学力の粋を結集して生まれたスーパーバイク『マホークエクステンダー』までもがその巨大なカウルを吹き飛ばしたのだ。
そして現れる内部機構。

連動して車体全体がまるでパンタグラフのようにぺしやりと潰れるように変形し、前後の車輪がそれに伴い向きを水平にと変え、伸びてきたアームの先端からプラチナめいた輝きが翅のごとくほとばしる。

そこに出現したのは、水平の前後輪をフローターとして飛行する巨大なオオスカシバ型メカ『マホークエクステンダー・エクスマード』の姿であった。

まるでサーフボードのようにその上に立つ智晴は、アームの基部から放射される翅に隠れるように身をかがめしやがみ込んだ。

『……さて。まずは偵察といきますか。』

浮かび上がったその姿が、完全に消え去った。

透明化し、じれったい速度で浮遊するバイクのエクスマード。

ここまで迅速に辿り着けたのは、道路事情を一切無視できる飛行機能によって空を飛んできたからだ。

だが今はエクスマードの完全迷彩機能を発揮させているため、そちらにエネルギーをまわしているために速度が犠牲になっているのだった。

ここへ来る途中のこと。

『……。』

街の上空を移動中に、智晴はそれを見つけた。

すなわち、爆炎を吹き上げる自分の高級車。

それを高所から見下ろし、智晴は仕えてくれた運転手の死を悼んだ。だがそれでもそこに留まることなく、いま成すことのため智晴は飛行速度をゆるめずここまでやって来た。

関わってしまったあの少年に対し責任を果たすため。

整った白亜の巨大施設。

その上階の吹き抜けから透明化したまま内部へゆっくりと進入して

ゆくマホークエクステンダー。

『！？　これは！？』

そこは、港湾区にある有名な多目的巨大ホールを彷彿とさせる広大な空間。

高所から見下ろせば、そこに緑色の異形・ワーム・サナギ体が大量にぎっしりと蠢いていたのだ。

中に何体か色とりどりの成体が混じっているのも見えた。

『……これでは……マイザーで一掃しようとしても、成虫が邪魔です。……。どうしたものか。』

うめきつつも、答えは既に出ているのだが。

『あの「バカーズ」を待ちますか。どうせ正面突破してくるでしょうから。マイザーに巻き込んだら、それはそれで。その間にあの少年を搜索できる。』

ワーム・1

『クッククック……』

小早川 響音こばやかわ びゅうなという人間の記憶を擬態しているホメロジエクスワームは、格下のワームどもの巢代わりになっているこの人間の施設の中階吹き抜けの手摺りから、『その様子』を『眺めていた』。

『図に乗っているヤツはさあ、転げ落ちるんだよお。』

クックツと引き攣った笑い声をもらす響音。

響音が顔を向けている方向にはなにもない。だが、そのスズムシの生態相を持つワームには、その空間に在るものが視えていた。

『視えてるんだよお。光も、音も反射しなくてもお。』

警戒体制から、響音はずっと超音波を気が向いた方向へ放っていた。

『超音波がさあ。帰ってこないんだよお。壁に空いた穴だとしてもさあ。穴は、動かないよねえ』

ホメロジエクスワームの妙技。イルカやコウモリと同じ、超音波を

放ち、帰ってくる音波の強弱を観測して周囲を識別する『音の視覚化』。

それによると、『屋内の空中に、音波が帰ってこない箇所がある』。『その「帰ってこない箇所」が移動している』。そして『その「音波の穴」の大きさは、ちょうど大型バイクくらい』であった。

『優れている俺に。図に乗ってるおまえのブザマな悲鳴を聴かせてくれよ。』

全身を葉脈のような複雑な文様で覆われたワームは、その姿を擬態元である人間『小早川 響音』のものへと変えた。

そこへ、コミカルなバネの音を蹴立てて現れる、直方体にバツタ脚と丸い翅を取り付けたような機械仕掛けの紫色のスズムシ、ベルクゼクターがやって来た。

前にかかったウェーブの前髪を優雅に除けながら、手元まで跳ね上がってきたそれを右手でキャッチして、ゼクトベルトバツクルの蓋を開き、その蓋の裏へと横向きに載せた。

『へんしいん。』

《ヘンシン！》

その瞬間、ベルトから全身へ、順次ハニカム構造状に展開形成されてゆく軽装甲。

《チェンジ！ベルクリケット！》

プラチナ色の各部軽装甲。

顔面には目を示すパーツはなく、白金の無貌には、中心から全方位へと伸びる数本の紫色のチューブが這い回り、その紫のラインは全身の装甲板にも伸びている。

左右側頭部に取り付けた短い棒状から背後足首まで伸びる長大な触覚をゆらゆらさせた、それが『仮面ライダー ベルク・ライダーフォーム』の姿であった。

マスクドフォームではなく、いきなりライダーフォームの姿で顕現したベルクは、両側頭部に張り付いた触覚の基部を掴み、取り外し

た。

だらりと垂れ下がったそれは、一見ただの新体操のリボンのようにも見えるが、それとは比較にならない強靱なコシを持ったそれはただのリボンでもヒモでもない。

『キイイイイ！』

無造作に下げている両腕はそのまま上げもしないのに、手首をくりと返しただけでその触覚は、獰猛な毒蛇のごとく跳ね上がり、空中の『移動する音波の穴』目掛けて殺到していった。

ライダー・2

『うおおおおお！？』

クリサリス南区へ到達した二台のバイク、マシンゼクトロン・アンプリファイの姿があった。

『アレか！？ あの施設か！』

『ふむ……。』

バイクにまたがる伊達・台場両者とも、現在は『仮面ライダー・マスコドフォーム』の姿に転身している。

ゼクトのライダー『レディック』によりもたらされた情報にあった施設の所在を確認したふたり。

現在、二台のバイクは完全に横一線まったくの同速を保って並走していたが。

『つけえええええ！？』

そこで伊達のバイクのみがさらに加速を加え、台場のバイクを置き去りに飛び出してゆく。

その施設の敷地外縁を囲う高い塀を真正面にそれは、普通なら自殺行為となる加速である。

『悪いなクライブの！一番乗りは俺だああああ！』

叫んだ伊達はハンドルから一瞬離れた両手を組み合わせ、右手の甲

のジェイルゼクターを半回転させた。

《キャスト・オフ!》

吹き飛ばされたマスキドアーマーのあとに現れるアイスグリーンの軽装甲『仮面ライダー ジェイル・ライダーフォーム』。

《チェンジ! ジュエル・ビートル!》

『うおおおライダーチャージ!』

そしてジェイルゼクターを拳の前までスライドさせる。

《ライダーチャージ!》

チャージアップされたエネルギーが全身を駆け巡り。それと連動して現れたバイクのコントロールパネルのスイッチを叩き付ける。

どん!

ジェイルの展開された背面装甲の下から吹き出した虹色の光芒がさらなる加速をかけ。

そしてその輝きに包まれたジェイルと、同質の光を放射し出したバイクはひとつの巨大な流星と化して施設の塀を粉碎し敷地の中に飛び込んでいった。

『アンプリファイ』とは『増幅する』の意。

ネオゼクトが開発したこのマシンゼクトロン・アンプリファイに搭載された新機構は、ライダーシステムのチャージアップアタックのエネルギーを受け、ボディ表面より同調し、増幅し、それを放射する。

元々はゼクトから離反したネオゼクトの人間が持ち出した鹵獲装備の改造ではあるが、特に突撃に特化したチャージアップアタックを持つジェイルとの相性が非常に良く、この組み合わせを阻めるものは存在しない。

その様子を、施設の手前で冷静に停車した和馬は両腕を組んで眺めていた。

『……せめて壁と相打ちになって穴のひとつも空けてくれればと思

つていたが。存外、使いでのある「ハサミとなんとか」よの。」
呟いた和馬は、ハンドルを握り直すとジェイルがブチ抜いていった壁の穴を通り敷地内に侵入、虹色の砲弾が向かっていった施設へと疾走していった。

明智 智晴・2

そこへ、二筋の鋭い刺突が殺到してきた。
『！？』

ガギギン！

かろうじて一撃は左腕のマホークゼクターの翅による透明のラウンドシールドで受け止めたが、二発目がマホークエクステンダーを直撃した。

『なんですって！？ 発見された！？』

大きくバランスを崩すマホークエクステンダー。

だが、当たり所が良かったのか、機能に障害は出ていない。

『あらゆる探知波を吸収・隠蔽する完全迷彩ですよ！？ いったいなぜ！？』

必死にマホークエクステンダーのバランスを制御しながら、その攻撃の方向を見定める。

いた。この広大な施設の内壁の途中、テラスのように張り出した場所に立つ一風変わった面相のプラチナ色の仮面ライダーが、長大なムチを二本、奇怪にくねらせてこちらを見上げていた。

腕は動かさないとこのに再びそのムチが蠢き、その先端が意志あるもののごとくこちらへ飛来してくる。

『くッ！？』

完全迷彩機能を解除。

とつさに機体の向きを変え、動力が機体の機動に切り替わったところでようやくそのムチを躲す。

だが完全には避けきれず、一撃をゼクターのシールドで受け流さねばならなかった。

おかげでバランスを完全に失ったマホークエクステンダーは、謎の白金のライダーがいる所とは反対側のテラスのようなところへ飛び込み不時着するハメになった。

廊下に投げ出されるマホーク。

階下から聞こえてくるワームの群れの声。どうやら、連中に気付かれたらしい。

『くつ、まずいですね。サナギ体はともかく、他の成虫が襲ってくる……！？』

その瞬間。

巨大な轟音がこの施設の壁を大きく砕き、飛び込んできた虹色の流星が、そこにいたワームのほとんどを巻き込んで反対側の壁を貫いてゆく。

同時に空中で起こるいくつもの緑色の爆発。

見下ろせば、それで階下のほとんどのワームが消滅させられていた。『……あいつら……！？』

結果的に、自分が「あのバカーズ」の突入の隙を作ってしまったことを知った智晴は、意図を外れた状況の理不尽に怒り震えた。

伊達 新星・1

『うおおおおお！？』

地上を迸る虹色の怒濤と化した新星は、情報にあった『いちばん大きな施設』目掛けて『一直線に』向かっていた。

当然、途中の進路上にあった低い建物には壁から突入、次々と壁を貫いて突き進むジェイルとマシンゼクトロン・アンプリファイ。

膨大なエネルギーの余波が残りの壁や天井までもを吹き飛ばし、それらの跡形を無くしてしまう。

それなのに勢いの緩まる様子を一切見せずにそのまま、それまでしてきたのと同じように目標の施設の壁を粉碎した。

その中の『ぎつしり詰まっていた無数のワームの群れ』に新星が驚いたのは、その全てを薙ぎ払って反対側の壁をブチやぶった時のことである。

台場 和馬・1

《キャスト・オフ！ チェンジ・シケイダ！》

パージされたマスクドアーマーが進路上に散乱する瓦礫を吹き飛ばし、その間を走り抜けるクライプ・ライダーフォームの駆るマシンゼクトロン・アンプリファイ。

『ふむ。まるで渋谷隕石の再来のようだな。』

その『虹色の流星』の引き起こした惨劇の一部始終を後方から眺めて冷静に呟く和馬。

便利なのでジェイルが通過した破壊跡を辿ってきた和馬は、そのまま目標の施設にジェイルの空けた穴から侵入した。

屋内に走り込むと同時に。

『クロックアップ！』

《クロックアップ！》

ベルトのスラップスイッチを操作して加速空間に突入する。

途端に無音となる世界。

この施設内に無数に蠢いていたワームは、先のジェイルの突撃でそのほとんどが消滅させられていたが、それでもあの攻撃力の範囲外にいたワーム・サナギ体が数体残っていたほか、加速空間中にある通常の動作でこの施設屋内の奥の上方へ跳躍するワーム・成体の姿が何体か現れた。

通過していったジェイルを追うにとしては奇妙な方角へ向かうワーム・成体をいぶかしみつつ、和馬はそんなことは関係なく一切合切を塵芥に帰す殲滅のシーケンスを開始する。

ハンドルから離れた右手でベルトのレバーを引き、ゼクターがくるりと裏返る。

そしてハンドルを握る左右の手を交換し、ゼクターの翅を引いてチャージアップ。

電光が全身を這い回ると同時、バイクのコントロールパネルに出現するスイッチ。

マシンゼクトロン・アンプリファイの特殊機能とその使用方法については、つい先ほどジェイルが目の前で操作したおかげで理解している。

そのスイッチを操作し、宙を跳ぶワーム・成体数体目掛けてバイクで跳躍。

そこで再び左手がゼクターの翅を押し戻した。

『ライダーソニック!』

《ライダー・ソニック!》

電光がゼクターへ殺到し。

そして炸裂する無数の弦楽器を一齐に引っ掻いたような騒音。

それに連動してマシンゼクトロン・アンプリファイのボディ表面が

《ライダー・ソニック》に共鳴し、増幅し、放射する。

そこに無数の管楽器によるような騒音が加わり膨大に増幅された《ライダー・ソニック》が、迅速に効果範囲を蹂躪した。

どこへ向かっていたのか、宙を跳んでいたワーム・成体全てを巻き込み、壁や二十数メートル上の天井を抉ってその破壊は終了。

クライプのマシンゼクトロン・アンプリファイは、難なく着地しその場でターンして停止した。

《クロックオーヴァー。》

ワーム・2

『クククククク……!』

壁を破った虹色の怒濤が一瞬にして階下のワームのほとんどを焼却し、特有の加速空間への干渉感覚を感知した瞬間に加速中のワーム・成体までもが全滅させられた事を知ってもそのホメロジエクスワームは一顧だにしなかった。

なにしろ小早川 響音は、とにかく優れている人間を叩き落として愉悅に浸りたいだけなのだ。

格上のウカワームの指令は理解しているが、衝動に忠実なのもまたワームの習性。

ゆえに、響音はすべてをまったく無視して目前の獲物をなぶることを優先した。

ベルトに横向きに装着されたベルクゼクターには、バツタ脚のレバーと、その外側に重なるように設置された丸い翅によるレバーのふたつの操作基がある。

響音はその内側のバツタ脚によるレバーを引き倒した。

《プット・オン。》

自動で元の位置に戻るバツタ脚レバー。

認証の音声と同時に、どこからともなく引き寄せられた部品が仮面ライダー ベルクの両脚に装着された。

それは脚全体を覆う装甲。

腰の両側面からそれぞれの足首にかけて、後ろに張り出した巨大な『く』の字型の機械が取り付けられていた。

『クロックアップ。』

《クロックアップ。》

トレーススイッチを操作して加速空間に突入。

『ククッ。』

その場に身を屈める動作に伴い、両脚の『く』の字の部品が連動して屈曲し。

その身を一瞬にしてこの施設の反対側の壁面の廊下にいる仮面ライダー マホークのもとまで跳躍させた。

《プット・オン。》

再びバッタ脚レバーを操作したベルクの、今度は両腕に新たなパーツが増設された。

ライダーシステム『ベルク』。

『不完全変態』という特性に着想を得て開発された装備の実験機として作られたライダーシステムで、本来であれば防御力を落としても、加速するワームに対抗するためにライダーフォームに移行するにあたって機構を変換し、排除されてしまうマスキドアーマーを、クロックアップ中にも活用できないかというコンセプトによって生まれたものである。

従来の『キャストオフ クロックアップ』とは逆に、装備を追加してゆくことで機構を変換して強化、『プットオン クロックアップ』というプロセスを経てゆくことでワームに対抗する『プットオン・エクステンション』がその妙味。

だが、未だ研究中のこのシステムは、敏捷性と装甲の両立という究極目標が果たせない今、だからその最終的な装甲の厚さにゆえに他のライダーの側面支援的役割を与えられ、そのための各種装備を付与された。

だが、このライダーシステム『ベルク』は、ウカワーム一味によってゼクトから研究ごと奪われ、ここに至る。

『クロックアップ!』

《クロックアップ!》

トレーススイッチを操作して加速空間に突入するマホーク。

ほぼ同時にクロックアップした遠く反対側の壁面の廊下にいた謎のブラチナ色のライダーは、智晴の目が確かなら、いま脚部のみプットオンしたように見えた。

『……え!?!』

驚愕の隙に、その脚部の威力によってか、この広大な施設の空間を文字通り一足飛びにこちらへ急接近してきた謎のライダー。

《プット・オン。》

智晴の目の前で、再び今度は謎のライダーの両腕を覆うアーマーが出現、装着された。

『なに!?!』

この加速空間中であって、ライダーがマスクドアーマーを再装着するなど通常では考えられないことである。

『キイイイイ!』

両手に握る長大なムチ、いや、間近で見ればわかる、扁平かつ鋭利なその二本の帯は刃。

それが手首の返しのみでフレキシブルに動作するそれは刀身が自在に動く剣であった。

『おおお!?!』

蛇のようにのたうち襲いかかる二筋の刃。

かろつじて右からはマホークトマホーク、左からはゼクターのシールドで受け止めるが、刃の当たった所から刀身が湾曲して先端が迂回し、背後からマホークを直撃した。

数寄屋 亮介・1

謎の少女のひざまぐらの上で、必死に寝たフリを続けていた亮介だ

つたが、その少女に鼻をつままれて『目覚め』ざるを得なくなった。

「ウフフフ……」

「……………！？」

それきり、なにか危害を加えてくる様子もないが、この異常事態にあつて意図の知れない少女の薄い笑みに、亮介は恐怖を感じ、ひざまくらに寝ころんだ姿勢のまま身を硬くし完全にすくんでいた。

その時、あの三体の異形が去っていった扉から、また何者かがこの部屋に入ってきた。

つい反射的にそちらを見た亮介は、自分の行為を後悔した。

そこにいたのは、また新たな化け物だったからだ。

「（死ぬの！？ 殺されるの！？）」

その部屋に現れたのは、ザリガニの生物相を持つ赤銅色の表皮を持つワーム・成体、キャンバロイデスワーム。

その異様に恐怖で脅える亮介を、キャンバロイデスワームはまっすぐに見つめているように見えた。

t o b e c o n t i n u e d .

第8話（前書き）

こちらは、基本的に鉄槻オリジナル&借用オリジナルキャラクターでのみ構成される『仮面ライダー カブト』の外伝的ストーリーです。世界観に若干のズレがあるほか、原作のキャラクターはほとんど出てきませんので御注意下さい。

第8話

『おおお！？』

蛇のようにのたうち襲いかかる、ベルクの操る二筋の刃。

智晴はかるうじて右からはマホークトマホーク、左からはゼクターのシールドで受け止めるが、刃の当たった所から刀身が湾曲して先端が迂回し、背後からマホークを直撃した。

『ぐうつ！？』

『ツクツクツク……』

《プット・オン。》

三度、ベルクはゼクターのレバーを操作し、引き寄せられるように今度は胸部装甲が装着された。

装着されたマスクドアーマーはすべて紫色。プラチナ色の軽装甲がほとんど隠された今、顔面の紫のラインと相まって、全体のカラーの比率が大きく反転している。

背部に、巨大な紡錘形の部品が二基接続されている。形状からして、ただの装甲ではないだろう。なんらかの装置であるはず。

倒れ伏すマホークへ、獲物をなぶる肉食獣のごときゆったりとした歩みで迫るベルク。

「ひイツ！？」

その部屋へやってきた赤銅色の化け物・キャンバロイデスワームの異様に脅える亮介。

次の瞬間。そこにいたキャンバロイデスワームの姿が消滅した。

「え……あだ！？」

同時に自分の頭を支えていたひざまくらも消滅し、頭を落として驚愕する亮介。

「……あれ？」

見上げれば、自分にひざまくらをしていたあの謎の少女の姿もかき消えていた。

「……どうなってんだ？これ……」

木製の長椅子の上で身を起こし、自分だけとなったこの部屋を見回す。

ワーム・1

《プット・オン。》

そして四度引き寄せられた部品が、今度は頭部に装着され。

ベルクはこの加速空間中であって完全なマスクドフォームに変貌した。

『ククククク……』

紫紺の装甲に包まれたベルク・響音は余裕の含み笑いのまま、目前のひざをつくマホークに迫り、ベルトのゼクターに手を添えた。

今度は丸い翅によるレバーを、内側のバッタ脚レバーと一緒に引き倒す。

タキオン粒子変換エネルギーのチャージアップが始まり、電光が全身を這い回る。

もはやマホークは逃げようとしても無駄。この距離にあって、この自分から逃れられる術など何者にもありはしないのだ。

そして翅レバーを引き戻した。

明智 智晴・1

敵のトリッキーな攻撃に翻弄され、ひざをつく智晴。

目前に迫る今は紫紺のライダーに対し、攻め手を考えあぐねていた。
『（どういうわけか、既に完全迷彩は見破られている。マホークのスペックでは、こいつに太刀打ちできないのか……！？）』

だが状況は智晴の思考を待たず、敵はゼクターを操作し、チャージアップを開始した。

『ライダー・ソニック。』

《ライダーソニック！》

『なに！？』

敵のゼクターが発した音声は、謎の巨漢ライダー・クライプの持つチャージアップアタックと同じ名を告げていた。

どうやらスズムシを模したらしいゼクターからして、敵の放つ攻撃が同様の《破壊音波》なら、いかなヒイロノカネの装甲とはいえ目前で喰らってはひとたまりもない。

だが走って逃げようにも、敵の持つフレキシブルレイピアで背後から貫かれよう。

かつて、マホークマイザーの自爆でクライプの破壊音波を一時的に防いだことがあったが、マイザー射出機構はマホークのマスクドフォームの装備。加速中では望むべくもない。

絶体絶命。

紫紺のマスクドライダーの、背部の紡錘形の部品二基がゆっくりと起き上がり、両肩の上に移動したのを見て、智晴は……。

数寄屋 亮介・1

「とりあえず、逃げてみようか……」

自分以外誰もいなくなったこの部屋で、無音のまま、少し待っても何者もやってこないのを見て亮介は、この恐怖の巣窟から脱出すべく、音をたてないようにゆっくりと立ち上がった。

「あいつらって、きつとあの時の公園に来たやつらと同じだよな……」

かつて、大男とともに遭遇したことのある緑色の異形、まるで己が目を覆い嘆き悲しむような面相の異生物の群れを思い出す。とても友好的とはいえない、むしろ害意すら感じる化け物たち。やはり、世界は滅びに向かいつつあるのだろうか。

「いや、きつとあの人は、この化け物に対抗しているんだ。」

公園での遭遇時、亮介をかばって異形の前に立ちはだかった大男は殺されることなく、だから今日ふたたび会うことができたのだ。

この拉致される前、亮介の目の前で装着してみせたあの鎧。きつとあれが大男の戦う力なのだ。

そう言えば、あの暴力男も同様の鎧を所持していた。

「逃げよう。あの人たちの所まで。あの人たちなら、あの化け物をなんとかできるんだ！」

意気込んで、この部屋にふたつある扉のひとつに駆け寄る亮介。がちゃ。

「ひ！？」

その時、何者かが亮介がいるのとは反対側の扉を開いてきた。

「亮介！だいじょうぶ！？」

「うわあわあうああって、あれ！？」

その反対側の扉から飛び込んできたのは、見覚えのある人間。

枕木 春瑠であった。

「わたしだよ！？ わたし！」

「え！？ どうして！？」

どうして、ここまで来れたのか。どうして、ここが分かったのか。浮かぶ疑問は多く、一度に口には出せない。

だが春瑠は一切頓着せず、立ちすくむ亮介の腕を掴んで引っ張りだした。

「いいから早く！ ここから逃げて！」

「う、うん!？」

逡巡する意識ごと亮介はそのまま引き摺られるように春瑠と駆け出した。

明智 智晴・2

『(南無三!)』

敵のチャージアップアタックが炸裂する寸前。

ある考えに至った智晴はその可能性に賭け、左腕マホークゼクターの胸部側面にあるスロットルボタンを押し込んだ。

『ライダーカムシン!』

《ライダー・カムシン。》

チャージアップエネルギーによる偏光フィールドを始めとする、あらゆる強力なジャミング波が展開されると、敵の背部の紡錘形の部位からまるで大小様々な鈴の雪崩のような大音響が放射されるのは同時だった。

ゆらめく智晴の視界。壁を抉り塵化してゆく見えざるその半径が、智晴の立つ地点を迅速に通過した。

《ライダーカムシン》によるジャミングフィールドはその破壊音波を中和・無害化させ続けた。獣毛のようなスーツ表皮『スマートスキン』がフィールドを突破してきた音波を吸収、頭部ボーンシエルメット内の聴覚センサーが聴域を調整し、害音をシャットアウトした。

『うおおお!』

それと同時に、智晴は両手の水晶の戦斧マホークトマホークを束ねて合体させ、目前の紫紺のライダーへ駆け一本の大戦斧となったそれを振りかぶった。

『!?!』

真っ向からの一撃は、だが咄嗟にかざされた紫紺のライダーの左腕

マスクドアーマーを粉碎したに留まる。

互いにとつての意外な交錯。

《クロックオーバー。》

加速状態の解除。同時に足場が瓦解した。

周囲の壁を破壊されたこの吹き抜けの廊下が、自重に堪え兼ね自壊したのだ。

バランスを崩したままなす術なく投げ出されるマホークと紫紺のライダー。

『しまった!?!』

地階まで十数メートル。

ライダーにとつて足からの着地ならなんの問題もない高度だが、今のこの体勢ではダメージは免れない。

ワーム・2

一連の様子を、二体のワーム・成体が施設屋上の床の窓（施設内から見れば天窓）から見下ろしていた。

二体のワーム、すなわちジガバチの生体相を持つアモフィリアワームと、まるで包帯のようにムカデのような多節帯をヒト型にぐるぐる巻きに編み上げたジオフィリドワーム・ベルジアンと。

『あれだけの手勢が一瞬で消滅か。なかなか骨のある敵だな。私の心配は杞憂であつたか。』

『アイカワマイナめ。あれだけデカイクチを叩いておいて、敵の手の内を見るまでもなく全滅したではないか。たいした作戦だ。』

赤黒いアモフィリアワームがアゴをしゃくり嘲笑する仕草を見せた。『ふん。そんな姑息な手段など使わず、正面から堂々と戦えばよいのだ。マミヤレイナへの誓いに賭けて、私は負けはせん。』

『くだらん。そもそもこの計画とやらも理解に苦しむ。』

『貴様、マミヤレイナを愚弄するか!?!』

ジオフィリドワームの台詞に、色めき立つアモフィリアワーム。

『貴殿といえど、マミヤレイナを愚弄することはこの私が許さん!』

『おうおう。すまんな騎士どの。だが、さてどうする?ここで奴らの手の内を明かすことが今回のマミヤレイナからの命令。それはいずれ奴らを簡易に排除するための作戦だとするならばつまり、今この場で奴らを殲滅しても同じことだな?』

『貴殿、なにを考えている?』

『ふ。心配するな。俺のライダーシステムは使わん。それならば問題はなかるう?』

『貴殿、自重せよ。貴殿とそのライダーシステムは、マミヤレイナの目的の要。』

『わかっている。さあ、マミヤレイナの命令を遂行するでしょうか。コバヤカワヒビネだけに遊ばせておくのは』

『む!?!』

『ぬ?』

その時、異なる時間流の干渉を感知した二体。

本能的にクロックアップし加速空間に突入したところで。

立ち上がったジオフィリドワーム・ベルジアンの胸板を、光弾が貫いた。

火場 弘司・1

灯の落ちた巨大なビルの屋上に、吹きつける寒風などないものごとく立つ黒い人影があった。

ハーフマントを風になびかせ、深夜だというのに赤いミラーグラスをかけたまま、その方角を見つめている。

火場 弘司。見た目二十歳ほどの、傭兵に始まる裏稼業を生業とし

て生きてきた人間で、最近ゼクトなる組織にスカウトを受けて雇われた。

その依頼内容とは、ひとつは新兵器の被験体となること。

『その方角』すなわち目標の施設の付近で、その時虹色の光が現れ、施設の塀を貫いて突入していった。

「……隠密という言葉を知らんのか……？ 分かり易くて結構なことだ。」

つまらなそうに呟いて、予定の行動を開始する。

ハーフマントの下で腕が動くと、抜き放たれたその手には、どこにしまっていたのかヒトの腕ほどの長さの湾曲した棒杖が握られていた。

『く』の字に折れ曲がった付近を握り、先端にあるトリガーを引く。響き渡る、なんらかの発信音めいた音。

やがてジョウントを抜け、火場のもとへ飛来してくる巨大な機械仕掛けの赤とんぼ。

長大な腹部にリボルバーをぶら下げたそれは、火場のかざした棒杖に尻から近づくと合体した。

「……変身。」

《ヘンシン！》

その棒杖・・長大な銃と化したグリップを握る右手から順次八二カラム構造状に展開形成される装甲。

そこに、赤いドレイク、『仮面ライダー レディック・マスクドフォーム』が現れた。

そしてすぐにグリップと合体した巨大な赤とんぼ・・レディックゼクターの翅を立ち上げる。

アーマーパージのためのチャージアップが始まり、マスクドアーマー各部がパーツ単位で次々とせり上がってゆく。

『キャストオフ。』

《キャスト・オフ!》

立ち上げた翹レバーを手前に引き倒した瞬間、吹き飛ばされてゆくマスクドアーマー。

そのあとに現れるのは、これまたドレイクのカラーリングを赤系にした姿『レディック・ライダーフォーム』であった。

完成したその奇形のライフル、レディックゼクターを目標の施設へ向け、その超高解像度スコープで観察を開始する。

そしてもうひとつは、契約期間中はゼクトの対ワーム戦力として指揮に従うこと。

今回、ゼクトの戦闘要員として受けた任務は、ワームに注目されている、とある少年の観察であった。

少年に近しいライダーがいたことは好都合だった。

なにしろこのレディック、ライダーシステムは強化服がその出自であるわりに、遠距離狙撃能力に特化され、格闘能力がオミットされているのだ。

だが、さっき飛び込んでいったネオゼクトのライダーのおかげで効率良く事が運べるというもの。

所属不明の二人のライダーも、こちらの思惑に乗る形で動いてくれているようだ。

ゼクト以外のライダーがどうなろうと知ったことではない。

利用できるものはなんであろうと利用するのみ。

自軍の損耗は、ないに越したことはないのだ。

もしも彼らが少年を見殺しにしたなら、その時はその時であったが。

やがて、目標の施設の屋上に現れた二体のワーム・成体の姿を発見

した。

他のワームとは違い、理性的な、妙に人間臭いその挙動。恐らく、既に人間の記憶を取り込んでいる、格上のワーム。

それらがリーダー格であることを見てとった火場は、己の成すべきことに取りかかる。

火場 弘司は超一流の狙撃兵であった。

砲や銃から射出される弾丸の軌跡を完全に把握・イメージできる。

その特性により与えられた新兵器とやらも長距離狙撃兵器。

ならば自分のするべきことは、己の特性に従い、それによって成すべきことを成すのみ。

『クロックアップ。』

《クロックアップ。》

加速空間に突入。

途端に無音となる世界。

この環境は実に集中しやすいと火場は考える。

レディックは、狙撃姿勢を維持したまま、右手でレディックゼクタの翅の基部である胸部パーツを掴むと、ゆっくり手前に引き始めた。

長い腹部をレールのようにしてスライドされる胸部パーツ。

その腹部の節目を通過するたびに、一段階ずつ伸長してゆく銃身。

手前に引ききった時には、その銃身は倍ほどの長さになり、形状をよりライフルたらしめていた。

そして尾部のヒッチスロットルを引く。

『ライダー・スナイプ。』

《ライダー・スナイプ。》

発揮されたチャージアップエネルギーは、だが特に光弾の精製に使

われるではなく、レディックの身体強化にまわされた。

レディックのコンセプトは、あくまでも『精密な狙撃』。

ゆえにその全てはレディックの狙撃能力のために費やされる。

敵を貫くべき弾丸すら、チャージアップアタックに等しい威力を込められたカートリッジを六発、レディックグリップに召喚されるたびにゼクター腹部のリボルバーに装填され用意されるほど。

発揮されたチャージアップエネルギーは、動体視力・思考速度・照準精度・銃を保持し操る腕力・狙撃のための姿勢制御などを大幅に強化した。

火場は、銃のセレクターを通常光弾から専用チャージアップカートリッジへと変更し、強化された狙撃能力で改めて狙いを定めた。そしてトリガーを引き発射された強化光弾は、数キロメートルの距離を一瞬で越え、目標のワーム・成体の胸の真ん中を貫いた。

ワーム・3

『……………』

胸板に大きな穴を空けられたジオフィリドワーム・ベルジアン。

『…………… 何かの干渉を感じたかと思えば、ここに来たのは弾丸のみか。』

だがまるでなんの痛痒もなくつまらなそうに吐き棄てる。

『なるほど、遠方からの長距離狙撃か。小癪なマネを。』

『むう、卑怯な！？』

しゃべる間に、ジオフィリドワーム・ベルジアンはその胸部の穴が、みるみるふさがってゆく。

ジオフィリドワーム・ベルジアンの身体は、無数のムカデのようなものが複雑に編み合わせられることによって構成されている。

それは一個体の生物ではなく、『ひとつの意志を形成する寄り集まった群体』。

ゆえに、四肢五体を備えたヒト型に見えても、仮に頭部を吹き飛ばされたとしても『思考する部位』は全身に行き渡っているため、機能停止はしないのだ。

『……出直すぞ。あんなものが見ている所に長居はできん。』

隣のアモフィリアワーム目掛けて飛来した二発目の光弾に自らの片腕を差し出して防御するジオフィリドワーム・ベルジアン。

光弾は、その腕を四散させて消滅し、アモフィリアワームにまでは至らなかった。

『おのれ……！なんたる屈辱か！？』

『熱くなりなさんな騎士殿。これで、この件に関わるライダーどもの情報は得られた。使命を果たせたと考える。……まあ俺には意味のないことだがな。』

『くっ……！！？』

ヒトの形を欠いたジオフィリドワーム・ベルジアンに続いてアモフィリアワームも逃走を開始した。

明智 智晴・3

『おおお！？』

崩れた体勢のまま落下するマホーク。

そこへ飛来してきたマホークエクステンダー・エクスマードが智晴の下へ滑り込み、かつさらう勢いでマホークの身体をすくいあげた。

『助かった！？ さすがウチの技術力！』

あわてて立ち上がり、マホークエクステンダーの自律行動をマニュアルに切り替えて操作する。

『……！ あのライダーは！？』

見回せば、あの落下からなんと体勢を立て直して脚から着地した謎のライダーは、一瞬こちらへと踏み出しつつ立ち留まり、すぐにきびすを返して走り去っていつてしまった。

その理由は分からないが……。

『今のは、完全に痛み分けだった。だが、あのまま戦い続けていたら、どうなっていたか……』

互いのチャージアップアタックが無効だと知れた今、もしもう一度対峙したなら、剣戟による攻撃にのみしぼってくるだろう。そうなったら、勝てるかどうか。

今の智晴には分からない。

ワーム・4

『（ちいイイイ！？　なんて生意気なヤツだ！？）』

着地したところでほぞを噛む響音。

超音波は、吸収されたところで相手の位置の把握にはなんら支障はなかったが、ベルクのチャージアップアタックがまるで効果がなかったのは納得がいかなかった。

ならば優位にあった剣戟にてこのまま戦闘を続行しても良かったが、憎き相手は飛翔手段を持ち上空にいる。

そこはフレキシブルレイピアの射程外。

仮に、さらに高空まで逃げられたら追撃できない。

落下軌道を制御できないベルクの跳躍能力では隙をさらす等いささか分が悪いなど、いくつかの懸案事項を加味し、響音は苦渋の退却の決断をした。

『キイイムカツク！あんなヤツにイイイイ！？』

物を飲み込んで反対側の壁を貫き通り過ぎて消えてゆく。

「な！？ な！？」

まったく脈絡のない怪現象。それきり、謎の少女のザリガ二怪人は現れない。

「なんてこと。しぶといライダーですこと。」

眩くなり今度は、その喪服の女までもが異形の姿に変貌した。灰色の甲殻に覆われた化け物に。

「ええええええ！？」

窮地は続く。

せめて今の虹色の流星がもう一度現れて、あいつを吹き飛ばさないか。

祈る亮介の見つめるそこに、流星ではなく無人のバイクが壁を粉碎して飛び込み、その灰色の化け物を叩き潰した。

「ええええええなにそれええええ！？」

伊達 新星・1

『うおおおお！？ 亮介！どこだああああ！？』

相変わらず、無駄に増幅された攻性障壁を放射しながら施設の敷地内を駆け回る新星。

現在、バイクにとてつもない加速がかかっているため、一旦停止しての方向転換ができず、広大な旋回半径を描いて走り回っている。

その中、適当に目をつけた、たまたま旋回した時に正面にきた建物めがけて突進する新星。

『（とりあえず、こうして暴れときゃ、そのうち敵か誰かが出てくるだろう）』

そんな言い訳めいた目論見を脳裏でばやきながらその壁面に突撃する。

その向こうの廊下にいた青いワーム・成体に気付いた瞬間に轢き逃

げて反対側の壁を抜けたその時。

ジェイルの視界の端に、少女と一緒の亮介の姿があったことに、そこからだいぶ通り過ぎてから新星は気付いた。

『いたああああ！？』

マシンゼクトロン・アンプリファイの増幅装置を停止。

バイクを急停止させた新星はその場でターンし、元の場所へ駆け戻ってゆく。

今の一瞬の邂逅で、亮介がワームに追いつめられているのはわかった。

見えた。いま自分が空けた壁の穴から、もう一匹の灰色のワーム・成体が覗けた。

『待てええええい！？』

バイクをそこで急停止。

その反動を利用して飛び降りた新星は、またさらに自身のその勢いを利用してバイクを持ち上げ、ワーム・成体がいると思しき壁めがけてバイクを豪快に投げつけた。

ワーム・5

突然壁を突き破って飛んできたバイクに叩き潰されたかに見えたマクロケイラワームだったが、受け止めていたバイクを掴みあげて難なく起き上がった。

『……………』

バイクを脇に放り棄てる。

『待てや！コラア！』

砕かれた壁の穴からアイスグリーンのライダー、ジェイルが飛び込んでくる。

そしてその少年と少女の前に立ち塞がりこちらへ構えてきた。

『……………どちらも、いまいいこと。』

あれだけの手勢を用意したというのに、一体なぜこのライダーがたいたダメージもなくここにいるのか。

そして少年の脱出を手引きした少女。

藍川 舞菜は状況の理不尽に怒りつつ、この場での行動を模索する。
『（すべて、叩き潰してしましましょうか。少年の替わりは、いくらでもいる。）』

だが、つい思考が短絡に偏る。

そこへ、新たな足音が接近してきた。

少年の後方から現れたのは、またライダー。

いつぞや小癪にも自分に大打撃を加えてきたクライプである。

『（ライダー二人……！？ あの方たちは一体なにをしていたの！？）』

多数の手勢に加え、マミヤレイナより借り受けた三体の側近がいたにも関わらず、二人ものライダーの跳梁を許すとは。

『……………！？』

あまりの怒りに、マクロケイラワームの腕が震え出す。

怒りに任せて暴虐の限りを尽くしたくなるが、状況は不利。予定で

はライダーは始末しなくても、少年は連れ出すはずだった。

『……………』

緊迫する場の空気。

苦渋の決断。

クロックアップするのは、マクロケイラワームとライダーと同時にだったが、藍川 舞菜は壁に空けられた穴から逃走を開始した。

戦闘を予想していたらしいライダーは、動かない少年をかばう位置に移動したのみで、もうこちらには追いつけない。

数寄屋 亮介・3

「おおっしゃ亮介！無事だったか！」

突然そこに飛び込んできた謎のアイスグリーンの装甲服が溶けるように消えたあとに現れた暴力男が、やおらこちらへ駆け寄ってきて肩に組み付き頭を乱暴にかき混ぜてきた。

「あ、はあ。いてて」

かなり荒っぽい所業だが、こちらの無事を素直に喜んでいられるらしいその気持ちは悪い気がしなかった。

あの謎の装甲服について驚く暇もない。

「亮介！無事でなにより！」

背後から、いつの間にか大男までが現れた。

「はあ。どうも。」

「テメエは近寄んじゃねえよ！？ 亮介が鼻息で潰れるだろうが！？」

同様にこちらの心配をしてくれていた大男が近寄ってくるが、その前に暴力男が立ち上がり大男を押しやる。

「なにを分からぬことを。人間が鼻息で潰れるわけがなかるう！？」

「テメエ自分の馬鹿力をちったあ自覚しやがれ！？」

なにやらケンカが始まってしまう。

「あ、あの……」

「どうやら、数寄屋 亮介君がヤツらの目的の要にされてしまっているみたいですね。」

今度は白スーツの男まで現れた。

「あ。あの、……車が、運転手さんが……」

高級車で送ってもらったのは、ついさっきのことである。

その途上で化け物に襲われ、車は大破してしまった。

一瞬だけ見た炎上する車。よく見えなかったが、運転手の身が心配だった。

「運転手さんは、大丈夫ですか？」

「……、ええ。あのあと連絡を受けまして。無傷とはいきませんが、生きてますよ。大丈夫です。」

「よかった……」

一瞬セリフに詰まったように見えたが、その内容に亮介は安心した。
「こちらこそ不用意でした。……そのボンクラ二人！いつまでじやれてるんですか！？」

「ダレがボンクラだクラア！？」

「こうなったら、この件はここにいるライダーで手を組む必要が……」

「よかるう。そちらの情報を……」

なにやら大人同士で何かの話を始めた三人。

解放された亮介は、やや置き去りぎみだった春瑠のほうを振り向いた。

「ゴメン。その……、ありがとう。助けてくれて。」

「あ。……うん……」

なぜか居づらそうにそこに佇んでいた春瑠は、歯切れの悪い返事を漏らす。

目を横に逸らしてうつむく春瑠。

いつもの斜に傾けた皮肉げな眼差しがなく、なんだかいつもと様子が違って見えた。

先日機嫌を損ねたままではあったが、どうもそのことを気にしているのとは違うようだ。

「……………」

春瑠と居るときはたいてい聞き役だった亮介は、いつもと違う空気に戸惑う。

ふと、さらわれる前に大男が言っていたセリフを思い出す。

『『好き』だということは、『その人がいるだけで幸せ』だということだ』

「……………！　ねえ、ちょっとこっち来て」

すべきことを思い付いた亮介は、春瑠の袖を掴んでその場から駆け出した。

数寄屋 亮介・4

メガフロート『クリサリス』の最南端。

閉じこめられていた施設のすぐ近く。外縁に沿って作られた海沿いの遊歩道へとやって来た亮介と春瑠。

手摺りの側まで駆け寄ってから、辺りを見回して、街灯から離れた薄暗い箇所を探す。

「……!？」

「ねえ。どうしたの？」

「いや……」

そして空を見上げながら、それを求め続ける。だが。

「……ねえ」

「……あゝ……ダメかな……?」

「なにが？」

落胆した亮介は、観念して上を指さす。

「なに……?」

つられて見上げる春瑠。

「いや。星がさ。見えないかと思って。」

見上げた夜空には、付近の街灯の光量に遮られて、それほど星は見えない。

「街中ならともかくさ。ここら辺なら灯も少ないから、もしかしたらと思っただけだ。」

「……どうして、そんなこと？」

空を見上げ続ける春瑠を見ながら、亮介はしばし言葉を探す。

「……ほら。前にアミューズアカシック……『AA』に行った時、プラネタリウム観れなくてがっかりしてたじゃん?だから、もしか

したら星が好きなのかな？って思ってた……」

自分の見当違いを心配して、言葉が尻すばみになる。

「……………」

見上げる春瑠は、無言。

自分の判断の採決がなかなか下らず、亮介はいたたまれなくなつて、春瑠を直視できなくなり逃げるように空を見上げた。

ぐすつ。

音が聞こえ、亮介は春瑠に視線を戻した。

そこにいた春瑠は、顔を振り仰いだまま、閉じたまぶたから涙をこぼしていた。

嗚咽を漏らしだす春瑠。

「え！？ あ、えと、ご、ゴメン！？ 余計なこと」

「……………違うの……………」

うつむいた春瑠は、両手で顔を覆ったまま泣き続ける。

「……………見えた、……………星、……………目、慣れれば、すこし……………見える……………」
嗚咽混じりに応える春瑠。

「え！？」

「え！？ じゃ、えと、なんで、泣いて……………」

春瑠は激しくかぶりを振った。

「亮介、……………りようすけえ」

濡れた目のままわずかに顔を上げた春瑠は、片手で顔を覆ったまま、右手をこちらに伸ばしてきた。

胸元に届いたその小さな右手は、触れる直前で宙を泳ぎ、逡巡を見せたあと、わずかに戻っていった。

「りようすけ……………うれしい、……………けど、わたし、わたし……………」

「え！？ え、どうした、の？」

肯定的な返事を得られたことで、一部安堵した亮介だったが、目の前の、求める手を半端にかざしながら泣きじゃくる少女の様子に、応える術を知らずただ戸惑うばかり。

「あああ……、あああ————！」

t o b e c o n t i n u e d .

第9話（前書き）

こちらは、基本的に鉄槻オリジナル&借用オリジナルキャラクターでのみ構成される『仮面ライダー カブト』の外伝的ストーリーです。世界観に若干のズレがあるほか、原作のキャラクターはほとんど出てきませんので御注意下さい。

第9話

相談者：数寄屋 亮介（高校生）

『好きなひとができました。どうすればいいですか？』

回答者：台場 和馬（大学生）

『汝の為したいように為すが良い。』

回答者：伊達 新星（秘密組織の構成員）

『おう。ガツンと「好きだ」って言っちゃまえ。』

回答者：明智 智晴（会社員）

『好きにすればいいでしょう。』

「だああ真面目に訊いてるんですよ！？ もうちょっとナニか言うことはないんですか！？」

『わたしに相談した時点で、亮介の中では答えが出ているのではないかね？』

『ほかに言うことなかねえよ！？ ていうか今度紹介しろこの幸せモン！』

『忙しい時に下らないことで電話してこないでください。』

プツン。 ツー。 ツー。

たたんだ携帯電話を投げ出して、力尽きたように自室のベッドに突っ伏す亮介。

新着メール

差出人：自殺倶楽部

件名：集団自殺企画のお誘い

本文：『終焉にお迷いのあなたへ。 当方の企画致します集団自殺を機会としてみてはいかがでしょうか。お集まりの参加者全員に、同時に旅立ちの瞬間が訪れます。ひとりぼっちではありません。ふたりきりではありません。気持ちを一にするひとたちと共に、終焉を迎えてみませんか……』

ある日、そんなメールがコミュニティ登録者全員へ発信された。数日に渡り数回に分割されて送信されたため、受け取った人々のタイミングはまちまちだったが。

だがやがて人々は、メールに記されたその場所へと集まってゆく。恐る恐ると、あるいはごく普通に、または逃げ込むように。

そこを訪れる人の姿自体はまばらではあったが途切れることなく、着実に集結してゆく。

終末まであと三日。

数寄屋 亮介・1

「あああなんて頼りにならない大人たちなんだ!？」

拉致された化け物たちの巣窟から救出されたあの事件から数日後。

あの日、パートナーたる枕木 春瑠に対して咄嗟にとった自分の行動とその気持ちについて、自分なりに熟考した結果、『やはり自分は春瑠のことが好きだ』と自覚した亮介は、初めての感情とその事

態に對しどうすればいいのかがまず分からなくなり、身近な『大人』に相談をもちかけたところ、見事なまでに奇麗に一蹴されてしまい、憤慨しつつも自分で考え思い付いたところを実行に移していた。

やって来たここは『クリサリス』にあるエンターテイメントパーク『アミューズアカシックワールド』。

その中のショッピングモールに、今度は亮介ひとりで乗り込んでいった。

かつて、ここで一度、遠回しに同様の気持ちを伝えて見事にその気持ちのすれ違いを突きつけられ玉砕した形に終わったのだが、拉致からの脱出後に見せた春瑠の態度から、どうもその言葉が額面通りではない可能性を見出した亮介は、整理した考えに基づき改めて気持ちを伝えることを決意したのだ。

なので『まずは身支度と、プレゼントだろう』と以前春瑠に見繕ってもらった服一式を購入し、勢いのまま次の雑貨ショップを練り歩いていた。

伊達 新星・1

ネオセクト本部。

執務室のドアを開けて、織田 秀成が『く』の字にへし折れたバツトを肩に担いで入室してきた。

続いて、脳天にでっかいコブをこさえた伊達 新星が入ってくる。
「だいたいよお。『間に合わないと思ったから咄嗟にバイク投げました』ってなんなんだ!? ライダーならまず『咄嗟にクロックアップする』っつくせつけとかねえとマジで死ぬぞいつか!？」

「しょーがねーじゃんよー。誰だつてまず『走る自分より投げたボールのが速ええ』って思うじゃん？」

「てめーが投げたのはウチの最新鋭バイクだツツ！？」
「ばきゅん！」

執務机に叩き付けられたバットの折れ曲がったところから先がとうとう千切れ飛び天井に突き刺さった。

「ったく。で。あのガキはどんな案配だ！？」

「おお！そっぴやなんか好きなオンナができたって！どうしたらいいかって訊くからよ！ガツンと告つたれと」

「ダレがダチんなれつつたかツツ！」

「ごがすッ！」

投げつけられたバットの下半分が直撃した新星の頭で跳ね返り天井に刺さっているバットの上半分のとなりに突き刺さった。

「いゝゝじゃんよゝゝ！？ そのほうが手っ取り早いってえ！？」

「（チツ）、しゃーねーな。なら一層気合い入れて護れよ。」

「……なんだよ改まって。」

「実はな……」

枕木 春瑠・1

湾岸沿いにある大きな自然公園の駐車場の最奥に、枕木 春瑠はいた。

例によつて黒を基調に紫とオレンジで彩られた衣装に身を包む春瑠の『よそ行き』の装束。

だが今は、その派手な格好を隠すかのようにいちばん奥に停められた車の陰に座り込んでいた。

ここはひとりで居るときの気に入りの場所である。

なぜなら、その車は長期間不法に遺棄された車だったから。

撤去要請の張り紙すら朽ちたこの動かない車の陰ならば、人の目を

遮り続け、憚ることなくここに居座れるからだ。

『（まるで、わたしみたい。居るだけで邪魔な存在。）』

駐車スペースをひとつ意味もなく塞ぎ続けるこの廃車が、自らのいまの姿に重なる。

本来、他の走ってきた車が停まるべき場所を、もう走ることのない車のカタチをした鉄屑が居座っている。

『（亮介……）』

自殺のパートナーとした少年の名を呟く。

一度拒絶してみせたにも関わらず、亮介はそれでもなお春瑠と関わろうとした。

こちらから誘っておいて矛盾した話だが、もう亮介のそばには居られない、そう考えていたのに。

今日も夕方から大切な話があるからと呼ばれたのだ。

『求められる』という誘惑の、なんと甘美なことだろう。

ダメだと分かっている、赴こうとする自分。

先日、亮介が春瑠のために星の見える場所を探してくれた時から、一度タガが外れ溢れ出した想いはどうにも止められなくなっていた。だが。

『どうして……。どうして、こんなことに……』

抱えたひざに頭を落とす。

無音。

いや。海風が草をなぶる音と、上空を過ぎゆく旅客航空機の音しか聞こえない。

おかげでカバンの中の携帯電話のバイブレーションの音を聞き逃すところであった。

「……？」

のそのそと携帯電話を取り出す。

メールの着信を示す表示。

「！？……ええ！？」

内容に目を通した春瑠は、驚愕に固まった。

「ほう。自殺志願者たちの一斉集団自殺とな？」

「ええ。それだけならまあ勝手にやれ、と言うところですが、まあそういうことなので、ね。」

「なるほどな。それは由々しき事態よの。……で、亮介は？」

「彼から関わらなければ、それで良し。今の数寄屋 亮介くんには、自殺してるヒマはないはずですから。ですが、彼に接触してくる輩が出てくるでしょうね。ノーマークというわけにはいかないでしょう。」

「ふむ……。……レディックとやらから接触はあったか？」

「いいえ。こちらにもあれからありません。数寄屋 亮介くんのことを知っていた辺り、用事があの施設だけとは思えないんですがね。」

「ふ。あれは、互いの腹の探り合いよ。まあ準備運動にすらならなかったがな。」

「こつちはひどい目に遭いましたよ。ともあれ、そういうことなら、なおさら」

「そう。決戦も近いということよ。」

「……ところで。」

ぐふふと野太い含み笑いを漏らす大男の、安全ヘルメットと薄汚れた上下の作業服という出で立ちで立てた鉄骨にもたれ掛かるその姿を上から下までじっくりジト目で眺めてから呟く智晴。

「クビですからねあなた。もうウチの工事に関わらないでください。」

「なぜだ!？」

雑多な音の響くビル建設工事現場で愕然とする和馬。

曲月 七彦・1

「……つと。なあ舞菜。送信ぜんぶ終わったよ」

「ご苦勞様です。ご主人様。」

淡い灯のゆらめく、閉め切った薄暗い部屋でパソコンを操作する瘦身の男と、その背後に佇む漆黒のカントリードレスの女。

「なあ舞菜。まだワームが擬態もしてないヤツにまで送っちゃったけどいいのかな？もし全員参加されたらこれ誰もいなくなっちゃうよ？」

椅子の背に思いきり身体をそらしてばやく七彦。

「……なあ舞菜。そしたら、今度からどうすんの？……また集めよつか！自殺したいヤツ！それともほかになんかおもしろいことある？」

「さあ……。」

曖昧に呟く舞菜。

ワーム・1

まるでこれからも同じことが続くと感じているこの下等な人間の間抜けさが、なんとも滑稽なことである。

舞菜は、漏れる笑みを隠すことすらしなかったが、元来控えめな彼女の動作はそれでも目立たない。人間も氣付いた様子がない。

まあ、どうでもいいことだ。既に用済みになったこの人間のことなど。

数寄屋 亮介・2

「っしや！買えた！」

奇麗にラッピングされた小振りな包みをかざして意気を上げる亮介。買った服にトイレで着替えを済ませ、『アミューズアカシックフィールド』出口に立つ。

「さて。」

改めて春瑠と待ち合わせ場所を検討するべく取り出した携帯電話に、メールの着信があったことに、その時気付いた。

「あれ？もしかして」

春瑠からの連絡だろうか。あわてて開いたメールの内容を読んだ亮介の、その表情がみるみるこわばってゆく。

数寄屋 亮介／枕木 春瑠

『クリサリス』のほぼ中央に位置する無人のビル街に、亮介と春瑠はそれぞれの方角からやって来た。

誰もいない、気配のないビル群に挟まれ閑散とした道路の真ん中で向かい合うふたり。

ここは、テナントやら住居やらが入る予定の『街』のひとつであったが、ここ一帯に建築されたビル全てが耐震強度に問題有りと診断され、いずれひと区画丸ごと取り壊されることが決まっていた。そのため、他の区画とは隔絶され、まるでゴーストタウンと化していた。

「……メール、見た？」

「……え？」

沈黙に堪え兼ね、亮介から口を開く。

「『自殺倶楽部』からのメール。ここでみんな集めて、集団自殺するんだ、って。」

「……うん。」

それきり言うべきことを見失って口をつぐむ亮介。
春瑠も口ごもり、無言が続く。

吹き抜けてゆく風が、なお寒々しい。

「……ああのさ。」

「……なに？」

未だ目を合わせてこない春瑠に対し、整理をつけた考えを切り出した。

「俺、一緒に死ぬよ。」

「え！？」

弾かれたように顔を上げる春瑠。

「一緒に、死ぬ。でも、いま、ここでじゃない。」

「……！？」

「その、やり残したことをやってからでいいんなら、俺、そういうのいっぱいあるよ。だから、その、それに、付き合ってよ！パートナーだから、付き合ってよ！」

「……え！？」

「……好きだから。俺、好きだから！」

ポケットから取り出した、小さな包みをかざして叫ぶ亮介。

「……誰が！？」

「え！？」

予想外の返事に面食らう亮介。

「……名前、呼んでよ！ 亮介、わたしのこと、最初のあれつきりわたしの名前呼んでないよ！？ ねえ、呼べるでしょ！？」

「あう！？ ……あ、その……」

それは皮肉げなところのない、初めて見る春瑠の素直な表情、真っ向からの叫びであった。

亮介は図星を突かれて口ごもる。

「さっきから、主語がなくて、言ってること、よく分かんないの！」

ねえ！呼んでみせてよ！？」

なぜかと問われれば、それは気恥ずかしかったから呼べなかったのだ。

だが、既に『好きだ』という言葉まで口にしてしまった。ならば、ヒトの名前などいかほどのものか。

亮介は、深呼吸して居住まいを正した。

「あ……、は、……は、はる、は……」

そのたった3文字のなんと困難なことか。

まるで寒さにかじかんだように震えるアゴを叩いて止める。

「（大丈夫！言える！……名前くらい！）」

改めて息を吸い込んだ。

「ようこそ少年。『自殺倶楽部』へ。」

その時、背後から聞き覚えのある女性の声がした。

数寄屋 亮介・3

「……！？」

亮介が振り向いたそこに。

いつの間にかふたりの人影があった。

ひとりは見覚えがあるものにも、いつぞやの夜の公園での遭遇からこれで三度目、先日、当の亮介を拉致した化け物の仲間、まるで喪服めいた漆黒のカントリードレスを身に纏った女性。
そしてもうひとりは男。

亮介を以てセンスが悪いと思うそのよれよれの衣服に猫背の姿勢という対外的意識ゼロの男は、黒縁メガネの向こうから、嫌悪をもよおすいやらしい目つきでこちらを睨め付けている。

その目線を気にしつつ、亮介は、進み出てきた喪服の女性のほうに
向き直った。

その異様な雰囲気、喪服の女性が踏み出してくるのに合わせて、亮

介は後退する。

なにしろ、いつあの灰色の化け物に変貌して襲いかかってくるか分からない。再び目前に迫った死への恐怖によって亮介の肚の底に現れた不快な冷たさが、その脚を震わせた。

無言のままそれでもなんとか足を運び続け、やがて亮介は春瑠の隣に並んだ。

「……逃げよう。……走れる？」

隣の春瑠に、なんとか搾り出すように小声で告げる。

だが春瑠はなぜかその女性を睨みつけたまま無言だった。

「……どうしたのですか？少年。自殺しに来られたのでしょうか？もう皆さん、あちらのビルの中で、待っていますよ？」

「えー！？」

くるりと辺りを示した女性の手につられて、周りを見回す亮介。

「……それとも。ここで死にますか？」

言葉と同時に、女性の姿がぼやけ、膨張し、灰色の異形の姿へと成り変わった。

「ひッ！？」

とうとう現れたその恐怖の姿に息が詰まる。

目の前まで迅速に迫ってきた化け物は、蟹のハサミめいた腕を振り上げ、それを亮介目掛けて振り下ろしてきた。

「……！？」

思わずきつく目を閉じる亮介。

ガキン！

響く打撃音。だが痛くない いや、目前で遮られたようなその音に、そうっと目を開いた。

そこには、灰色の化け物の腕を受け止める赤い異形の背中があった。それは、拉致された時亮介のいる部屋にやって来た、あのザリガニめいた赤い化け物だった！

「ええっ！？」

化け物が、化け物の攻撃を遮っている。

一体なにが起きているのか。あわてて隣の春瑠を確認しようとしたが、そこに春瑠の姿はなくなっていた。

「あ、あれ!？」

ひと足早く逃げたのなら、それでもいい。だが、この一瞬で行けそうなところに少女の姿は見当たらなかった。

ともあれ、自分も逃げようと前を見直したその時。

「……あなたごときが、これはなんのマネですか？」

先ほどまでとは違い苛立ちのこもった声音で呟くと同時、灰色の化け物が、改めて目の赤いザリガニめいた化け物を横薙ぎに殴り飛ばした。

密度の高そうな体躯が、あっけなく吹き飛びビルの壁に激突する。

「……身の程をわきまえなさい。下等。」

吐き棄てる灰色。

一方、打ち倒された赤いザリガニの化け物は、苦しげに身を屈めると、その姿がばやけたした。

「え!？」

やがてその姿は別のものへと成り変わり。赤い化け物に替わってそこに現れたのは、比べ物にならないくらい小柄な人間の少女の姿。

枕木 春瑠であった。

「……あ？」

呆然と呟く亮介。

「命令を忘れるほど下等なら、もうここで殺しましょうか。」

「……亮介は、やらせない!」

叫んで再び、今度は亮介の目の前で赤い化け物の姿に変身してしまう春瑠。

「ええ？」

そして次の瞬間、灰色と赤の化け物は消え去ってしまった。

「……………」

あまりの事態に、立ち尽くす亮介。

「（…………え？ ……あの娘が、化け物……！？）」

亮介を殺そうとした連中の、同類。

「……………うそだ……………」

「嘘じゃねえよばあか。」

悪意たつぷりの声が亮介の耳朵を打った。

「！？」

「ワームなんか本気になっちゃって。バカじゃねえのおまえ。死ねよ。」

驚愕の事態とそいつの影の薄さに存在を忘れていたそこにいた男が、こちらを睨め付けながら近寄ってくる。

別に怖いタイプの人間ではない。どちらかと言えば根の暗いいじめられっ子がそのまま大人になったかのような人間。

根拠薄弱な悪罵を吐いてようやく自尊心を保っているような印象のその男に、不本意ながら亮介は自分自身を鏡映にしたかのような錯覚に陥った。つまりは、ひたすら不気味で嫌悪感しか出てこない。「死にたいんだろ？ おまえ。居ても他人にオモチャにされるしか能のねえ、あげくワームが化した女しか相手にできねえド変態じゃ生きててもしょうがないだろ？」

「……………！？」

叩き付けられる、心無い罵倒。

男は、そのビルをアゴでしゃくって見せ。

「そこ中入ってるよ。楽に死ねるからさ。」

「……………あの娘は、ちがう」

なぜか、自分のことよりも春瑠のことを悪く言われたことに腹が立った。

だが途端に耳障りな爆笑が炸裂する。

「ツケツヒヤハハ！ まだそんなこと言ってるのかよ！？ おまえ

は騙されてたんだよ！ワームが化けた女に釣られてよ！化け物にまですがるしかねえお寒い寂しがり屋のクセに怒ってんじゃねえよウザってえ」

「……………！？」

言い返せない。

一方的な言葉の蹂躪に痛めつけられ、亮介は力なく尻餅をついた。

「……………へっ。お人形遊びで満足したかよ。じゃあそこで死ね。のたれ死ね」

言うだけ言つと、男は振り向いて立ち去ってゆく。

「……………！？」

頭にきた。ひどく頭にきた。

かつていじめを受けた時の比ではないくらい。今すぐ追いついて、春瑠を化け物だの人形だの言つたあいつを痛めつけてやりたい。

「……………」

だが、立ち上がれない。

「（あの娘が、化け物…………）」

春瑠が、あの化け物連中と同類だったというその事実が、亮介から力を奪ってゆく。

騙したのかもしれない。仲良くしたのかもしれない。殺そうとしたのかもしれない。一緒に死のうとしたのかもしれない。自分のしたことを喜んでくれたのかもしれない。亮介の告白を受け入れてくれたのかもしれない。

「（……………でも、化け物…………）」

やっぱり、そこから気持ちが悪く抜けていってしまう。

座り込む亮介のいる無人の道路に、そこかしこのビルの隙間から、己が目を通し嘆き悲しむかのような面相の緑色の異形が無数にうじやうじと這い出てきた。

「……………」

悪夢のような光景。この世の終わりが来たのだ。

『そんなに死にたいんなら、俺が替わりに生きてあげるよ。』
かつて現れたダブルゲンガーを思い出す。

「俺も……あの化け物みたくなっちゃえばいいのかな……」
そうすれば、なにも苦しくなくなるだろうか。

ライダー・1

『クリサリス』 中央区へ向かう数台の車両の姿があった。
先頭を三台のバイクが並んで走り、その後を巨大な車両・ハマーが数台追従している。

ただしその巨大な車両はすべて形状こそほぼ同一だが、ホワイトのものとシルバーのものの二種類に別れていた。

予定地点に達したところで、ハマーは全て角を曲がり別方面へと走り去ってゆく。

『オメーントコの兵隊、大丈夫なのかよ!?』

『さあ。どこの馬の骨とも知れない武装集団に脚を引っ張られたら、大変でしょうねえ』

『デメエコラ!? シロウトの生兵法でナマイキこいてんじゃねえぞ!?』

言うまでもなく三台のバイクにまたがるのは、既に仮面ライダーの姿に転身したクライプ、ジェイル、マホークの三人。

そして同行してきたハマーはそれぞれが擁する兵隊。白のハマーにはネオゼクトのネオトルーパーが、シルバーのハマーには明智グループのアクトルーパーが乗っている。

だが、別にネオゼクトと明智グループが共同戦線を敷いたわけでもなく、たまたま同じタイミングでここに辿り着いただけのことだった。

『まあ主目的はどこぞに集められた自殺志願者たちの救出なわけですから。それを達成したければ、ワーム以外は攻撃しないことです』

ね。』

『それはこちらのセリフだ。救出目標以外は一顧だにせんから気にすんな。』

電話によるそんな両組織のトップ同士のやりとりがあつて、今に至る。

『ふむ。見えたな。』

他の区画からは森林によつて区切られた『クリサリス』中央区。その街並が見えてきたと共に、そこに蠢くワーム・サナギ体の群れも目に入った。

『おおっしゃ！ブチかましたらああああ！？』

すると、意気をあげたジェイルのマシンゼクトロン・アンプリファイが急加速し、単身そのワームの群れへ飛び込んでいった。

『キャストオフ！』

《キャスト・オフ！ チェンジ・ジュエルビートル！》

『ライダーチャージ！』

《ライダー・チャージ！》

バイクの上で手早くゼクターを操作し、マスキドアーマーを吹き飛ばして虹色の輝きを吹き出す。バイクのコントロールパネルに現れたボタンを叩き付け、巨大な虹色の怒濤と化したジェイルは、さらに加わつた加速による勢いのまま、道路を埋め尽くすワーム・サナギ体の群れにバイクごと突入してゆく。

そして道路の果てへと駆け抜けてゆくジェイル。途上にいたワームは片っ端から吹き飛ばされ消滅し、まるでえぐり取られたかのように群れの半数が一直線に焼失した。

『ふむ。ならば続こうか』

『だめですよあなたは。』

『むう！？ なぜだ！？』

ゼクターを操作しようとしたクライプは、横からマホークに差し止

められうなり声をあげた。

『あんな所で破壊音波なんかバラ撒いたら人質のいるビルまで粉碎するでしょう!?!』

『……、わかつている』

『嘘でしょう?!』

残った群れの只中へ駆け込んでゆくマシンゼクトロン・アンプリファイとマホークエクステンダー。

数体のワームを撥ね飛ばしたところで勢いの弱まったバイクから降り、それぞれ群がってくるワームに対し身構えるクライプ・マス Kudフォームとマホーク・マス Kudフォーム。

『いざ、ゆかん。』

『よしなに。』

そして各々目前のワームの群れへと駆け込んでいった。

台場 和馬・1

『うぬうう!』

ゼクトクナイガン・アックスモードを振り回してワームを蹴散らすクライプ・マス Kudフォーム。

一薙ぎで縦に横に次々と真つ二つにされてゆくワーム。

あまりにも無体なクライプの膂力に、ワームの抵抗はまるでたいした障害にもならず、まったく勢いが衰える様子がない刃の蹂躞に、クライプに押し寄せるワームは近寄る端から緑色の爆炎と化してゆく様はさながらぼっかり空いた深遠に流れ込む緑の濁流のようである。

『ぬおおお!?!』

大きく横薙ぎ。数体のワームの身体がまとめて上下泣き別れとなり爆発して消える。

『マホークトライブ射出！』

《マホークトライブ。》

両肩のラウンドシールドの外周部に等間隔で設置された十二基のスリットすべてから同時にジャカ、と音を立ててマホークマイザーが頭を出した。そして一斉に射出される計二十四基のマホークマイザー。

一拍置いて再びすべてのスリットからマイザーが頭を出す。それを二回繰り返し、合計七十二基のマホークマイザーがワームの群れめがけて飛び立つてゆく。

『全基、ワームに特攻！ただし二匹は間を空けて！最大効果爆撃！』
智晴の指揮に従い、一旦上空へ飛んだマホークマイザーたちは、旋回し、ワームの群れへと降り注ぐ。

一度の爆発で二丁三匹を巻き込むマイザーの爆発。目標を見失ったマイザーは改めて上昇し、別の目標へ飛び込んでゆく。

マホーク自身も、迫る端から拳で、蹴りでワームを蹴散らしてゆく。その最中も、特攻によって消失した分のマホークマイザーが両肩のラウンドシールドから射出され補充されるため、戦場には常に五十基以上のマイザーが飛び回っている。

『……ん！？』

その時、智晴は戦場のど真ん中に、座り込む少年の姿を見つけた。

『あれは……数寄屋 亮介くん！？』

まるで魂が抜けたかのように脱力して座り込んでいるのは、間違いない亮介であった。

好きな娘ができたことから、こんな集団自殺の開催地になど用のないはずの少年がなぜこんなところにいるのか。

『……！？』

いぶかしむ暇はない。その亮介に迫るワームを見つけた智晴は、人さし指をかざしマホークマイザーに指令を出した。

即座に目標変更して亮介に迫るワームに突撃するマホークマイザー。爆発によって焼失するワーム。

だが、目の前で起きた爆発に、亮介はたいした反応を示さない。

『なにをやっているんですか！？』

亮介に駆け寄る智晴。

「……………」

少年は、目の前に現れた、初めて見るはずのブルークグリーンの奇形の鎧にも、なんら驚愕どころか反応もしない。

『…………私ですよ！？ わかりますか！？ ほら、白いスーツを着て、』

だが、その説明も無駄と悟る。

焦点の合わない少年の目は、どこも見てはいない。この異形の集団を見て、ショックを受けたのだろうか。

『ええい、……アクトルーパー隊！手の空いた一班、私のところへ！』

ともあれ救助するために、兵隊に通信する智晴。

そこへ、この戦場の爆音を越えて聞こえてくる轟音が近づいてきた。

ジオファイリドワーム・ベルジアン・1

『ふ、ふ、ふ……いよいよ俺の出番か。いずれ塵芥に帰すもの、はじめからこうしていればいいというのに。』

物陰からワーム・サナギ体の大群の乱戦を眺めるジオファイリドワーム・ベルジアン。

無数のムカデによって編み上げられたかのような身体には、失われたはずの片腕も再生されていた。

そしてそれは姿をばやかせ、人間・男性・松永^{まっなが・はじき}弾の姿に擬態した。

いかつい体躯に先鋭的な容貌。知略と暴力の世界に生きてきた記憶がまるで押し込められた火炎のごとく、獰猛な気配を身体中から放散させている。

その胸には、奇妙なペンダントが揺れていた。チエーンの基部がある長方形のオブジェの上に、同形状の長方形が、中心を軸に40°ほど傾けて付けられている。

これこそがマミヤレイナより与えられたライダーシステムのイクイップデバイス『カグツチノミタマ』。

『ホノカグツチよ！』

その呼びかけに応え、なんと地を割って巨大な機械仕掛けのムカデが現れた。

本来ならば『カグツチゼクター』と呼称されるべきそのムカデ・ホノカグツチは、迅速に松永の身体を螺旋状に這い上がると、胸部で改めて一周し、左肩から胸元の『カグツチノミタマ』の斜に傾いたパーツに噛み付いた。

そして『袈裟懸け』に巻き付いたホノカグツチは、最後に尻尾を同じ『カグツチノミタマ』のパーツに下から接続する。

『変身。』

《ヘンシン。》

応えたやたら重々しい認証音声と同時に、ホノカグツチが巻き付いたところから全身へ、順次ハニカム構造状に展開形成される鮮やかなオレンジ色の装甲。

だが、形成されてゆくこの装甲は、大柄な松永を二回り、いや、三回りは大きく取り囲んでゆく。

そして装甲生成は松永の身体を包みきつても終わらない。そのまま松永の背後へと装甲生成は続いてゆく。長く、長く。まるで地によこたわる大蛇のごとき長大な影が現れた。

いや、『大百足』と形容すべきであろう。先頭すなわち松永本人はまるで『単眼巨人の上半身を生やした戦車』のような姿のマスクド

アーマーをまとい、腰の後ろから、四脚を生やした台形のホバークラフトのようなユニットを十数基連結している。両肩から長大なカノン砲を伸ばした松永自身を『頭部』と見なすなら、それはまさしく『巨大な大百足』であつた。

これが松永のライダーシステム『仮面ライダー カゲツチ・マスクドフォーム』の姿である。

『ふ。ゆくか。』

グオオ、とうなりをあげるその巨体。

ホバーユニットの駆動音を轟かせながら、もはや重戦車と呼ぶべきカゲツチのマスクドアーマーはゆっくりと始動し、牽引する十数基のコンテナユニットを引き摺って、やがて迅速に戦場へと向かつていった。

明智 智晴・2

『！？ なんです！？ あれは！？』

その轟音の発信源に気付いた智晴は、だがそれが一体なんなのか、初見では分からなかった。

蠢くワームの群れの彼方に見え隠れする鮮やかなオレンジ色の巨体。『腕を生やした戦車』に見えたが、どうもその巨体の向こうにも、何かが繋がって続いているようにも見える。

その奇怪な戦車は、ワームの群れを撥ね蹴散らし緑の爆炎を踏み潰しながらこちらへと向かってきている。

『くっ！？ まずいですね』

回りをワームに囲まれているため、亮介を抱えて逃げることもできない。

近寄る端から殴り散らすことを繰り返すしかない、膠着状態だった。せめて少年が正気に戻り、自力で移動してくれたら。

『アクトルーパー隊！まだですか！？』

通信機能に怒鳴りつける智晴。

その時、あの戦車の砲塔が動いた。

『え！？』

そしてその戦車は、走りながらそれを発射した。

間近で響く轟音。それは、背後のビルの最上階を吹き飛ばした。

『あああ！？』

そこに誰かいたのか、いないのか分からない。

いや、それよりも降り注ぐ瓦礫を防がねば、自身も少年も危ない。

砲撃はさらに続く。何度も、何度も。その度に、まわりのビルの至る所が吹き飛びえぐられ、瓦礫がバラ撒かれる。

『うおおお！？』

少年をかばおうとするが、混乱して右往左往するワーム・サナギ体に阻まれ、次第に少年の姿を見失ってしまう。

『くっ！？ なんなんですかあは！？』

落下してきた瓦礫を避けた拍子にワームとぶつかってしまふ。ワーム同士でもぶつかり、転び、もつれて、あげく瓦礫の下敷きになる個体もいる。

そして轟音が間近に迫った。

『おおおおお！？』

辺りのワームごと、その巨体の突進に撥ね飛ばされるマHOOK。

そのまま通過してゆく轟音。一切合切を巻き込み、舞い上がる土埃がなにもかもを包み込んでいった。

t o b e c o n t i n u e d .

第10話（前書き）

こちらは、基本的に鉄槻オリジナル&借用オリジナルキャラクターでのみ構成される『仮面ライダー カブト』の外伝的ストーリーです。世界観に若干のズレがあるほか、原作のキャラクターはほとんど出てきませんので御注意下さい。

第10話

枕木 春瑠は、かつて数人の少年らに暴行されたことがあった。それにショックを受け、絶望し、そして世を儚んで自殺を試みた。だが、その時は死にきれず助かってしまい、病院のベッドで目覚めることになった。

ある日、病室を訪れてきた見知らぬ女性の紹介により、『自殺倶楽部』の存在を知った。

その女性も自殺を求めていたという。

枕木 春瑠は、『自殺倶楽部』に入会登録し、やがてその女性と共に『自殺倶楽部』の手引きによって心中し、今度こそ死亡した。

その様子を擬態・枕木 春瑠はつぶさに見ていた。

『死んだ自分』という事実と『死ななかった自分』という矛盾を胸の内に、擬態・枕木 春瑠は『引き続き』苦悩し続けることになった。

亮介は夢を見ていた。

春瑠と一緒にいる夢を。

楽しいことをしているはずなのだが、状況は夢ゆえに曖昧にぼやけている。

だがそのいずれの春瑠の顔にも笑みがないことは、はっきりと分かる。

『……そうか。そう言えば、笑顔って見たことないや。』

ふと、覚醒しかけの意識がそのことに思い至った。

加速空間中。

通常の時の流れに置き去りになった亮介をその場に残し、襲いかかるマクロケイラワームの猛攻を必死に捌き続けるキャンバロイデスワーム。いや、枕木 春瑠。

怒濤のごとき両腕の乱打・刺突を全力で後退しながら横に下に躲し続ける。

『己の分もわきまえずに愚かなことをしたものです。このわたくしに逆らうなど！』

『確かにね！でも、わたしのバカさ加減は、今に始まったことじゃなかった！』

『そう。訂正しましょうある意味わきまえた行為ですわね！？ 愚かなあなたは格上のわたくしを怒らせる意味も分ならず、殺されに來たのだから！』

『最初に『死のう』と思った時からバカだった！でも、もういい！こちら二回も死んでんのよ！？ 今さら恐いものなんて何もないのよ！』

（亮介が、死んじやうこと以外は！）

頭を貫こうとした灰色の刺突をかがんで躲したその瞬間。今まで視えていなかったものがキャンバロイデスワームの視野に二重写しに現れた。

エネルギーの流れ。

自らの体内にあった、ある器官が初めて活性化する。

捉えたタキオン粒子を取り込み破壊エネルギーに変換、鋭利に変形した自らの右腕のハサミにそれを集中させ、マクロケイラワームのガラ空きの脇腹へ叩き込む！

『ぐっ！？』

大きく後退する舞菜。

『あああああああ!?!』

突進し、連打に次ぐ連打。春瑠のメチャクチャな殴打によりマクロケイラワームは押し返されてゆく。

『ギイイイイイ!?!』

『!?!』

奇声を発したマクロケイラワームの、腰にスカートのように巻かれた数本の太いパイプのようなもののうち一本が立ち上がり、春瑠の腹を突き飛ばした。

大きく吹き飛ばされるキャンバロイデスワーム。

『図に乗るなアアアアア!?!』

口調をガラリと変えて絶叫する舞菜。

ガキガキとその身を変形させてゆくマクロケイラワーム。

腰のパイプ全てが立ち上がり、二段階に折り畳まれていた関節が現れ地面に突き立ち、それらを脚としてその身の全高を倍以上に持ち上げた。

人型時の両脚だった支持肢はつま先をハサミに変形させ関節の向きを変えてこちらを向いた。

身体全体が膨張し、全身を包む甲殻が例外なく鋭利に変形してゆく。そこに現れたのは、巨大なタカアシガニ、いや、伝承にある『女郎蜘蛛』と形容したほうがいつそ近い形状となってしまうていた。

『バラバラにおなり!』

ドカドカとアスファルトを高速で耕しながら春瑠に迫るマクロケイラワーム。

削岩機のごときその無数の長い脚の乱打が、身を起こしかけたキャンバロイデスワームを襲う!

「……………」

亮介は瓦礫の中で覚醒した。

地面と接触していた頬の痛みに顔をしかめて回りの状況を確認する。春瑠と待ち合わせした無人のビル街は、その様相を大きく一変させていた。

穴だらけのビル。うずたかく積み上がった瓦礫。舞い上がる砂埃。まるで映画で観た、爆撃直後のようである。

「……………あれ……………？　なんで、こんな……………」

顔をぬぐい、両手の砂を叩いて落としながらひとりごちる。

「……………そうだ」

春瑠が、化け物だった。

そして訪れた世界の終わり。

まさしく終末の風景にふさわしいこの状況は、夢想した最期の光景と合致していたが、ただひとつ、腑に落ちない点がある。

「俺……………、まだ、生きてる……………」

両手をためつすがめつ眺めつつ、擦り傷の痛みを自覚してこの現実を思い知る。

「……………もう、生きてても仕方ないのに……………」

あぐらの姿勢で地面に両手をつき、嗚咽をこらえることもせず、前のめりに身を屈める。

「……………」

終われ。早く終わってしまえ。

だが、いくら念じても状況は動かない。

「……………どうして……………！？」

悔しさに、唇を噛む。

『数寄屋　亮介。』

突然、どこからともなく告げられた男声の呼びかけに、重たい頭をあげ、辺りを見回す。

『数寄屋　亮介。聞こえているな。』

「……え？」

『数寄屋 亮介。聞こえているな。』

もう一度。確認の旨を告げたのは、すぐそこに滞空していた、機械仕掛けの小さな赤とんぼだった。

「……なにこれ」

『そうだ。その虫を介して話している。数寄屋 亮介。そこに剣が落ちているだろう。』

「え？」

言われるまま、つい辺りを探ってしまう亮介。

だが程なくその『剣』らしきものを発見した。瓦礫の下に挟まっていたものを引きずり出す。

「……これ？」

『そうだ。紫色の剣だ。』

言う通り、それは紫色を基調とした『剣』。だが、奇妙な形状をしていた。

『柄』と『刃』のあるそれは、何かと問われれば確かに『剣』である。だが、用途不明な形状の溝や、いささか不合理な太さの『峰』など、どうにも不思議な物体である。

『よく聞け。それは、人間の能力を倍化させる強化服の発振器だ。おまえの回りにいる連中の、変身する姿を見たことがあるだろう。あれと同じことを、それを使えば、おまえも変身することができる。あのワーム……化け物に対抗することができる。』

「え？」

『時間がない。迅速に理解しろ。おまえならできることだ。死にたくはないのだろう？』

「でも……」

もう生きてても仕方ない。捨て鉢な考えに蝕まれていた亮介には、大男や暴力男が持っていた『力』もどうでもいいことであった。

『選べ。おまえはまだ生きている。どうせ死ぬなら、やるだけやっ

てからでも遅くはない。』

だが、その声はまるで亮介の気持ちを見通したかのように言葉を紡いでゆく。

『負けても、生きているのならまだ戦える。どうせ死ぬのなら、負けて終わるより、勝ち逃げたほうがいい。』

「……………!?!」

『選べ。その気になったなら、グリップのトリガーを引け。』

「……………!?!」

火場 弘司・1

『選べ。その気になったなら、グリップのトリガーを引け。』

言うべきことを言つて、『仮面ライダー レディック・ライダーフォーム』は巨大なクロスボウを脇へ置き、既にスナイプモードに変形させたレディックゼクターを取り上げ構えた。

スコープを、数百メートル先にいる少年に向ける。

「……………」

これで目的は8割方進行した。ここから先は、あの少年次第だ。

火場が受けた今回の指令の目的は、『自殺志願者を被験体として、改修されたあるライダーシステムの稼働実験をする』こと。

本来『マスクドライダーシステム』は適合資格者でなければ稼働はおろか変身することすらできない代物だ。

だが、いま少年に渡したライダーシステムは、前準備の必要があるが、どんな人間だろうとシステムに適合させ変身させることができると言つ。

元は『マスクドライダー計画』の初期に開発されたものが、最近のゼクトの発達した技術によって、改修・バージョンアップを施されたい。

その実験台に、『いつ死んでも構わないと考える人間から候補者を選出し、充てよ』という指令が下り、その実行者として火場が指名されたのだ。

ウカワームという強力な個体による動向とその陰謀の一部をゼクトは既に把握している。

ワームらが集めている自殺志願者の中から被験体を選出し、かのライダーシステムを与え、あわよくばウカワーム一味の一部に打撃を加えるという一石二鳥が、この作戦の最終目標である。

その被験体選ばれたのが、数寄屋 亮介。

『（しかも他のライダーが近くにいるのだから、より事が運びやすくなる、と思ったのだが。）』

いつの間にか当の本人は、自殺の瀬戸際まで追いつめられていた。

『言えることは言った。あとはまあ、その時はその時……それより』
即座にベルトのトレーススイッチを操作。

《クロックアップ。》

大気のうねりが消滅する。

『ツキイイイイ！？』

火場のいるビルの屋上に、紫色のマスクドアーマーが飛び込んできた。

ホメロジエクスワーム・1

『……………！？』

小早川 響音は激しく苛立っていた。

アイカワマイナによる、この件に関わるライダーの殲滅作戦として展開されたこの戦いにおいて、響音は意に副わない役割を充てられたからだ。

『おまえは、その遠くから狙ってくるライダーを探し出し、それを始末しろ。』

マミヤレイナからの命令なら仕方ない。

『だけど俺はあ！？ アイツを引き裂きたいのにイイイイ！？』
アイツ。脳裏に浮かぶのは、小癪にも自分の必殺のチャージアップ
アタックを無効化してくれた仮面ライダー マホーク。

図に乗っているアイツを、今度こそ確実に下さねば、この苛立ちは
収まらない。
それなのに。

既に数回の《プット・オン》を経て最終形態に移行しているベルク・
フルマスクドフォームがここでひたすら苛立ちを堪えて待機してい
るのは、ひとえに格上のウカワームの力を恐れているからに過ぎな
い。

『こうなったらあ、「そいつ」を徹底的に引き裂いてやる！』

怒り狂う響音は、八つ当たりによる歓喜を夢想しながら、ひたすら
「その時」を待っていた。

そして「その時」は来た。

宙を薙ぐ一線。ライダーどもや少年のいる辺りへの、遠くからの投
射物である。

『いたア！』

《クロックアップ！》

スラップスイッチを操作。その投射位置を見切った響音は加速空間
の中、狂喜しながら脚部マスクドアーマーの跳躍力で以て、いくつ
もの建築物を足場として経由しながらその方向へと跳んでいった。

火場 弘司・2

少年へのライダーシステム引き渡しのタイミングは今しなかった

し、他に方法はなかった。

お互い殲滅戦必至のこの状況で、それは自らの位置をさらけ出す、スナイパーとしては致命の愚行にほかならなかったが、それを承知の上で、火場はクロスボウを使用して少年の元ヘライダーシステムを射出した。

『このタイミングで、俺を強襲できるのは、かつてウカワームに奪われたというライダーシステム』ベルク『しかない！』

そのベルクの強襲と同時に加速空間に突入したレディックは、そちらへと銃を向け即座に三点射した。

『まあぬけエエ！図に乗りすぎだよおまえエ！』

軽々と跳躍してそれらを躲すベルク。

『……！』

だが、冷静に、避けることのできない宙にいるベルク目掛けて斉射する火場。

『ヒヤアハハ！』

空中にいるベルクはベルトのゼクターを操作。

破裂音のような、一瞬だけ放たれた破壊音波が、レディックの光弾を対消滅させ、難なく着地した。

『ツクツクツク！待ちに待ったよ待ちくたびれたよお！オマエは一瞬で殺してやらないよお！じつくりとなぶってやる！』

ベルクは触覚の基部、両側頭部に設置されたグリップを取り外し、長大なフレキシブルレイピアを振りかざすと、レディックに仮借ない斬撃の嵐を見舞う。

『ぐううううう！？』

レディックゼクターをかざすも意味はなく、一瞬で全身の装甲をズタズタにされてゆくレディック。

『（そう。こうなることは、分かっていた！）』

自分が発見されることも、長い銃身では射線をあっけなく見破られることも、ベルクが中距離戦を得意としていることも、レディックに格闘能力がないことも、だが火場にとっては『ただの状況』。

目的を達成するにあたり、不利なことなどなにもないのだ。

伊達 新星・1

『ツツしやあああああ！』

ワーム・サナギ体に埋め尽くされた、長い長い道路を縦断しきったジェイルのマシンゼクトロン・アンプリファイは、急ブレーキをかけられ、アスファルトを長く長く削り抉りながらようやく停止した。
『ふしゅー。』

バイクから降りた新星は、半ば地面に埋まったバイクを引き抜き担ぎ上げてから反転し、再び地面に置く。

振り向いてみれば、ワームの大群がいた辺りからはだいぶ離れてしまっている。

『へっへっへ。なんつーか、もちっと小回りが欲しいよな。寂しくなんかねえぞ。』

誰にともなくぼやきながら、来た道を戻るべくバイクに跨がろうとした時。

数十メートル先の路上に、人影が立っているのに気付いた。
いや。

『へっ。出やがったな。』

それは、四肢五体を備えたヒト型ではあったが、昆虫めいた、節くれ立った赤黒い体躯、ジガバチの生態相を思わせる面貌。

似付かわしくない長大な西洋の突撃槍^{ランス}を携えていたが、それはワーム・成体であった。

その様相に似合わず知的な立ち居振る舞いのそのワーム。どうやら人間の記憶を擬態した、いずれ高位のワームであろう。

『わざわざ出向いてくれるたあな。じゃあ、やろつか。』

新星は、バイクに跨がろうと上げていた脚を戻し、そのワームの元へと歩いていった。

アモフィリアワーム・1

『かとう・ゆきたか加藤 雪鷹』という人間を擬態したアモフィリアワームは、ここでの敵と定めたライダーが、こちらへと歩んでくるのを見て鷹揚にうなずいた。

『感心なことよ。真つ向から勝負を受けて見せるか。それでこそ我が相手にふさわしい。』

その姿をばやかせ、人間・加藤 雪鷹の姿に擬態する。現れた、短髪の好青年然とした男は、その長大な突撃槍・ウカワームより下賜されたライダーシステムのイクイップデバイス『ディガードランス』を槍術の型に倣って振り回し構えをとると、空いた手を宙にかざした。ジョウントを抜けて飛来してくる黒いハチ・ディガードゼクターをその手にキャッチし、ディガードランスの中ほど、円錐形の穂先の根元にあるセットアップホルダーに、尾部を穂先の方に向け設置する。

『変身！』

《ヘンシン！》

認証音声と同時に、槍を握る手から全身へ、順次ハニカム構造状に展開形成されてゆく漆黒の装甲。

そこに現れたのは、黒地に赤ラインで構成されたザビー・マスクドフォームに酷似した、『仮面ライダー ディガード・マスクドフォーム』の姿であった。

変身した自分の姿を認めたのだろう、アイスグリーンのライダー・ジェイルは歩みを止め、半身でゼクターに覆われた拳を構えた。

『その意気やよし！キャスト・オフ！』

続いて、ランスのディガードゼクターに手を添え、丸ごとスライドさせた。

ディガードゼクターの尾針がランス穂先の根元の孔に突き刺さり、
アーマーパージのためのチャージアップが始まる。

ディガードのマスクドアーマーが部品単位に分割されて次々と跳ね
上がり。

《キャスト・オフ!》

吹き飛ばされるマスクドアーマー。

《チェンジ!ディガー・ワスプ!》

あとに現れたのは、漆黒に赤ラインで構成された、やはりザビーに
酷似した軽装甲、だがまるで血管のように全身を走り回る赤いブラ
ッドベゼルが特徴的な『仮面ライダー ディガード・ライダーフォ
ーム』の姿。

『聞けい!そこなライダーよ!我が名は加藤 雪鷹!麗しきマミヤ
レイナに仕えし!』

『なあとゴチャゴチャ言つてやがんだあああ!?!』

だが、ジェイルは加藤の前口上を無視して突然突進してきた。

『盾となり槍となつてつて貴様ああああ!?!』

ジオフィリドワーム・ベルジアン・1

『ふ、ふ、ふふふはははははは!』

停止して、やがて大笑いする松永。というよりも長大な連接戦車。

その巨体が通過した跡にはもはや、瓦礫しか残らない。

『どうれ。この中に集まっているという人間どもも始末するか!』

周囲のビル群を見回して、命令の最終目的を果たすべく胸元に右手
を添える。

袈裟懸けに装着されているホノカグツチの頭部甲殻を、上へスライ
ドさせた。

アーマーパージのためのチャージアップが始まり、カグツチのマ
スクドアーマーがパーツ単位で次々とせり上がってゆく。

それだけでなく、後ろに接続されたコンテナユニットも、一基ずつその隙間を広げ、連結器を解放してゆく。

『キャスト・オフ。』

そして左手で上からホノカグツチの頭部甲殻を下げ戻した。

その全身を、コンテナの最後尾まで電光が走り回る。

他のライダーシステムに比べ形態の移行にいちいち時間がかかるのが弱点ではあるが、それを補って余りある機能がカグツチには秘められている。

《キャスト・オフ!》

マスクドアーマーが吹き飛び、コンテナユニットがめいめい四方八方へ散ってゆく。

《チェンジ! B・G・センチピード!》

そこに現れたのは、まるでアイスホッケーのゴールキーパーのような巨大な甲冑姿。袈裟懸けに巻き付いたホノカグツチに加え、腕脚を覆うムカデの節のような凹凸のある分厚いプロテクター。至る所から生えている短剣のような無数のトゲ。アメフト選手のヘルメットめいた頭部の広い面積のゴーグル部からは、赤く光る無数の眼が見え隠れしている。

戦車のようなだったマスクドアーマーが排除されても、ちっとも小さくなったように見えないその異様こそが『仮面ライダー カグツチ・ライダーフォーム』の姿であった。

『《トツカノツルギ》起動!』

その声に応え、分解消滅せずにあちこちに放置されていたコンテナユニット、いや、自律稼働支援・攻撃ユニット《トツカノツルギ》が全て、その四脚を地面に突き立て次々と立ち上がった。

これらの自律ユニットによる支援戦闘によって単独で一個中隊の戦力を構成できることが、カグツチシステムの最大の強みである。

『《ヤクサノイカヅチ》、発射!』

その指令に、全ての《トツカノツルギ》の上面ハッチが開き、顔を

出した無数の円筒・マイクロミサイルが一斉に発射された。

それらは、まず一直線に上昇してゆく。しかるのち、旋回して急降下、辺りに降り注ぐ手筈だ。

『ふ、ふ、ふ。……む？』

その様子が満足していたその時、そこに、いつの間にかクライプ・マスクドフォームが立っているのに気付いた。

『……！？』

まるで気配がしなかったため、そこに現れたことに気付けなかったことを松永はいぶかしんだ。

奇妙なことは、それだけではない。

クライプは、こちらが気付いたにも関わらず、なんら行動しようと思わず、それどころか相変わらず気配というものを現さない。もはや意味がないというのに。

『ふ！』

《クロックアップ！》

スラップスイッチを操作し、加速空間に突入。

『おおお！』

背後から、ねじ曲がったゼクトクナイガン・アックスモードを振り下ろしてくるクライプ・ライダーフォームが現れた。

『むっん！』

前腕の巨大なプロテクターを、その斧に向けて振り上げる。激突。

千切れ飛んだのは、しかしなぜかすでにねじ曲がっていたゼクトクナイガン・アックスモードの先半分であった。

台場 和馬・1

《トツカノツルギ》には通常ではクロックアップ追従機能がないため、空中のマイクロミサイルともどもすべてそこでほぼ停止してい

る。

千切れ飛んだゼクトクナイガン・アックスモードの先半分も、シス
テムの制御を離れ空中で静止した。

『ふ。思いの外長持ちしたほうか。』

『どうした。それで終わりか。』

『言うに及ばず。』

手の中に残ったグリップを放り棄て、大きく振りかぶった右拳を、
目の前のカグツチの胸郭に叩き込む。

『ふぬうううう！？』

全身に力を込め、衝撃に耐える松永だが、踏みしめる足が地面を擦
り削り、その身がわずかに後退した。

『……ほう。』

堪え切った松永の様子に、感嘆の声を漏らす和馬。

今度はカグツチが右拳を振り上げた。

『ぬううん！』

巨大な拳がクライプの胸郭に激突する。

『おおおお！？』

こちらも腰を落とし全身で受け止めたが、強烈な衝撃に、クライプ
の巨体もわずかに押し返された。

『……ふん。』

『やるな。ひさびさに骨のある輩よ。』

防御体勢を解きつつ、どこか満足げに呟く和馬。

『貴様こそ。敵であることが惜しくてならんわ。いや、相まみえた
ことが僥倖か。』

『同感。』

互いに拳をかざして構え。そして再び攻撃の応酬、超重量級ライダ
ー同士の戦闘が始まった。

剣を右手に下げたまま、亮介は立ち尽くしていた。

『よく聞け。それは、人間の能力を倍化させる強化服の発振器だ。それを使えば、おまえも変身することができる。あのワーム……化け物に対抗することができる。』

『赤とんぼ』の言っていたことを思い出す。

「（これであの化け物たちを、やっつけることができる？）」「
今まで自分を騙していた、春瑠を？」

意図せず連想したことを、頭を振って追い払う。

「（ちがう……、違う！）」

害意を持ち、剣呑な台詞を口にし、人を、自分を襲った化け物。そんなものと、いままでそばに居た春瑠が同じものか！？

「……………！？」

わからない。迷いを自覚し、力なく認める。

「……………どうしろってんだよ……………」

そこに。突如瓦礫の山を粉碎して赤い異形が飛び込んできた。いや、まるで吹き飛ばされてきたかのようにごろごろと転がってくるそれは、その途上で色味を赤一色から黒と紫とオレンジに変え小柄な人影となつて亮介の足下へ到達して停止した。

枕木 春瑠だった。

「……………あ……………」

苦しげに眉根を寄せて昏倒する春瑠。

すぐにかがみ込んだ亮介だが、手を伸ばすことができなかった。

『おや。少年。こんなところに。』

残りの瓦礫を蹴散らして続いて現れたのは、上半身のついた巨大な灰色のタカアシガニの化け物。

まるで別物に変貌していたが、声とそこか似た形状で気付いた。あの喪服ドレスの変貌した化け物と同じ個体だということに。

「……!？」

『その少女が心配ですか？少年。滑稽なこと。』

「!？」

ほほと嘲笑するその化け物に、亮介は反射的に眉をしかめた。

『まあ。お気に障りました？ ついでですから、お教えしましょうか。わたくしたちが何者なのかを。わたくしたちを知る人間は、『ワーム』と呼んでいます。サナギから、脱皮して成体となり、擬態して潜伏する、虫と同じ習性からつけられたそう。え？なにに擬態するのですって？』

長広舌をぶち始めた化け物は、訊きもしないのにまるで亮介の疑問のようにそのあとを継ぐ。

『人間に、ですよ？遠い宇宙の彼方からやってきたわたくしどもは、現住生物に成り替わり、オリジナルを殺してその立場を入れ替える衝動がございますの。なぜと問われましてもお答え致しかねます。異性を見かけた発情期の動物のごとく、それがわたくしどもの本能。』

その化け物の顔面の下半分こそ人類女性の口元のような形状をしていたが、そこはしゃべる間も微動だにしない。

だが、化け物がこちらを嘲る気配だけはまるで目に見えるほどに露骨であった。

『ですが、困ったことが起きましたの。わたくしどもが人間に擬態する際、その記憶までもを写し取るのですが、自殺願望を持った人間に擬態した個体が、擬態するなり自殺をしてしまいましたの。これは一大事。まるで種に対する選択毒性。そこで、このことを調査するために作られたのが『自殺倶楽部』。あなたのような自殺願望を持った人間を集め、安楽死手段と引き換えに擬態元を得る。その後の個体の経過を調べるためにね。……そこに転がっているのは、目の前で自殺した少女の姿と記憶を写し取り、次なるサンプルを採取するためにあなたに近づいた、わたくしどもの仲間ですよ？』

もつとも、少年ともどもとうに用済みですけれど。』

その言葉に、横たわる春瑠の顔を見下ろす。

「……亮介……」

「!？」

春瑠が、覚醒した。

「……亮介……ごめんね……」

「……ほんとう、なの？その……」

「……うん……」

「……!？」

衝撃に視界が揺れる。

「……」

「……でもね、」

口を開きかけた亮介を、春瑠が苦しげに声をあげて遮った。

「……最初は、ただの命令で、亮介のここに来たの。……でも、亮介、優しいから、わたしの中の『枕木 春瑠』の記憶は寂しかったから、亮介、優しくったから……」

こちらを見つめたまま、涙を溢れさせる春瑠。

「わたしも一緒にいたいよ？でも、亮介に死なれなくなかったから、『AA』であんなこと言っちゃって、ごめん。でも、このまま関わらせちゃ、いけないと思って……」

「……!」

あの時からの態度の矛盾。赤い化け物の行動に、ようやく合点があった。

亮介の心の中で、瓦解して脱落したいくつかのパーツがぴたりと元の位置に復元した。

ゆつくりと、灰色の化け物を睨み上げる。

『さあお話はこれまで。用済みになったおふたりは、せめて一息に始末して差し上げます』

「うるさい!」

『！？』

絶叫した亮介は、かざした紫色の剣のグリップのトリガーを引いた。
《スタンバイ！》

『それは！？』

響き渡る音声と発信音めいた音。

同時に、地を貫いてそこに機械仕掛けのサソリが現れた。

それは迅速に召喚者たる亮介の身体を這い上がると、首筋にその尾針を突き刺した。

「あ痛！」

体内にじんわりと広がる冷たい不快感。だがそれは迅速に熱さへと変わって全身を駆け巡る。

続いて亮介の右腕を駆け降りたサソリは、その手に握る紫色の剣の背面の溝に、自らまたいで収まった。

『どんな人間だろうとシステムに適合させ変身させることができる
というマスクドライバーシステム。』

『ゼクターの生成する『ポイズンブラッド』を投与するという前準備
が必要だが、それは対象の血中酸素濃度を上昇し体内組織を活性化
させ疑似的に適合資格者にふさわしい超人へと導く。』

『そうして対象を疑似資格者としたサソリ型ゼクターは、自らイクイ
ップデバイスと合体する。』

《ヘンシン！》

認証音声と同時に、デバイスを握る右手から全身へ、順次ハニカム
構造状に展開形成されてゆく装甲。

黒地のスーツにヴァイオレットとアンバーで構成された甲冑。

全身を這い回る無数のオレンジ色のチューブと言い、ホラー映画の
殺人鬼めいたフェイスパーツと言い、ぶら下げた剣と相まって禍々

しさ大爆発のその姿こそが『仮面ライダー サソード・マスクドフォーム』の姿であった。

数寄屋 亮介・3

『……………！？』

自らの身に起きたことに驚愕する亮介。

かつて見た大男と暴力男の見せた不思議な鎧の力が、身に付けることでようやく実感できた。

生身では感じえなかった精細な視野、広い聴域、空間感覚。全身にみなぎる力。

ライダーシステムの中の、装着者をサポートする補助知能が亮介の意識と直結し、様々な情報を亮介の記憶のものとする。

初めて説明もなしに変身したにも関わらず、今の亮介はまるで箸でも使うかのようにライダーシステムを扱うことができる。

これなら！

『やああありやああああ！？』

『！！？』

瞬時に肉迫するサソード・マスクドフォーム。

体捌きも歩法も、剣の扱い方も全て、補助知能が教えてくれる。

生身では考えられないほどの確な動作で亮介は剣を灰色の化け物に叩き込んだ。

増幅された腕力による斬撃によって、派手に瓦礫を巻き込み崩れかけた壁を砕いて吹き飛んでゆく化け物。

瓦解したコンクリート塊の山に埋もれ、その姿が見えなくなる。

剣を振りきった構えを、解く。

亮介は振り向いて、ゆっくりと春瑠の元へ歩み寄った。

『……………』

「……。あはは。なんかそれ、ハロウィンみたいだね。わたしと、おそろい。」

言われて、自分の格好に気付く。

言われてみれば確かに、サソードのマスクドフォームは春瑠の衣装と全く同じカラーリングだった。

『……。』

「……はは。……うん。いいよ。亮介がライダーだったなんて驚いたけど、亮介に殺されるなら。亮介には、そうする権利があるよ。」
明らかに無理をした笑顔を浮かべながら、寂しげに呟く。

「……ごめんね。やりにくいと思うけど、擬態しちゃうと、ワームの姿でいるほうが苦痛なの。特に今、身体キツくって……」

静かに瞳を閉じる春瑠。

「……でもね、きつと、本物の春瑠が亮介に出会っても、きつと亮介のこと好きになったと思うよ。」

亮介は動かない。
しばしの静寂。

『……。』

『わたしに相談した時点で、亮介の中では答えが出ているのではないかね?』

『おう。ガツンと「好きだ」って言っちゃまえ。』

かつて相談した、大人たちの無責任な言葉がこだまする。

『……俺は、春瑠が、好きだ。』

「!?!」

唐突な言葉に目を見開く春瑠。

『なにがあつて、こうなつたのかは知らない。でも、今まで一緒にいたのはここにいる春瑠だし、その、ワームだったとしても、春瑠の心は春瑠だし、えと、』

言葉の最後で無表情なはずのサイクロプスコープが亮介らしくうろたえる。

「だ、だめだよ!? 本物の人間の春瑠は、もう死んじやつたの! ここにあるのは、ワームの中にコピーされた記憶の残滓だけ! わたしは幻なの! ワームを認めちゃ、だめだよ! ?」

慌てふためく春瑠。

『でも、ここにいる! あいつらとは違う! 記憶なんて! 心だつて、ここにあつて、こうして話もできるのに!』

「亮介……」

『汝の為したいように為すが良い。』

『好きにすればいいでしょう。』

『ほかに言うことなんかねえよ! ?』

『……! ?』

頑なな春瑠の言い草に、もどかしくなつた亮介の脳裏を、再び彼らの無責任な台詞が駆け巡る。

だが今、亮介はあの言葉たちの真意をようやく直感した。

『パートナーなんだろ! ? 最期のその時まで一緒にいるんだろ! ?

……ああもう! 嫌だつっても、連れていく!』

堰を切つた叫びに自分で驚きながら、それでも亮介ははつきりと言ひ切つた。

『……! ?』

「りようすけ………」

『……行こう。一緒に。』

「……………うん。」

泣きながらうなずく、未だ身を起こせない春瑠に歩み寄る亮介。
ゴトリ。

『！？』

聞こえた異音に、亮介はあわてて身を翻した。
その瓦礫の山が動く。

巨大なコンクリート塊を高々と持ち上げ、瓦礫を蹴散らして立ち上がってきたのは、先ほどの灰色のタカアシガニの化け物。

『ギリイイイイ！？』

岩盤を脇へ放り棄て、異様な奇声を発するワーム。

『こいつ！？』

『ツブシテヤル！？ カトウセイブツノブンザイデ、ナマイキナ！
？ ヒキサイテヤルウウウ！？』

t o b e c o n t i n u e d .

最終話（前書き）

こちらは、基本的に鉄槻オリジナル&借用オリジナルキャラクターでのみ構成される『仮面ライダー カブト』の外伝的ストーリーです。世界観に若干のズレがあるほか、原作のキャラクターはほとんど出てきませんので御注意下さい。

最終話

『逃げて！逃げて下さい！』『こっちです！』

「やだああああ！？」「離せ！離せよおおお！？」「嫌だあ！？
ここで死ぬのおお！？」

無機質なビルの中のアちこちで、白っぽい装甲服の一团、あるいは
銀色の装甲服の一团に誘導・救出されてゆく人々。

いや、ほとんどが半ば引き摺られるようにして連れ出されるその光
景は、どちらかと言えば『強制連行』と言ったほうがいつそ近い。

「触らないで！？」ほっというてよお！？」「来んなよ！？」なんだ
よおまえら！？」

『こら！いいから立て！出ろ！』『いいからおとなしく……、おい、
そっち持て！』

自ら死に赴こうとする人間を護るという非常に困難な任務に悪戦苦
闘するネオトルーパー隊やアクトルーパー隊。

『ギリイイイイイイ！』

奇声をあげて、後脚四脚で立ち上がり、残りの全肢で攻撃を仕掛け
るマクロケイラワーム。

『くううううう！？』

迎え討つサソードシステムは、その攻撃全てを見切り、的確なガー
ドラインを装着者である亮介に示して見せ、亮介もそれに合わせ
的確にサソードヤイバーを振るい全ての攻撃を打ち払ってゆく。

『うおおおおお！？』

『こおおの無礼者おおお！？』

『知るかこの唐変木！？』

接近戦を挑み懷に飛び込んでくるジェイルに対し、横にしたディガードランスを棒術の要領で扱いながらその攻撃をしのぐディガード。『貴様のその不作法、騎士の、男の、ライダーの風上はおるか風下にも置けぬ！』

『うるせえッ！？ 勝手にヒトの置き場所を決めんじゃねえ！』

右から、左から、旋回してくるディガードランスの殴打をそれぞれの腕でブロックするジェイル。

『ぬんっ！』

間髪入れずに放たれた蹴り。

『チイツ！？』

即座に上げたひざで受けつつも、体勢を崩され、ジェイルは後退を余儀なくされた。

『クッソ！？』

そしてその距離は、こちらの拳が届かず、相手の槍が届く範囲。

『ハアッ！』

繰り出される紫電の刺突。

『うおお！？』

瞬時に三度。あびせられた突撃に装甲の各所で火花を散らしながら吹き飛ぶジェイル。

『せめてこの一撃で引導を渡してくれる！死出の旅路でバカのひとも治してくるがよいわ！』

振りかざしたディガードランスのゼクターに手を添えるディガード。ディガードゼクターを引き戻し、再びスライドさせ、その尾針をランスの孔に突き刺した。

ディガードゼクターより生成されるポイズンブラッドとチャージアップされたエネルギーが混じり合う。

『てめえコラ。いまバカつつたか！？』

ゆらりと立ち上がったジェイルは、右拳のジェイルゼクターをスライドさせ拳の上に被せる。

響き合う二基のチャージアップ音。

決着に向け対峙する、水平に槍を構えるディガードと、背面装甲を展開させ拳をかざすジェイル。

火場 弘司／小早川 響音

『（そこだ！）』

フレキシブルレイピアのまるで竜巻のような波状攻撃の中に見出した隙へ飛び込むレディック。

狙撃のために特化された強力な動体視力は、フレキシブルレイピアの軌道を読み切りベルクへの道を拓かせた。

『なにイツ！？』

驚愕するベルク。

だが、駆け寄るレディックにもチャージアップしている暇はない。チャンスは一瞬。

『避けられるのなら、確実に当てられる距離まで近づくだけのこと！』

レディックは、走りながら左手で銃身の銃口付近を握り締めた。

レディックのチャージアップアタック《ライダーズナイプ》において射出される強化光弾は、レディックゼクター腹部のシリンダーに既に充填済みカートリッジとして六発装填されている。

そしてその強化弾は、実はいつでも選択して撃ち出すこと自体は可能なのだ。

ただ、その激発が強力過ぎて、チャージアップによる身体強化がなければ、発射した瞬間ライダーが銃を支えきれないだけで。

『チイイイ!?!』

響音は迷った。

懷に飛び込んでくるレディックに対し、このままフレキシブルレイピアで攻撃するのか、剣を棄てチャージアップアタックを使うのか。だがそれは既に致命の一瞬。肉迫したレディックの銃口が、胸の真ん中に押し当てられた。

『くらえ!』

弾種をチャージアップカートリッジに変更。

両手で銃の前後をガッチリと保持し、火場はトリガーを引いた。

二体の間で炸裂する巨大な爆発。それはベルクのみならず、当のレディックをも吹き飛ばした。

『アアアアア!?!』

宙を舞った紫色のマスクドアーマーは火花に全身を包まれたまま、そのまま屋上の縁を越え、はるか地上へと落下してゆく。

反対側へ吹き飛ばされたレディックも、屋上の機材を巻き込み転がってゆくが、やがて仰向けに停止した。

『……………』

同様に火花を散らすレディックの身体。強化弾の発射は、それほど射手自身にも負荷をかけるのだ。

『……………だが、生き残った……………』

呟くが、煙をあげるレディックの身体は動かない。

台場 和馬／松永 弾

『ぜえええい!』

『ぬうつうん!』

ドカン!ガキン!と、まるで交互に岩でも割るようにどつき合う二体の巨体ライダー。

なにしろ互いに『今度こそこの一撃で倒す』勢いで拳を繰り出している。小細工を弄しては相手の攻撃を受けきれない。互いに承知しているからこそこの戦い方である。

『……ふん。互角か。これではキリがない。』

やがてカグツチがぼやいた。

『……そうでもない。いずれ最後に立っているのはわたしだろう。』

『……ほざけ。これが任務でなければ、もうすこし戯れてやりたいところだが、残念だ。』

うめくと、カグツチは胸のホノカグツチの頭部甲殻を上スライドさせた。

『む?』

チャージアップが始まり、電光が迸る。

だが、カグツチの電光は、ライダー本体にのみならず、なんと四方八方へと放射された。

『これは!?!』

その電光は、やがて通常の時の流れに置き去りにされていたコンテナユニット《トツカノツルギ》全基に纏わり付いた。

するとなんと、それら全てのコンテナユニットが、四脚を蠢かせ『通常の動作で』動き出した。

『ライダー・テンペスト!』

叫び、上げた左手でホノカグツチの頭部甲殻を下げ戻すカグツチ。

《ライダー・テンペスト!》

チャージアップエネルギーを受け、なんとコンテナユニットまでが加速空間に侵入してきた。

チャージアップエネルギーにより、限定的に加速能力を得たコンテナユニット《トツカノツルギ》全基によってカグツチを中心に完全な連携総攻撃を行う。これがカグツチのチャージアップアタック《ライダー・テンペスト》である。

迅速に駆け接近してくる《トツカノツルギ》。

走りながら、開放されたハッチから生やした砲塔による砲撃を行う。

『うおお！？』

着弾の衝撃に後退するクライブ。

そして、別方面から突進してきた数基の《トツカノツルギ》が、クライブを撥ね飛ばした。

伊達 新星／加藤 雪鷹

『ライダーチャージ！』

『ライダー・チャージ！』

二体は、それぞれ同じチャージアップアタックの名称を告げた。

《《ライダー・チャージ！》》

認証音声が重奏する。

ジェイルが、背面装甲の下から虹色の光芒を吹き出し、その身に急加速をかけさせ飛び出した。

ディガードの構えるランス先端から、円状の赤い光が波紋のように幾重にも現れ、ディガード本人を包む直径となつて高速で後方へと流れてゆく。

それは強力な磁場を形成するもの。その光の輪によるトンネルをレールとしてリニアフロートを構成したディガードはその身を浮上させ、ジェイルへ向けて一直線に加速した。

『でやあああああ！』

『ぬおおおおお！』

互いに真つ正面から突撃する虹色の流星と赤い螺旋。突き出した虹色の拳と、赤い円錐の穂先が激突した。

ガガキイン！

甲高い雷鳴のような音を響かせ、両者は同時にそれぞれの方角へ撥ね飛ばされた。

『ふうふう、やるな！だがまだ！』

『ケッ！猿真似が！だがこの威力まで真似できるか！？』

投げ出されたジェイルとディガードは一回転して体勢を建て直し、両者とも再び同時に虹色の、赤の流星と化して突撃する。

『おおおお！』

『やあああああ！』

激突の瞬間。

ディガードランスが、虹色の拳よりも先にジェイルの頭を捉えた。

『（勝った！）』

勝利を確信した瞬間。

ジェイルの頭突きがディガードランスを弾き飛ばした。

『なに！？』

槍を逸らされ体勢を崩したディガードの顔面に、虹色の巨大な拳が突き刺さった。

ジェイルの加速に加え、相対するディガード自身の加速がその威力を上乗せし。

『おおおりやああああ！？』

そのまま黒い身体を引き摺ったジェイルの拳が振り抜かれ、ディガードはまるで砲弾のように吹き飛ばされ、向かいのビルに壁を砕いて飛び込んでいった。

数寄屋 亮介・1

『ギリイイイイイ！』 『ほほほほほほ！』

高音のうがいのような奇声と女性の嬌声を重ねて発しながら繰り出される鉤爪の乱撃を必死に捌き続ける亮介。

途切れることのない雪崩のような斬撃を片っ端から打ち返してゆく。

『ぐううううこんにやるおおおお！？』

もはや自分の腕がどう動いているのかすら把握できない。

背後には身動きの取れない春瑠が横たわっている。後退は許されない。膠着状態である。

『なんとかしなきゃ!? なんとか!?!』

亮介の意識と直結したサソードシステムの補助知能が瞬時に幾通りもの戦術を検索し開示する。

その中の、ある項目に亮介は着目した。

『これだ!』

マスクドアーマーに接続された無数のオレンジ色のチューブ・ブラッドベゼルが蠢き、爆発するような勢いで伸長・展開された。

『ギリイイ!?』『虚仮威しを!?!』

のたうつブラッドベゼルは迅速に灰色のワームに殺到し絡みつぎ、縦横に束縛してゆく。

『ギリイ!』『なんです!?!』

全ての支持肢を束ねられ、拘束されるワーム。

『うおおお!?!』

そして思考トリガーに応じて頭頂部のサソードアンテナが稼働。

ブラッドタンクより汲み上げられたナノ粒子構造体とその水溶液の組成を変更。対ワームの毒性を付与されたポイズンブラッドを先端から滴らせるサソードアンテナをまっすぐ伸ばし、ブラッドベゼルをたぐり寄せ灰色のワームを引き寄せると同時に頭突きの大要領でそれを突き刺した。

『ギリイイイイ!?!』

脚のひとつの付け根から注入されたポイズンブラッドは、灰色のワームの身体を自由を奪ってゆく。

もがく動作が次第に緩慢になってゆくマクロケイラワーム。

『いまだ!』

ブラッドベゼルでワームを拘束したまま、亮介は剣に合体したサソードセクターの尾をレバーのように倒し込んだ。

アーマーパージのためのチャージアップが始まり、マスクドアーマ

ーがパーツ単位で分割し次々とせり上がってゆく。

『き、キャストオフ!』

《キャスト・オフ!》

そして一斉に弾け飛ぶマスクドアーマー。

《チェンジ! スコーピオン!》

あとに現れたのは、まるで紫色のサソリが全身に巻き付いたような軽装甲。特徴的なサソリの尾を角としたフェイスパーツ。『仮面ライダー サソード・ライダーフォーム』の姿。

『クロック、アップ!』

《クロックアップ!》

ベルトのトレーススイッチを操作して加速空間に突入するサソード。

『こ、小癪な……!?!』

マクロケイラワームも同時に加速状態に入る。

だが、絡みつくサソードのアーマーパーツ、ブラッドベゼルが相変わらずマクロケイラワームの動作を阻害する。

毒に冒され動きを鈍らせた脚で、そのチューブを振り払おうとするが、通常の時の流れに置き去りにされたそのアーマーパーツは、物理法則の異なるこの加速空間においては、まるで粘液のようにその脚に纏わり付いてきた。

『ギリイイイイ!?!』

身体が思うように動かない。苛立ち混乱したマクロケイラワームは絶叫した。

『うおおお!』

そこへ、サソードが跳躍した。

倒し込んだサソードゼクターの尾を引き上げ、改めて倒し込み、その剣を振りかぶる。

ゼクターの供給するポイズンブラッドとタキオン粒子が変換されたエネルギーが混ざり合い、液体じみた光となって刃から溢れ出した。

『おおお!』

『おまえのような、下等にイイイイ!?!』

高みから瀑布のように殺到する斬撃。

『おおお！』

迅速にその巨大な影を通過してゆく刃。そして着地。

とばちや、と余剰のポイズンブラッドが飛び散った。

マクロケイラワームの灰色の巨体が、ゆっくりと唐竹割りとなつて、左右に傾いてゆく。

そしてそれは、倒れきるまえに緑色の爆炎と化した。

松永 弾

『ふ、ふ、ふふふはははは！』

遠くで倒れ伏すクライプを眺め、十数基の《トツカノツルギ》に囲まれ歓喜するカグツチ。

《クロツクオーヴァ》。

通常の時の流れに置き去りにされていた、上空の上昇中だったマイクロミサイル群が、再び上昇してゆく。

『ふん！俺の前では全てが塵芥と化す！カグツチは単騎にして軍！貴様ひとりの腕っ節など物の数ではないわ！』

だがその瞬間、背後から強烈な斬撃がカグツチを襲った。

『……！？』

たまらず転倒し両手をつくカグツチ。

『奇遇ですね。私も似たようなことを信条としているんですよ。』

『……！？』

背中の激痛を堪え振り向くが、そこには何者の姿も見えない。だが声だけはまるで目の前にいるかのように聞こえてくる。

『私は王にして城にして兵。いかなる侵略も許しはしません。』

ふ、と出現する奇形の人影。

まるで穴だらけになったかのようにあちこちを欠落させたヒト型。それは。

『……そうか。完全迷彩。貴様のことをすっかり忘れておったわ。』
『失礼ですね。』

通常ですら、部分的完全迷彩機能を発揮する『仮面ライダー マホーク』。それは『クリスタルディバイン』によって成された奇襲であつた。

『クライプ！いつまで寝てるんですか！？ 人質の誘導は完了しました！とつとと片付けちゃってください！』

『なんだと！？』

その声を受け、クライプがゆっくりと起き立ち上がった。

台場 和馬

『……天が呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ。人はソレを幻聴と呼ぶ。ヒトを喰らう悪逆の徒を殲滅せんと、己の意志にてここに立つ。聞け異形の者よ！我が名はちやぶ台のある場で和む馬！……いや、忘れる』
差し上げた指先をおろして居住まいを正すクライプ。

改めてかざされた手には、いつの間にかゼクトマイザーが握られていた。

タッププレートを押し、扇子のように展開される四基のマイザーロード。

それと同時にジャカ、と音を立てて超小型のセミ型メカ、クライプマイザーが頭を出した。

そしてぞくぞくと射出されてゆく無数のクライプマイザーの群れ。それらは迅速に四方八方へ展開され、全ての『トツカノツルギ』に取り付き、あるいは付近に滞空し、上昇したマイザーは、折り返して降り注ぐマイクロミサイル群を待ち受けた。

『破滅など、わたしの手の届くところで看過できるものではない。いぎ、食い止めてくれよう。』

思考トリガーによって召喚されたマシンゼクトロン・アンプリファ

イが、クライプの元へ自律走行してきた。

クライプは目前で停車したそれにまたがると、その場でターンをかけ、ミサイル群の来る方角へと急発進していった。

『ぬうつうつ！』

瓦礫の散乱する道路を駆け抜ける。

そこへ、三基の《トツカノツルギ》が立ちはだかった。

『ふん。』

和馬は進路を変更すると、道端に立てておいたクライプのマスクドアーマーを通りすぎりに掴み取り、再び弧を描いて《トツカノツルギ》へと向かってゆく。

『ぬうん！』

そして足首を掴んだマスクドアーマーを振り回し、《トツカノツルギ》の一基目を殴り飛ばした。

二基目も同様に殴ってどかし、そして三基目の《トツカノツルギ》めがけてマスクドアーマーを投げ飛ばした。

強烈な衝撃に、一瞬その動作を止める《トツカノツルギ》。

クライプのマシンゼクトロン・アンプリファイは、マスクドアーマーが立て掛けられた《トツカノツルギ》をジャンプ台として駆け抜けた。

『うおおお！』

上空へ、今しも地上へ降り注ぐという無数のマイクロミサイルの群れに向かい大きく跳躍してゆくマシンゼクトロン・アンプリファイ。

ハンドルから離れた右手でベルトのレバーを引き、ゼクターがくると裏返る。そしてハンドルを握る左右の手を交換し、ゼクターの翅を引いてチャージアップ。電光が全身を這い回ると同時、バイクのコントロールパネルに出現するスイッチを叩き付け。そこで再び左手がゼクターの翅を押し戻した。

『ライダーソニック！』

《ライダー・ソニック!》

電光がゼクターへ殺到し。

そして炸裂する無数の弦楽器を一斉に引っ掻いたような騒音。

それに連動してマシンゼクトロン・アンプリファイのボディ表面が

《ライダー・ソニック》に共鳴し、増幅し、放射する。

そこに無数の管楽器によるような騒音が加わり膨大に増幅された《ライダー・ソニック》が、迅速に効果範囲を蹂躪した。

クライプとマシンゼクトロン・アンプリファイを中心に全方位へ炸裂する《ライダー・ソニック》。

その音波にクライプマイザーが巻き込まれたその時、クライプマイザーまでもがその音波に共鳴し、それを増幅し、そして放射した。

水面の波紋のように連鎖して拡がる破壊音波。

散開するクライプマイザーに接触する度に、加速度的にその効果範囲を拡げてゆく。

破壊音波に触れ、片端から自壊してゆくマイクロミサイル。次々と

破壊音波の範囲に飛び込み爆発、消滅してゆく。

破壊音波は地上にも及んだ。

クライプマイザーに取り付かれた《トツカノツルギ》も次々と自壊してゆき、分解、消滅してゆく。

『ライダー・カムシン!』

《ライダー・カムシン!》

ゼクターのスロットルボタンを押し込み完全に姿を消すマホーク。

『ぐおおお!?!』

そしてその場に残されたカグツチも破壊音波に巻き込まれた。

瓦礫の街の各所で爆音が轟く。

無人の半壊したビルが止めを刺され、片端から瓦解、崩落してゆく。上空のマイクロミサイルもぞくぞくと破壊音波に飛び込みその数を減じてゆく。

まるで山が隆起するかのように舞い上がる砂埃に、全てが巻き込まれやがてなにも見えなくなっていた。

曲月 七彦・1

「……へっ。どいつもこいつも、みんな死んじまえばいいんだ。くだらねえ」

曲月 七彦は悪罵を吐きながら、集団自殺の開催地とした廃棄街から遠ざかる道をせかせかと歩いていった。

「イヤツは、死んだヤツだけさあ」

黒縁メガネの位置を直しながら適当に口ずさむ。

だが実際、生きているヤツに『イヤツ』はひとりもいなかった。

すべてが七彦を否定し拒絶する、物分かりの悪い愚か者ばかり。なぜ誰も自分を認めようとしないのか。

七彦は、かつてこの世を夢み自殺を試みようとしたことがあった。

星空も霞むほど痛烈な地上の光の洪水を見下ろしながら、そろえた靴を置き去りにして細い人影は冷たいコンクリートの絶壁へと足をのせた。

どうしてこうなってしまったのだろう。浮かぶ思いは、後悔ではなく、諦観とこれからの道行きの確認。

べつに未練もなにもない。ただ早く楽になりたい。それだけ。

吹き荒ぶ高所の強烈な寒風にはためく上着の裾もそのままに、人影は泳ぐように向かい風へと身を蹴り出した。

高層ビルの屋上から投身した青年の身体は、130メートル下のアスファルトに激しく叩き付けられ、直後緑色の炎を撒き散らして爆発した。

あとには塵ひとつ残らない。

その光景を、『自分が飛び降り自殺をしまった光景』を、ビルの屋上でみつともなく尻餅をついたまま七彦は呆然と見送っていた。自殺をしようとした七彦の側に突然『俺が替わりに生きてやるよ』と現れた『もう一人の七彦』が、仰天する七彦を尻目に唐突にビル屋上の縁に立ち、飛び降りてしまったのだ。

そこへ現れた女性、藍川 舞菜が『ワーム』のことを教え、『自殺倶楽部計画』のを持ち掛けてきた。

曲月 七彦・2

『イヤツ』は、口を閉ざし七彦を拒絶も否定もしない死体だけ。だが、舞菜だけは七彦を認め、あまつさえ『ご主人様』とまで呼んでくれたのだ。

そして知ったワームの存在。

『自分が、この世界を改変できるかもしれない』。自分のことを認めようとしないうちにこの世界を変革できるのだと知った七彦は狂喜し計画に邁進した。

それはおおむね順調だ。

この集団自殺で登録者のほとんどがいなくなってしまうが、それからどうするのか、七彦はあまり深く考えていなかった。

せかせかと歩く七彦の前に、男が現れ立ち塞がった。

黒いスーツを着こなし、頭にバンダナを巻いた先鋭的な優男。

七彦の最も嫌いなタイプの人間だ。

「……な、なんだよ、おまえ。」

「クズにふさわしい遊戯だな。自殺志願者が、自殺志願者集めて死

なせてよ。」

威圧的な眼光と声音に七彦の腰が引けた。

「へ……へっ。警察か？証拠もないのに、なに言っただおまえ、バカじゃねえの！？」

「その警察の上の特権組織のモンだよ。人間のクセにワームに人々を売り渡したおまえの所業は全部分かってんだ。」

一般の人間が知るはずもない『ワーム』という言葉が出てきたことに七彦は仰天した。

「……な、なんだおまえ」

「カウンター・イントルーダー組織『ネオゼクト』。意味は分かんなくていい。要は、ああいう宇宙人を始末している『秘密組織』ってやつだ。警察に替わっておまえみたいなやつを締め上げるのも俺らの仕事なんぞな。」

無造作に七彦に歩み寄った織田 秀成は、やおら七彦を殴り倒した。

「ッ、ヒイイイ！？」

「……詳しく訊かせてもらうぞ。生きてる人間のクセにポリシーを無くしたおまえは、ヒトの皮かぶって成りすますワームばりにタチが悪い。無駄に酸素消費しやがって、タダじゃおかねえから覚悟しろ。」

数寄屋 亮介・2

「……大丈夫？」

「……うん。」

春瑠に肩を貸し、亮介は春瑠を連れて瓦礫の山と化した街を歩いていた。

一体、なにが起きたのか分からない。

あの戦いの場所から一步出た無人のビル街は、いつの間にかこうなっていたのだ。

それこそ、一度絶望した時に感じた終末の風景そのものであったが、もう絶望はしない。

春瑠が、いるから。

「……。」

今まで感じたことのない充足感に、晴れやかな気分になる亮介。

せつかく今日買ったばかりの服が汚れてしまったが、なに、洗えばいいだけのこと。

瑣末なことを気にしなくなった自分の心変わりに、少しだけ驚愕する。

あの大男や暴力男に出会ってから、色々と分かったこと増え、そして変わったと思う。

少なくとも、もう自殺しようとは思わない。

「……亮介は、大丈夫なの？」

「俺は平気。」

春瑠の気遣いが嬉しい。

こうして支え合っていけたら、きっとどこまでも行ける。そんな気がする。

「亮介。」

そこへ、あの大男が現れた。

一体なぜこんなところにいるのか。

いや、当然のことだ。あれだけいた緑の化け物が一匹残らず消滅したのは、彼らがここに来たからだ。

見れば、大男の向こうの大きな瓦礫に、腰掛けている暴力男の姿と、反対側の瓦礫に立つ白スーツの姿があった。

「……ありがとうございます。俺はもう、大丈夫です。」

恐らく、助けに来てくれた彼らに対して、出会ってからのも含めて亮介は礼を告げた。

だが、大男の用事は別のところにあるようだった。

大男は、亮介の言葉に鷹揚にうなずくと、春瑠のほうを見て口を開いた。

「そっちの娘は、ワームだな？悪いが、生かしてはおけない。」
その言葉に身を硬くする春瑠。

亮介は、春瑠を背後にかばうと、サソードヤイバーを手前にかざした。

「……春瑠は、俺の大切な人です。邪魔をしないでください。」

瓦礫をかき分けて現れたサソードゼクターが、跳躍して亮介の左手に収まる。

両手を水平にかざし、サソードヤイバーにゼクターを装着した。

《ヘンシン！》

『仮面ライダー サソード・マスクドフォーム』に変身する亮介。

「本気か？亮介。」

『……本気です。 春瑠、伏せて。 キャスト・オフ。』

《キャスト・オフ！》

身をかめた春瑠の頭上をマスクドアーマーが飛んでゆき、『仮面ライダー サソード・ライダーフォーム』が現れる。

《チェンジ！スコピオン！》

「……変身。」

《ヘンシン！》

大男も『仮面ライダー クライプ・マスクドフォーム』に変身する。遠くで、暴力男も、白スーツも、それぞれ変身していた。だが、遠くの二人はその場から動かず、事を傍観している。

『だが、わたしの使命はワームを全て駆除すること。 いかなる事情があろうと、看過すること、まかりならん。 それを邪魔立てするなら、亮介。 覚悟はいいか？』

『……そっちこそ。 俺の邪魔をするなら、……容赦しません！』

亮介は、ゼクターの尾を引き上げ、再び倒し込んだ。

チャージアップを施し、クライプへと躍りかかる。

『うわあああ！？』

剣を振りかぶり、そして一刀両断。

クライプ・マスクドフォームは真つ二つになって爆発した。

『……良い覚悟だ。もう大丈夫なのだな？』

剣を振りきった体勢の亮介の真横に立つクライプ・ライダーフォームが、顔も見ずに呟いた。

『……はい。春瑠のことは、万が一の時は、俺が責任を取ります。』

ふ。と微笑する音。

『亮介がいるのだから、そちらのことは、わたしの知ったことではないな。……ではな。もう会うこともあるまい。』

そして姿を消すクライプ。

ジェイルも、マホークも、そこから姿を消していた。

「……亮介？」

サソードゼクターがデバイスから離脱してゆく。

変身を解除した亮介が、振り向いた。

「……もう、大丈夫。行こう。」

「……うん。」

数寄屋 亮介・3

「！ そうだ、これ……」

途中で立ち止まり、ポケットから度重なる乱闘でくつちやくちやになった包みを取り出す。

「さつき、渡そうとして、あんなことになっちゃって……」

だが、春瑠が開いた包みの中身は、破損もなく無事だった。

「あはは。かわいい。」

時期ではなかったため、ハロウィングッズとはいかなかったが、それは小さなシルバーのコウモリのブローチであった。

それから季節が変わり。

「ちゅーかさー。カネ、貸してよ」「てかさ、こいつなんか生意気じゃね?」

「……。」

白昼の街角で、亮介は三人の少年に壁に追いつめられ囲まれていた。
「……せつ。」

だが亮介は、目の前の少年の胸倉を掴み、そこに全体重をかけてぶら下がると、両脚を跳ね上げて、両足で背後の壁を思いきり蹴り付け、目の前の少年を全身で押し除けた。

「おわ!?!」

「……………!?!」

そしてそのまま脇目も振らずに全速で逃走を開始する。

指定した待ち合わせ場所に、春瑠が待っていた。

「ごめん!遅れた!」

「大丈夫。……なにかあった?」

「ううん。別に。」

巧くいった。痛いのも恐いのも、相変わらず嫌いだが、自分の目的をはっきり持つことができ、邪魔なものを迂回するという思考も得た。

今のああした連中のことも、もう顔も思い出せないし、自分の目的に関係のないものと割り切れるようになった。

日常を生きてて、障害に遭っても、それほど「辛い」とは思わなくなつた。

少し前までは、それだけで死ぬことばかり考えていたのに、それが嘘のようだ。

「（あの人たちの、おかげだな。）」

大男や暴力男のことを思い出して、亮介はそこでまた未だ自分が彼らの名前すら知らないことに気がついた。

かつて一度そのことに気付いた時があつたがそれどころではなくなり、あれきり訊くのを忘れていたのだ。

「（あちゃ。……。）」

春瑠というワームを伴うことを決めたため、もう彼らと会うことはできない。あの時、亮介はライダーシステムを扱う者として、彼らとは袂を別つたのだ。

でも、感謝している。

「（おかげで、俺は成長できた。……「かくてサナギは羽化せり」、なんて。）」

巧いことを思い付いた気になって、亮介は、数歩先で怪訝な顔でこちらを見ている春瑠に追いついた。

『サナギ』の名を冠したこの人工島で、俺はこれからも成長していく！

ライダー

走り去る少年の後ろ姿を、物陰から眺めている者たちがいた。

「……………ま、まーやるじゃねえか。」

「だから、もう大丈夫だと言っただろう。」

「ていうか、私は暇じゃないんです。もう行きますよ？」

今にもそこから飛び出していきそうな体勢で誤魔化すようにうなずく伊達 新星と、その背後でばやく台場 和馬と明智 智晴である。
「……………」

そして黙って立ち去ろうとする赤いミラーグラスをかけた男、火場。
「おい！？ どこ行くんたてめえ！？」

「……次の観察ポイントだ。というより、なんなのだおまえたちは？」

一体どこで発見されたのか、数寄屋 亮介を見張る火場の元に、ぞくぞくと彼らが現れたのだ。

「だいたい、亮介にライダーシステム寄越したのはおまえみてえじゃねえか。なに考えてんだ！？」

「別に。あの少年は、ただの観察対象で、ゼクトも戦力に取り込もうなどとは考えていない。だが、ネオゼクトが取り込むつもりなら、この場で排除するぞ？」

「けっ！？ やれるモンならやってみやがれ！？ じゃなくて、こちだつてそんなつもりはねえよ！……ただ、亮介が心配で来てみたら、てめえがいるからよ」

「母親ですかあなたは。」

「……………！？」

明智 智晴のつつ込みを機に喧々囂々とする彼らをさて置き、亮介の後ろ姿を見送った和馬は、微笑してそのまま振り返りその場から立ち去っていった。

台場 和馬

『生きてさえいれば、必ずいいことがある』などという御為ごかしは、和馬はハナから持ち合わせていない。

どんな事象も、それを受け取る主観によって『良い事』にもなるし『悪い事』にもなる。

要は当人の考え方ひとつであって、そして和馬は他人が何を考えているかになど全く興味がない。

ただし、『自ら死ぬのはもったいない』とは考える。

あの時、投身自殺を試みた亮介を助けたのは、単に『救える生命を救った』だけのことで、それ以上でもそれ以下でもない。

もしあの後亮介が、どこか遠く和馬の与り知らぬ所で再び自殺して死んでしまったとしても、それは仕方のないことだ。

だから、その亮介がああして自分の都合で生き始めたことには素直に嬉しく感じているのだ。

だから、あのワームの娘も亮介に任せた。

ならば、亮介への心配はこれまで。

和馬は『自分の生きる目的』を邁進するべく、次の仕事場へ向かっていった。

e n d

最終話（後書き）

二次創作と言いつつ原作のキャラクターが出てこないこのような作品は、いかななものでしょうか。鉄槻は、既存の世界・設定に自分の設定を付け足して膨らませるのが大好きなもので。こうして一本書いていくうちに固まってきたこのキャストたちを使って、またなにか書いてみたいかと画策中。またいずれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5449b/>

クリサリス・エマージュ 仮面ライダー カブト 外伝

2010年10月9日19時43分発行